

気ままな短編集（二次
創作）

久遠ノ語部

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某掲示板にてお題を頂き作った作品を、その場所で吐き出したままなのも勿体ない……じゃあ、こっちにも投稿しておこう。

そんなノリで投稿します。

なので、更新不定期。特に細かい設定はありません。

基本的に1ページ完結型のSSを予定しています。

——え、某掲示板が何処かって？

それは自分で探してみて下さい。

恐らく、此処への投稿はFGOやFATE系の二次創作がメインとなります。

折角閲覧して頂いているので、良い暇つぶしにでもなれば幸いです。

目次

お題1：しーくれつとのーと — 1

お題2：君と二人で、星を見る — 7

お題3：〔サボりと食事は適切に〕

14

呼び名 — 20

お題4：一杯の汁 — 27

お題5：蒼天爽気の微睡 — 38

お題6：星が語る御伽話 (gland o

rder) — 44

お題7：ジェットなメンテナンス

52

今年もまた、あなたと新しい春をゆく

59

お題8：魅惑の夜食〔現パロ注意〕

67

食事のお供

お題9：ルート違いの悲劇

83

お題10：慣れた味と見知らぬ記録

96

お題11：ベーコン争奪戦!!

105

剣を作る者

115

お題12：サンタアイランド仮面……

? — 129

お題13：触媒鑑定 in 召喚ルーム

136

	お題 14 : UDON DAY	146	日々を取り戻す戦いの、一時の団欒
	お題 15 : 古き友人との語らい	156	254
	お題 16 : 夏の魔物	161	お題 22 : 語る名を持つ、ということ
	お題 17 : とあるイベント時のカルデア	168	276
	より		お題 23 : (身内自慢)
	お題 18 : マーリンチゴ苦労様、じゃあ次	177	妹とその友達、時々弟
	にいこう		主無くとも、人は在り
	空の下を二人で過ごす	193	317
	お題 19 : マイルームの惨劇未遂		300
234	お題 20 : 聖剣のお手伝い	225	286
	お題 21 : 渡り鳥のように、前へ		

お題1：しーくれつとのーと

「マスター……おや、居ないのか」

数多のサーヴァントを従える我がマスターだが、普段の姿は数多の英霊を従えるというより一人の友人として、家族として共に過ごしている。だからだろうか、俺のようなホムンクルスにも良くしてくれている。有り難い限りだ。そんなマスターからマイルームに来て欲しいと呼ばれたので来てみた方がいいが、どうやら別件で外しているようだ。数多の英霊に好かれる稀有な我がマスターのことだ。きつと他の英霊と話しているのだろう。

「……よし」

ならば、待つことにしよう。幸い、読みかけたまま放置された本が数冊部屋に散らばっている。時間が余れば、それを読みながら待てばいい。

マスターのマイルームに置かれた数冊の本を纏めっていると、あるタイトルに目が奪われた。

【ニーベルンゲンの歌】

「——これは」

かの大英雄、ジークフリートの伝説だ。今、自分がこうして居られるのは、全てあの大英雄のお陰だ。万感の思いで息を吐く。何しろ、そのジークフリートもこのカルデアに居るのだ。また出会える時があるなど、それこそ奇跡と言えるだろう。例え、あの時の大英雄では無いとしても、ジークフリートであることは変わりない。

気を取り直して、数冊の本をタイトルが見えるように机へ置き、椅子へ座る。

——思ったより、マスターの戻りが遅い。

気がつけば、ニーベルンゲンの歌を手を取っていた俺だが、目的はマスターからの呼び出しだ。探しに行こうかとも思ったが、それではマスターと入れ違いになると考えて踏み止まる。ふと、マイルームの扉からマスターのベッドへ目を移す。

「——ん？」

よく見ると、ベッドの下に一冊の薄い本が落ちていた。

「俺としたことが、見落としていたか」

拾ったそれは、マスターの日記だろうか。タイトルも何もない、だけど使い込まれた形跡のあるそれは、長い間大事に持っていたことが分かる。きっと、このカルデアにて出会った様々な経験、英霊やマスターとして勉強したことをこのノートに書き残しているのだろう。大変、勤勉なマスターだ。

「我がマスターは——」

何かを読んでいる。憑きものが付いたように、何かを、真剣に。

「ジーク？」

嫌な予感がする。最近は、忙しくて部屋の整理も出来ていなかった。それに、つい先日赤いオカンが整理をしたばかりだ。タイトルが見えるように置かれた本が数冊。借りてきた本はあれで全てだ。では、あれは何だ。

そ、それにしても、ジークから返事が無いのも珍しい。恐る恐る、ジークが何を読んでいるか覗き込んで――

「いい、いい、いやあああああああああ！」

硝子の心が砕け散りそうになる。それは、それだけは誰にも見られたく無かったというのに……！

「マ、マスター……来ていたのか。済まない、気が付かなくて」

驚きながらも謝ってくるサーヴァント、ジーク。気兼ねなく話せるサーヴァントの彼に見られてしまうとは……不覚！

「そうだ、マスター。一つ言っておかなければならないことがある」

畏まって何を言うのだろうか。待たせてしまったことだろうか。予め机に置いておいたお陰で被害を受けなかったお茶請けだろうか。しかし、ジークは私と秘密のノート、そしてタイトルが見えやすいように置かれた本に目を向けていた。

「かの大英雄、ジークフリートは」

ああ、彼は今、私に晩鐘の鐘を鳴らそうと言うのか、無自覚のまま。次に口を開く時が怖い、瞬きのようなこの一瞬が、永遠のように感じられる。

——汝の首を断つか。

ハッ、私は今、何を考えた。サーヴァントであり、友人でもあるジークがそんなことを言う訳が……

「マイルームでも、このノートに書かれたように、同じクラスメイトとしてマスターに甘い声、というものを掛けているのだろうか」

おお、神よ、どうして私にこのような試練を……いや、神霊いるんだけど。いけない、こういう時は、柳生さんに倣って……我が心はふ、浮動。し、しかして自由に、自由に在らねばならぬ。

「それと、他のサーヴァントも同じように言っているのだろうか。この「カルデア高校、私と七色のサーヴァント!」にはそう書いてあったが。もし、他のサーヴァントもマイルームで言っているのならば、俺もその甘い言葉、というのを言わねばならないな。いや、しかし、俺にはルーラーが……」

——死告天使

ああ、あの鐘の音が聞こえ、

「マスター、どうしたんだ。マスター」

この後のことはよく覚えていない。

——令呪3画を使ってコンティニューしますか？

いや、そんな選択肢あつたらとつくに選んでいるわ！

お題2：君と二人で、星を見る

人が疎らになった公園にある噴水の前、それが彼女との待ち合わせ場所だ。

少し夜風が冷えるが、厚着をしているから問題は無い。問題は、彼女が体を冷やしてしまわないかどうか、だ。手持無沙汰から夜空を見上げると、満天の星が夜空を埋め尽くしている。

周囲に誰も居ない時、草の匂い、一面の海、そして、青空や夜空。一面を埋め尽くす光景を

その昔、何度も僕たちは見てきて来た。

——誰の記憶にも残らない開拓者、僕達のことを呼んだのは誰だったか。

周囲に誰も居ない時、あの日々の後から物思いに耽ることが多くなった、仕方ないことだと思いたい。

——その昔、長い、長い旅をした。一度の人生では間違いない程の貴重な、されども凄惨な旅をした。それは人理を巡る大冒険、明日を焼かれた僕達が最後に足掻いたあの場所で、僕達は人理を守る戦いに身を投じた。

フランス、ローマ、オケアノス、ロンドン、アメリカ、ブリテン、そしてウルク。

その地その地で様々な人に助けられ、様々な人に裏切られ、そうしてまた、僕達の次の旅へ赴いた。それは、この先の人生にも言えるのだろう。この旅に終わりなんてない、この足が動かなくなるまで。僕達という旅人は今という時間を飛び続けているのだ、世界が回っている限り。

「——懐かしいな」

あの頃に戻りたい、とは口が裂けても言えない思い出だけれども、今から思えばあの日々はあまりに輝かしく、そして、生きることにも必死だった。これからも、この先も、生きることがこれほど大変だ、と思った日々はこの先もないだろう。

あの頃の拠点——カルデアは既に解体され、僕達も他のレイシフト適性者と共にカルデアを去った。まあ、僕達に関しては、カルデアにいた皆が上手く逃がしてくれた、と言うのが正しいのだけど。そうして懐かしく、だけでも懐かしさを忘れてしまった実家に戻った後、見たことのない金額が口座に振り込まれており、顎を落としたのは今でも思い出せる。

というか、未だに実感が湧かないことすらあるほどだ。まあ、その時こそどうしようか焦ったものだったが、その辺はダヴィンチちゃんが上手く誤魔化してくれていたらしい。流石は世紀の天才だ。それと、変わらない笑顔を浮かべて、もう一つおまけだよ。と言って彼女が僕に託したのが——

「先輩！」

「マシユ、久し振りだね」

あの時と変わらない、けれど以前とは比較にならないほど眩しい笑顔を向けるマシユ。

「はい！」

カルデアから出た彼女は今、考古学を専攻しており、将来は様々な時代の文化財の保護に携わりたい、と言っていた。勿論、それらは僕たちがレイシフトで見たモノではないけれど、マシユはドクターや様々な時代の英雄達が大事にしてきたモノを守りたいのだ、と意気込んでいる。あの人が見たら、和菓子を落としてしまう程に泣いて喜ぶのだろうか。

「それにしても先輩は凄いですね」

彼女に褒められるとどうも照れ臭くなる。こればかりはあの時から変わらないらしい、顔に熱が集まるのがよく分かる。

「国籍を問わず、様々な子供たちに向けた授業を世界に行っているじゃないですか」
きつとそれは、あの時の世界の命運を賭けた大冒険が無かったら、考えすらしなかった道だろう。

「それは大袈裟だよ、マシユ。普段と変わらない授業を色んな子供たちが見て、世界つ

てこんなに面白いんだ、って思つて欲しくて色んな所で授業をしているだけなんだから」

僕達の世界は広く、未知に溢れたものだと思う。だけど同時に、厳しく、残酷で、特に人はあらゆる手段を使つても表現できない程の多面性を一人一人が持っている。

「それに、さ」

「どうしました、先輩？」

夜空に輝く星を想う。生きるために、星を求めた日々を想う。

「あの時から、僕たちは沢山の人に助けられて此処にいる。色んな人が様々な思いをしているから、今があるんだ」

そして、それは一般の人に限つた話だけではない。

——民を愛したフランスの王妃と憎悪に濡れた聖女、古代ローマを作つた男装(?)の王と未来のローマを愛した神祖、海を踏破した女海賊と世界に悪名を轟かせた海賊、父に深い執着を見せながら、叛逆ではなく守る為に力を奮つた円卓の騎士、人々の治療にその生涯を歩んだクリミアの天使、その多くが武人として生きたケルトの英雄達、王に最期の忠義を果たした騎士と守るがため、非情に徹した円卓の騎士達とその王、ウルクを統べる王と三女神、そして、原初の母であると共に世界を壊すことしか出来なかつたティアマト。そして、僕達を守るために全てを捨てたドクターと魔術王、ゲーティア。

あの日々を忘れることなど出来ないだろう。あそこでは、様々な出会いと別れがあった。そうした出会いと別れを繰り返して、こうして生きていられるのは様々な奇跡の積み重ねなのだ、と思うと共に、この世界の一瞬一瞬が替えの効かないものなのだ、と噛み締めることが多くなった。

「先輩、それは——」

マシユも俺が何を思ったか気付いたんだろう。二人で一緒に、星を見る。

終わらない命なんてない、そして、死者は還つてこない。今はこの時しかないのだ。だから、今、この時を生きている、その事実を大切にしたい。それは、あの旅が終わり、還つてきて暫く経つた後から、強く、強く思うようになった。例えば、その先に何が起ころうとも、それは、それだけは変わらないだろう。例えば、その先に何

「ねえ、マシユ」

「何でしょうか、先輩」

「一つ、聞きそびれていたことがあった。」

「そろそろ卒業する、って聞いていたけど」

「はい、皆さんのお陰で無事に卒業出来そうです！」

「じゃあ、何処に行くかも決まってるんだね」

用意のいいマシユのことだ、その辺は心配していない、ないのだけど……何故かマ

シユの顔が赤い。

「えつと……そのですね。幾つか誘われたんですが、お断りしました！」

「えっ!？」

これは、予想外だ。ただ、決まっていなかった場合のことを一応考えたことがある。

「で、それですね、先輩……」

「マシユ」

恥ずかしそうに顔を下げ、マシユの顎を上げ、視線を合わせる。これはこれで恥ずかしい。

「ちようど、古い文化財とかを子供たちに教える人が欲しいなって思っていたんだ」
マシユの顔に笑顔が戻る。ああ、やっぱりマシユには笑顔が一番だ。

「もし、良かったら手伝ってくれるかな」

まあ、こう聞いておきながら、一つだけ分かっていることがある。

「はい、はい!」

——思い出したことがある。彼女の手を取ったあの日から、僕の世界は変わったのだ。

「先輩、これからもよろしくお願いします!」

だからこれからも、二人で手を取って歩いて行くこと。そう、あの日と変わらずに手

を握って。

お題3：【サボりと食事は適切に】

「あーあーあー、原稿が終・わ・ら・な・い〜」

お昼ご飯を食べる為に作業場を出たのはいい、だが、直ぐに部屋へ戻るつもりはない。姫らしくないって。そりゃあそうですよ、何故なら炎を纏った蛇がいるからだ。怖い、戻りたい訳がない。そりゃあ、予定より少し遅れているとは言え、まだ鐘に籠る必要はないはずだ。

何処かで彼女と同じものを、と聞こえた気がしたが、気のせいだろう。嫌だ。まだ時間はある。たまたま先の展開が浮かばないだけなんだ。だから、休憩と言って作業から逃げ……食堂に行けばマーちゃんも居るかなーと思っただけど、現実は甘くないらしい、とほほ。マーちゃんさえ味方につければ何とかかなると思っただけだ。今はもう、殆ど食べ終えてしまったカレーを掬う素振りで誤魔化すことが精一杯だ。

「済みません。こちら、宜しいでしょうか」

「え、あ、その、はい」

あ、新しいイケメンがいるー！　そういえば最近、マーちゃんが目を真っ赤に染めて虹色の石を虚空から引き出していたけど……こういうこと？

「驚かせたならすみません。まだ全員に挨拶が出来ていないようでした」
白ランに褐色肌、い、今までのカルデアでは見たことないタイプ……！

「私はアルジュナ、アーチャーのサーヴァントです」

わ、わ、姫に自己紹介!?

「よ、よ、よろしくお願ひします。私はお、刑部姫です……」

イケメンオーラが眩しい！ というかその匂い、とても辛そうなのですが……

「オサカベヒメ……マスターの出身のサーヴァントでしょうか。よろしくお願ひします」

何このイケメン紳士サーヴァント！ 白ラン着ててイケメンとか生徒会長か！

「カレー、ですか」

「ええ、スパイスの効いた食事を、と聞いたところカレーならどうか、と言われまして」
なるほど、それでカレー。それにしても、姫が食べていたカレーよりも遥かに辛そう
なカレーを汗もたらさず食べるとは。カレーの黄ばみが取れないことが悩みの生徒会
長とか思ったが、そんなことは無さそうだし。って、あつと言う間に半分を食べ終えた
……？

「………そういえば、先程」

「は、はい。何でしょうか」

何故だろう、背筋に悪寒が走る。え、背中に蛇でもいる……？

「清姫でしたか、確かあなたを探していましたよ」

白ランのイケメンサーヴァントさん、今、あなた何て言いました？

「確か、休憩が長すぎる……とか。何か知っていますか。オサカベヒメ」

涼やかに聞いてくるな、このイケメン。きよひーが私を探しているのだから、何も知らないはずが無いでしょう。ということは……私は既にきよひーという蛇に睨まれた蛙なのでは。まさか、まさか、ね。水着剣豪の時みたいなのは早々……

「ああ、こんな所にいたんですね」

ブルっとした。あれかな、あれかな。きよひーに見つかったお坊さんもこんな気持ちだったのかな。助けてマーちゃん。

「お昼ご飯を食べに行くと言われておりましたが、どうやら既に食べ終えていた様子ですね。ところで、今まで何をされていたのです」

白ランのイケメンサーヴァントさん、私を助け……って、いつの間に食べ終えているんですけど!?!

「いやあ、ちよつとね。気分転換もしたくて、ね」

「それにしては、随分と時間が経っていると思いませんか？」

時計を見れば、午後の2時30分。やばい、確か、1時には戻るときよひーに言って

いたんだった。は、はわわわ……この状況を脱出する為には……

「い、いや。あのね。ちょっと詰まっていたから、ネタを考えていてね。それでさつきさ、思いついたんだけど、白ラン着た生徒会長とヒロインの物語っていうのはどう、どう？」

あ、目が笑っていない。姫、終わった……

「あらあら、やる気があるのはいいですね。それじゃあ、早速始めましょうか。もう昼食も終わったのでしょ？」

このままでは、鐘の中で原稿を作るハメに……それだけは避けなければ。つてあれ、何時の間にイケメンサーヴァントはブーデイカと話をしているの……？

「ええ、先程彼女も食べていたというカレーも美味でした。あなたの時代でもこのような食事があったのですね」

「いやー、実はここに来て知った、というか。さっきのカレーはエミヤくんって言うサーヴァントに作り方も教えて貰ったものなんだ。昼頃にマスターと一緒に出掛けちゃったけど、彼の料理は皆から人気だね。直ぐに無くなっちゃうことも少なくないんだ」

「そうですか。是非彼の料理も味わってみたいものです」

「そうねー。そこにいる刑部姫もそのカレーを食べていたし、お願いすれば作ってく

皿用意したのですが。折角ですので、私のガラムマサラの感想を聞きたかったのですが
……」

きよひーに連行されて食堂から去る時に、残念そうに呟く声を聞いた気がした。

呼び名

槍の修練場に行き忘れていた、と叫んだマスターがたまたまその場にいたセイバーだ
けを連れて、慌てて修練場へ飛び出したのは午後九時を回った頃。

唐突に姿を消して、戻ってきたマスターに小言を並べようとしたものの、直ぐにミー
ティングがあると行って、マッシュと一緒にミーティングルームへ行ってしまった。これ
ばかりは仕方ない。夕食時も終わり、片付けも殆ど終わった所で明日の仕込みをブー
ディカと二人で行おうとしていた時だ。疲れたように小さくため息をつきながら、誰か
が食堂に入ってきた。

「ふう、思わぬ出撃でした」

「や、どうしたの、アルトリア。珍しいじゃない、こんな時間に」

「いえ、他の職員の手伝いをしていたら、マスターが急に修練場に行かなきゃと叫ばれ
て、慌てて出撃することになったのです」

ブーディカがお疲れ様、と水を渡す。

「ああ、だから夕食の時間にも居なかったのか」

「はい、職員の方も忙しそうにしていましたし、私は英霊の身。一度や二度、食事を抜

いた所で倒れる訳ではありませんから」

「では、どうしてここに来たんだ、セイバー」

これは純粋な疑問と興味からだ。彼女であれば、そのようなことがあれば翌日に顔を出すことが多い。

「そ、それは、ですね」

「ん？」

何故かセイバーが物言いたげな顔を浮かべは、振り払うように小さく首を振っていた。

「ええ、修練場の報酬が思った以上に良かったことを喜んだマスターが、今日の食事のお陰だろうか、と」

「確かに食事で精神的な充足を得ることはあるだろうが、食事で幸運が付くかと言われると……」

その理論で言うのなら、幸運Eの私の料理をマスターが食べることで、マスターの幸運値も下がるのでは。いや、それは相反するか。食材に私のような幸運値が付かないことはマスターが証明しているからな。

「とにかく、今日の食事がとても美味であった、とマスターが言っておりまして……それです」

強情な彼女のことだ。話を聞いてしまったが為に気になってしまったのだろう。ふと、ブーディカと目が合う。彼女もまた、セイバーを気にかけている人物だ。

「色々手伝っているアルトリアが食べられないのは可笑しいからね」
互いの目的が合致したことを確かめるように、同時に頷く。

「生憎、今日の分は殆ど残っていないがね。だがまあ、在り物だからこそ出来るという料理もある。少し時間を貰うが構わないか、セイバー」

「はい、あなた方であれば間違いない美味な料理でしょう」

その信頼、応えて見せよう。ブーディカの視線が生温かい気がするのはきつと気のせいだろう。

広々としたキッチンで、ブーディカがこちらに目を向ける。

「ところで何を作るんだい、エミヤ」

「健啖家の彼女であれば、この時間でも夕食時のメニューで構わないがね。時間も時間だ。軽いものがいいだろう」

出汁を加えた水を鍋で沸騰させた後、一口サイズの豆腐を鍋へ投入。弱火で3分ほど煮た後、とろみを付けた後に溶き卵を少しずつ注ぐことがポイントだ。

「ふむふむ、簡単だけど風邪の時にも良さそうだねえ」

夕食の残り物を上手くあり合わせたブーディカがこちらの様子を見に来たようだ。

「ああ、本当はもう少し手を加えたい所だがね。この時間であれば、この位がちょうどいいだろう」

残っていた白米を小さめの丼へ盛り、其処に先程の鍋の中身をこちらへ移す。仕上げに青ネギを少量加えて完成だ。

「へえ、それも和食なのかな」

「ああ、豆腐にも諸説あるが、大豆から作られて、生で食べる豆腐はマスターの母国、日本のものだな」

「本当に色々知っているねえ、お姉さんも勉強が足りないなあ」

とても、そうは思えない。近代のシステムキッチンを始めとした家電製品は料理の上では便利だが、使い方が分からず四苦八苦する者も少なくないはずだ。何かを作ろうとして失敗したサーヴァントが何騎いたのやら。

「いえ、貴方はとても勉強されていますよ。私は元々、近代のサーヴァントである為に知っていただけなのですから」

「またまたあく、謙遜しちやつてえ。知つていても出来ない人だつて多いはずよ。つと、アルトリアに持つて行つてあげないとね」

お盆に料理を載せてブレイカがセイバーに料理を渡す。

「おお、これは……」

セイバーが料理に気を取られている間に、後片付けをするとしよう。

ふむ、大体片付いたな。明日の仕込みも十分だろう。後は最後の利用者の食器を片付ければ完了だ。

「遅い時間に来てしまったのに、料理を作って頂いてありがとうございました。ブー
デイカ、アーチャー」

両手を合わせ、セイバーが満足げに礼を言う。

「後片付けを手伝いましょうか」

「ああ、大体終わっているからね。任せておいて」

「分かりました。重ねてありがとうございます」

今度こそ、セイバーが食堂を後にした。

後片付けも終わり、食堂の清掃も終えた所でブーデイカに茶を勧められる。私としても断る理由がないので、紅茶を二人分用意して席に座る。暫くはマスターのことや明日の献立について話していた中で、先程セイバーへ振る舞った料理の話をしていた時だ。

「どうしました、ブーデイカさん」

今でこそ慣れたが、召喚された当初こそMrs ブーデイカと呼んでいた。しかし、気安く呼んで欲しいと言う本人の要望もあり、以降はブーデイカさんで通している。私

のような掃除屋が偉大な英霊に対して敬称を付けないのは失礼だろう。キャスターやランサーはどうなんだ、だと。何のことだ。

「いやねえ、どうしてアルトリアは君のことをアーチャーって呼ぶんだろうって」

理由など、言うまでもない。彼女が聖杯への望みを失っていることには驚いたものだが、あの忌々しい未熟者の影響なのだろう。

「さて、どうしてだろうな」

「とか言っているけど、君も君だよ、エミヤくん。君だって他にも沢山のセイバークラスのサーヴァントがいるのに、アルトリアだけはセイバー呼びするんだから」

流石にここの食堂で長く共にした間柄ではないようだ。ウインクしながら言う様は、親戚の姉のような接し易さがある。

「星の祈りが込められたかの聖剣、エクスカリバー。その聖剣を扱う騎士王を真名で呼ぶなど、マスターでもない限り軽々しくは出来ないさ」

「ふうん、それにしても距離が近い気がするけどねえ。まあいつか。話を戻すけど、あれの作り方を教えて貰うことは出来るかな」

「問題ない。今回は丼にしたが、単品でも消化のいい一品だし、うどんと併せてあんかけ風にすることも出来る。他の品との相談にはなるが、比較的相性のいい食材は多いはずだ。近日中にやってみるとしよう」

「おお、これで私のレシピに新しい一品が追加される訳か。また教えて貰うよ、エミヤくん」

「承知した。それに、私も未熟な所がまだまだある。野外調理時の火加減を見る時などは貴方には到底及ばないさ」

「またまたあゝ」

ふとブーディカが時計を見ると、その短針はもう11時を回っていた。

「すっかり話し込んだじゃったねえ。そろそろ休もうかな」

既に茶の片付けは終わっている。ならば後は休むだけだろう。

「マスターはもう就寝しただろうか」

「相変わらず過保護だねえ、と言いたい所だけど……」

思う所があるのか、ブーディカが嫌なことを思い出すように顔を顰める。

「いつの間にか部屋に忍び込まれているのは怖いからねえ」

「この前も、マシユとマスターが血色を変えて私の部屋に来たからな。以前にも、貴方の所に来たのではなかったか」

「うん……そうだったね」

そんな話をしていたこと自体がフラグだったのか、未だ灯りが付いている食堂に飛び込む人物が現れたのは、別の話。

お題4：一杯の汁

「久し振りに食べたいもの？」

「ええ、人理修復が終わって、ようやく落ち着いた所でしよう」

本来だったら両親への顔合わせ一つ程度許されるはずだ。しかし、マスターが居なければサーヴァントは現界出来ないこと、新宿のような亜種特異点が発生したことから、人理焼却の原因であったゲーティアを倒したマスターは、未だ帰省の一つすら出来ない。

「確かに、そうですね」

「パーツと豪華な料理を食べたい時もあるけれど、落ち着いた時だからこそ食べたい料理ってあるじゃない？」

「……けど、ここで食べる料理も、初めの頃と比べると格段に美味しくなったし、作って貰える料理に、不満はないよ？」

初めの頃の食事情、最早懐かしさを感じる言葉だ。自身を含めて、料理経験のあるサーヴァントこそ召喚されたものの、システムキッチンの使い方が分からず、スタッフやマスターに教わった、ということがあった。そうして使い方を会得したものの、今度

は見たことも聞いたこともない食料、という重大な問題に直面した。とは言えど、流石にそこは過去を生きた英雄達。皆が工夫して食べられるものを作っていた。

「あの頃は大変だったわね」

「うん、あの時ほど家庭科の勉強をしておけば、つて過去の自分を恨んだよ」

「そう言えば、マスターの故郷、ニホンの料理も全然食べられなくて、半べそかいたこともあったわね」

「う、それは言わないで、お米は日本人の魂なんだから」

その言葉通り、米への執着は凄まじいものがあつた。微小特異点に行けば、米がないか動き回り、特異点攻略と並行的に発生したトンチキな特異点に赴けば、稲が無いか付近を探索し始めるほどに。そして、一時期カルデア内にて和食ブームが起きる切っ掛けとなつた一言。

「偶にね、偶にだけど、お味噌汁が、和食が食べたいなあつて思うことはあるかな」

「先輩、お味噌汁とは何ですか」

作り方を聞くこうにも、当時はその手に詳しい人物が居なかつたこともあり、見たこともない和食を作ろうと四苦八苦したあの日々。その後、マスターの母国の英雄である藤太や、やたら現代事情に詳しい台所の赤い守護者が来てからは、その問題はあつという間に解決された。俵藤田は兎も角、どうして台所の守護者は古今東西のあらゆる料理

を知っていて、味噌すら自作出来るのだろうか。あのサーヴァントのクラスはグラウンドのシエフだっただろうか。

「でも、そうだなあ。エミヤのお味噌汁もとても美味しいんだけど……」

何処か躊躇う様子が見て取れる。年頃の妹、弟のような存在が、訳あって家族の元を離れた時、やはり思い返すのは……

「偶には、お母さんのお味噌汁が食べたいな」

やはり馴染み深い味だろう。一つの星をぼんやりと見つめるように呟いた、そんな細やかな望みを断ることなど誰が出来るのだろうか。

「そうね、お母さんの味って、忘れられないわよね。いいわ。ちよつと時間が掛かっちゃうかもしれないけど、聖女マルタの名に懸けて、その希望、叶えて見せるわ」

勢いで言ってしまったことは否定できない。だが、マスターの顔が陽だまりのように明るくなったので、これで良かったのだと思う。

「マルタ、いいの?」

「ええ、マスターの細やかなこの願い、このマルタ、確かに聞き届けました」

とは言えど、どんな材料を使っていたか、それが分からなければ作りようがない。味を近付ける為には、和食の心得を持つサーヴァントがいいだろう。そう考えていたのだが……突然、マスターが思い出したように大声を出す。

「あああー、種火の周回へ行くの、忘れてた!!」
そうして、風のようにマイルームから出て行った。

突然ではあるが、考える時間が出来たことは丁度良かったが、大丈夫だろうか。こういう時のマスターはミスをし易いのだが。まあ、今は置いておこう。種火周回なら不利相性でもどうにかなるはずだ。

「味噌を使うのは分かるけど、合わせる具とかどうしていたのかしら」

流石にその辺りの情報は欲しい所だ。豆腐やワカメ、キャベツに玉葱、と具材だけかなりの種類があったはずだ。まあ、それは後でいい。まずは食堂スペースへ向かい、味噌を分けてもらうべきだろう。と、部屋を出た所で待ち構えたように立っているサーヴァントがいた。

「おや、マルタ殿か。丁度いい所に」

「何よ、アンタ」

最悪だ。のらりくらりと突っかかってくるサムライが居たとは。

「何、慌てて出て行ったマスターがな。久し振りに和食が食べたい、と言っていたので、少しな。昨夜は西京漬けの鮭を中心とした和食だったはず。私もそれを酒と共に食したのだが……何故、久し振りに和食が食べたい、と言ったのだろうか、と。興が乗っ

てマスターに尋ねようとしたら、マルタ殿が居たのでな」

恐らく、マスターとの会話を殆ど聞かれていたのだろう。それ以外、検討が付かない。「何が言いたい訳、はつきり言ったら？」

だが、男の顔は涼やかだ。こういう所がイラッと来る。ルーラーの自分であれば、殴り飛ばしていただろうか。

「まさかと思うが、味噌汁には味噌を入れればいい、と思っている訳ではあるまいな」「どういう事よ」

「しがない農民として生きた身故、現代の料理に関しては門外漢だ。だが、そんな私でも分かることはある。もし、慣れない料理をするのなら、誰かに指南して貰った方がいいのでは」

神よ、どうかこの男をタコ殴りにすることを、どうかお許しください。

「で、そのマスターなのだが、ランサークラスとアサシンクラスの種火周回にも関わらず、エミヤ殿を間違えて連れて行ってしまったらしい」

つまり、今の食堂スペースにはエミヤが居ない、ということになる。そして、それだけをわざわざ言いに来たということは、食堂スペースにはエミヤ以外で和食の心得を持つ者が居る、ということだろう。

「アンタを吹き飛ばす前に、やる事が出来たわ」

「おっと、それは残念だ。時間があれば手合わせを、と思っていたのだが」

「その減らない口なら、今すぐ開かなくしてあげるけど」

「これは怖い怖い。では、私は退散するでしょう」

サムライ、佐々木小次郎が姿を消す。気配遮断のスキルでも使ったのだろうか。そんなことより、食堂スペースに急ぎましよう。マスターが帰ってくる前までに。

さて、材料調達も兼ねて食堂スペースへ向かうと、明日の仕込みをしている紅閻魔が居るだけだった。紅閻魔であれば、間違いの無い助言をしてくれるだろう。

「こんな時間にどうしたのちか、マルタ」

そんな紅閻魔が、突然現れた私を意外そうに見てくる。

「実は聞きたいことがあります……」

マスターは一時、彼女の宿で働いていたこともある。何か良い話を聞ければいいのだが。

「聞きたいことでちか。あちきに応えられる事なら答えまちよ」

「実は、人理修復が終わったのに両親の元に戻れないマスターが気になってしまっています。何か食べたい物がなくお聞きしたところ……お母様のお味噌汁が食べたい」と

「なるほど、そういう事情でちか。是非、協力させて下さいでち」

「ありがとうございます」

気に喰わないサムライの話に乗った自分に後ろめたい気持ちがある。だが、結果として良い方向に進んだのだ。殴るのは一発にしよう。

「ところで、そのマスターはどうしているのぢか？」

「実は今、種火周回に出ていて……」

食堂スペースを見渡し、不思議そうに顔を傾ける。

「今日は確か……ランサークラスの種火が出てくる日だったはずぢよ？」

それは、マスターのミスなのです。

「まあ、いいでち。戻ってきたら、マスターが食べていたという味噌汁について、聞いてみまか」

「ありがとうございます」

そうして種火周回から戻って来たマスターから、お母さんのお味噌汁について話を聞いた紅閻魔とマルタは、皆が寝静まった深夜の頃、食堂スペースで寸胴鍋を使って味噌汁を試作していた。紅閻魔様の指示通り、一口サイズにカットした具材と出汁をじんわりと温めていく。程なくして、ほんのりと出汁の香りがマルタと紅閻魔にも届く。そして、用意していた味噌を複数回に分けて少しずつ溶いていく。溶いた味噌と出汁が馴染んでいき、優しい香りがマルタにも届いた。

「……大体はこれで良さそうね。それにしても、ミソつてブイヨンと違って、味が直ぐに出るのね」

これも文化の違い、というもんだらう。てつきり、一回味噌汁を作るのに数時間かかるものと考えていたマルタにとって、嬉しい誤算だ。

「後は仕上げに、と」

マスターの家庭では、これが必ず入っていたらしい。

「……よし」

調理が終わったと見て、脚立から様子を伺っていた紅閻魔が二度、感心したように頷く。

「最初は寸胴鍋を使おうとちたので、どうしようかと思いまちたが。マルタは大人数で食べる料理の方が得意なのでちね」

「弟や妹がいまいましたから。それにしても……ちよつと作り過ぎたわね」

ミスがないように、と寸胴鍋を使ったことがここで仇になった。味見をした所、他のサーヴァントやカルデアの職員が食べても問題ないと言えるが、量が多い。

「どうするんでちか、それ」

「そ、そうよね……」

と、頭を抱えた時、誰かが食堂スペースに入ってきた。

「まだやっていたようだな」

「お前様でちたか。ここは暫く借りる、と伝えたはずでちが」

「それは分かつている。ただ、匂いに釣られた若者が一人、な」

と、台所の守護者が姿を隠している誰かに向かつて、入ってくるようジエスチャーをした。すると、ここそこそとその人物が食堂スペースへ入ってきた。

「ちよつとね、変な時間に寝ちやつたから水を飲もうと思つて」

「マスター!?!」

思わぬ人物の登場に、驚きを隠せない。

「何を言うか、マスター。トイレに行くと言つて部屋から逃げ出した君は、当てもなく廊下を彷徨つていた所を私に見つかったのでは無かつたかね?」

「それは言わないで、エミヤ」

マスターの目と声が死んでいる、何があつたのかを聞くべきではないだろう。エミヤもマイルームで起きたことを語るつもりはないのか、グラスを取りに行く。それはつまり、先程完成したばかりのお味噌汁が入った寸胴鍋の横を通るわけで……

「ここに寸胴鍋があるが、どうして使おうと思つたのだね」

何を作つたか、をばらさないだけマシなのかもしれないが、かなり余計な一言だ。だが、ちよつどいい。

「そ、そうだ、マスター。じ、実は紅閨魔様と協力してお味噌汁を試作していたのだけど、良かったら食べていかない？」

「え、もう出来たの!?!」

マスターの声には、純粹な驚きと喜びがあつた。作つた甲斐があつた、というものだ。「再現できたかどうかは分かりまちえん。だからこそ、マスターに食べてみて欲しいのでち」

やつた、と年相応の笑みを浮かべて、お椀に注いだ味噌汁を渡す。

「頂きます」

深夜の食事なので、小姑のように口うるさいエミヤが何か言うかと思いきや、何も言わずに明日の仕込みや食材の確認をしていた。紅閨魔様から既に話を聞いていたのだろうか。その間、マスターはミソのスープを嘔み締めるように口に含んだままだ。

「……美味しい、なあ」

マスターが、水辺へ一滴の雫を落とすように言葉を漏らす。お母さんのお味噌汁は上手く再現できただろうか。

「ちよつと違うような気もするけど、美味しいな」

残念ながら再現することは出来なかつたようだ。それでも、マスターの顔に陰りはない。

「そうですか、再現出来ればよかったのですが……」

完全な再現とはいかず、少しばかり気落ちする。数少ない我儘くらい、叶えてやりたかったのだが、母の味はそう簡単に再現出来ない、というモノなのだろう。

「ねえ、マルタ。まだ味噌汁は残っている?」

「あ、はい。寸胴鍋で作ったからまだまだ残っていますよ」

「マルタらしいね。じゃあ、もう一杯欲しいな」

何を以て私らしい、と言ったのか。問い質したい思いに駆られました。その要望には応えましょう。

「ええ、分かりました。マスター」

寸胴鍋からお玉で味噌汁を掬い、お椀に注ぐ。

「ありがとう……うん、少し違うけどやっぱり美味しいな。ねえ、マルタ。時々でいいから、この味噌汁をまた作って貰ってもいいかな?」

「分かりました、マスター」

人理修復を成し得た最後のマスターよ。どうかその歩みに祝福がありますように。

お題5：蒼天爽氣の微睡

微小特異点発生の報告を受けて、僕達は数名のサーヴァントと共にレイシフトを起動した。だが、特異点の原因をロマニだけではなく、天才のダ・ヴィンチちゃんまで見つけられない、と来た。結局、この微小特異点は時間が経過すれば自然と消えるものと判明したので、直ぐに戻ってくるように言われると思つていたのだが、ゆるふわリーダーであるロマニが偶にはのんびりと外の景色を見ていくといい、と言つて滞在を許可してくれた。最近、寝付きが良くないことを相談したからか、気を使つたのだろうか。折角なので、護衛のサーヴァントを残して、他のメンバーには食料調達をお願いした。保管技術は現代の方が優れているし、ダ・ヴィンチちゃんも居る。一度採集すれば、プラントを使つて育てることも出来るかもしれない。

「いやあ、いい天気だ。こういう日の昼寝は最高だねえ、マスター」

護衛に残したのは、最近召喚したランサーのサーヴァント、ヘクトール。今は槍を枕にして横になってだらけているが、第3特異点ではその強さを嫌と言う程思い知らされた。

「確かにいい天気だ。温かいけど湿気てないから、いい昼寝日和になりそう」

「とか言いながらマスター、筋トレしているけど暑くないの?」

「そりゃあね。けど、マスターとして出来ることは少しでもやっておかないと」
そんなヘクトールがため息をつく。

「頑張るのもいいけど、休むのも仕事だよ。いざという時に何も出来ないようじゃあ、俺のマスターとして合格は出せないなあ」

のらりくらりとした言葉だが、防衛線を得意とした英霊が言うと一段と重みが増す。いつもならやんわりと帰還を促すロマネもあつさりと滞在を許可したし……やはり、気を張り過ぎているのだろうか。

「そうそう、日頃から無理しがちなんだから、偶にはゆつくり休まないと、な」

そこまで言われたら休むしかない。——うん、折角の昼寝日和なのだ。体を大の字にして寝てみよう。

「分かった。何かあったら起こしてくれる?」

「了解だ。それじゃ、オジサンもだらだらしようかねえ」

それから10分位の時を置いて、マスターがすやすやと眠りにつく。

「それにしても、敵だったマスターに召喚されるとはねえ」

薄っすらと、その事を覚えていた。目的を果たすため、エウリユアレを奪おうとして、

その矢に射抜かれたことを。その後、このマスターが幾つの別れを経たのか分からない。

「難儀なもんだな、最後のマスターってのは」

特別な力もない、只の予備扱いだった子供が最後のマスターとして戦わなければならぬとは。召喚当初は周囲の大人に憤慨したのだが、彼らは彼らで必死に彼を援護していることは直ぐに分かった。そして何より、そんな状況においてもこのマスターは前を向いている。例え、それが虚勢であろうとも。それでも前を向くというのならば、それでいい。サーヴァントとして、何処までも力になるだけだ。

「さて、ダラダラしたかったんだけどねえ」

僅かに羽ばたく音が耳に入り、音を立てないように立ち上がる。

「久し振りに休めているんだ。さっさとお帰り願おうか」

音の発生气配の先にいた敵を見る。見た所、小型のワイバーンが一体のみ。此方に気が付いているとは言え、距離は結構ある。それに、此処からなら衝撃も届かないだろう。

「さて、運が悪かった、と思ってくれ」

標的確認、方位角固定。

「吹っ飛びなあ！」

マスターが目を覚ます事無く、ワイバーン退治は幕を閉じた。

レイシフトから帰還後、他のサーヴァントによる収穫を確認した。流石は森の賢者とも呼ばれたロビンフッド、林檎（金とか銀じゃないよ）や木の実、香草、薬草などがかなり採れたらしい。他にも、肉、魚、塩の調達。オマケにワイバーンの肉も取れたらしい。今夜は食堂担当のサーヴァントは大忙しだろう。ロビンフッドに同行していたマシユも、彼の仕事振りに興奮していたようだ。一時期は昏睡状態に陥ったこともあり、随分と心配を掛けてしまった。だから、今日のレイシフトでも別行動する、と言った時は不安げな顔をしていたが、終わって見れば楽しそうにしていた。マシユには、丁度いい気分転換になったと思う。

「そう言えば、ヘクトール」

一つ、気になっていたことがあった。

「何ですかい、マスター」

「暫く寝ちやっていたけど、何も無かった？」

誰がワイバーンを狩ったのか、だ。今回同行したサーヴァントは5騎。ロビンフッド、マシユ、クーフーリン（術）、ヘクトール、ダビデ。後々思い返すと、本当に微小特異点修復に必要な面子だったのだろうか。よくよく思い出してみると、今回のメンバー選定はダ・ヴィンチちゃんが主導だった気がする。

「いんや、マスターの手を煩わせる事は何も無かったよ」

恐らく、ワイバーンを倒したのはダビデではなく、ヘクトールだ。けど、それを大っぴらにしたくないのだろう。

「なら良かった。敵が居る中で一人のんびり休んでいたら、流石にロマニから怒られちゃうからね。それはそうと、一人で見張りを任せきりにして、ごめん」

一瞬、ヘクトールの目が大きく開く。

「ああ、そんなこと。オジサンは気にしないよ。何しろ、サーヴァントは寝なくても問題ないからねえ。それはそれとして、ダラダラはするけどね」

思わず、気の抜けた声が出てしまう。まあ、どうせならダラダラしたいのは俺も一緒か。

「マスターとして頑張るのもいいが、暢気に楽しく、それで生きていけたらオジサンは満足だからねえ。だらしのない者同士、ダラダラしようぜ」

ヘクトールの言う通り、俺は気を張り詰めていたのかもしれない。だったら、その言葉に乗っかるう。

「そうだね。今度ダラダラする時は、ロマニやダ・ヴィンチちゃんが来ないように見張りよろしくね」

「了解了解、と」

皆がくれた貴重な機会だ。明日も頑張ろう。

お題6：星が語る御伽話（g l a n d o r d e r）

——満天の星々が貴方の行く宙を照らしますように

そんな謳い文句を掲げた一軒の店が、人通りのあまり多くない丘の上にある。曰く、宙とは人が追い求める星なのだ、とマスターの知り合いが言っていたらしい。私には、未だによく分からない。ただ、そんな私でも分かることがある。そこは、星を見るカフェなのだ。と言うのもこのカフェ、店長の拘りから天井がガラスで出来ており、夏の大三角形や冬の大三角形を目当てにやってくる客もいる程なのだ。そんな事情から、遅くまで営業する時がある。酷い時は日を跨ぐ直前まで営業していることもある程だ。そんな時間までバイトをした日は、決まりとして泊まらせて貰っている。今日はそんな日だった。

「いつもありがとうございます」

本日最後の客である、常連の老夫婦が店を後にした。ようやく、ようやく今日の仕事は終わった。置時計を見れば22時を超えて30分ほど、こんなに遅い時間だと、帰りに少し不安が残る。

「リツカさん、今日は泊まりますか？」

「お願いします。それにしても、いいんですか。お代とか渡せていないですけど」

「いいんですよ。それを言うなら、リツカさんは泊まった翌日はお店の清掃を欠かさずしていますよね」

マスターの相方であるマシユさんは、店長の藤丸立香の妻だそうだ。とても初々しい反応をするが、二人の動きはベテランそのもの。営業中は熟年夫婦のように息が合っているのだが、偶に若々しい様子を見せることがある。不思議な人だ、と我ながら思う。

「リツカさん、そろそろ夕食が出来るからテーブル拭きをお願いします」

「了解です、マスター」

更に不思議なのが料理を作っているマスターだ。年齢に合わない、深い落ち着きを見せる方だ。体のあちこちに擦り傷があるものの、ヤから始まる家の出ではないらしい。しかも、英語を始めとして様々な語学や料理に知識があると来た。どんな過去を送ったら、こんな方になるんだろうか。そんな事よりお腹が減った、今にもお腹と背中がくつきそうだ。しかあし、マスターが振る舞う料理は固定客がいるほど美味しいのに、それを無料で頂けるのだから、大変だとしてもこのバイト先は続けられる、と言うものよ。

「テーブル拭き終わりましたマスター。そして、お腹がペコペコです〜」

「はいはい、今盛り付けているから席に座って待っていてね」

ぐうううう〜

は、恥ずかしい。まさか、お腹の音で返事をするなんて。あまりの恥ずかしさに、顔が林檎になりそうだ。少しでも恥ずかしさを誤魔化そうとしてテーブルへうつ伏せた時、不意にこの店で面接した時を思い出す。

——マスターはバイトで稼いだお金を何に使いたいのか、なんて聞いてきたなあ。本当に、何で話そうと思つたんだろうか。

「へえ、世界中を回つてみたい、か」

「……はっ、い、今のは忘れて下さい!!」

「いいね。手の届かない夢だから、手の届かない夢だからこそやってみたいんだね、きつと。いいよ、そういう子は仕事もしつかりしてくれるだろうし。それじゃあ、今度の土曜日から入つて貰おうかな」

恥ずかしい思いこそしたが、いい方向に転がったのだ。今はそんな事よりご飯の時間よ、リツカ。美味しそうな匂いが近くに迫り、反射的に顔が上がる。前を見れば店長が用意した、2つの料理が私の卓に置かれた。

「戴きます……と言いたい所だけど問題だ。この料理はムサカとラタトウイユと呼ばれているんだけど……何処の料理だと思う？」

それにしても、この人のレパートリーは何処まであるんだろうか。幾つもの有名料理店で修業したに違いない。体の傷とか見るに、多分違うんだろうけど。さて、パツと見

た感じでは、片方はグラタン、もう片方は夏野菜の煮込みを。パスタに盛り付けた感じだ。何となくイタリア料理と答えそうになるけど……ああ、ダメだ。そんなことよりお腹減った。

「ほらほら、リツカさんもお腹すかせていますから、早く頂きましょう」

「ああ、マシユ、そうだね。作ったからには、美味しく食べないと」

この声は私のお腹を救う天の声だ。早速、両手を合わせて戴きます。ラタトウイユと呼んだ料理を一口。あ、夏野菜だけじゃなくて、にんにくとオリーブオイル、鷹の爪のパンチが効いている。パスタも乾麺のほすだけど、食感がもちつとしていて。その上、ピリツとしつつも夏野菜の旨味が吸った麺なのだ。これはフォークを絡める手が止まらない一品だ。

「美味しいですね、これ。でも、どうしてお店で出していないんですよね？」

「口に合ったなら良かった。そう言えばそうだね。日替わりのディナーで考えてみるか」

「それじゃあ、今度グルメな友達連れてきますよ、マスター」

「おっと、それじゃあ気合入れないとね」

一方、マシユさんはゆっくり味わって食べている。それにしてもマシユさん、本当に美味しそうに食べるなあ。さて、もう一つのメインも食べるとしよう。ん、既にナイフ

で切り分けていたらしい。数切れあるムサカの一つを皿へ移す。ふむ、下からジャガイモ、ひき肉、ナス、ホワイトソース、かな。これらの層を一気に食べよ、ということか。お、これも何時もながら美味しい。ひき肉は先ほどのラタトウイユの汁を使つて炒めたのだらう。その酸味がムサカの味にパンチを与えてくれる。これには私の胃も歡喜の雄叫びを上げる。マシユさんも黙々と食べ進めているようだ。やはり、美味しいご飯は強い。

美味しい食事を終えて、マシユさんが淹れてくれた紅茶を飲んでいた時、ふと、今日の事を思い出す。あれは、夕方頃だったか。

「そういえば、マシユさん」

「どうしました、リツカさん」

客の一人が店長たちの知り合いだったのか、随分と長話をしていなかったか。

「夕方頃でしたっけ。何か、かすてら……じゃなくて、かるであとか何とかにいた人が来ていた時、結構話していたじゃないですか。昔の知り合いだったんですか？」

マシユさんの体調を気にかけていた様子もあつたけど、何かあつたのだろうか。もしかして、おめでたなのか。でも、お腹を見てもそんな様子は見えないし……つてあれ？

「どう、しました。マシユさん。そんなに驚いた顔をして」

何か、変なことでも言ったかどうか。

「いえ、ちよつとマスターと出会ったことを思い出していたんです。——その昔、私もマスターも、そのカルデアに居たんです」

おお、店長の過去にはそんなことがあったのか。やたら人に好かれるし、色んな言葉を喋れる、と来た。大学の友人でもそんな友達は居なかつたような……一体、ナニモン・ナンデスカ。ム、だとしても少し違和感が。そう言えば、その人もマスターの事をあの時の最後のマスターが、とか言っていなかつたか。名前でも呼んでいたけれど。

「そういえば、仕事中は店長のことをマスターって呼びますが、そのかるであつていう所にいた時もマスターって呼んでいたんですか？」

マシユさんが何かを懐かしむように、このカフエの名物である半球体の天窓から顔を覗かせる、満天の星空を見る。

——これはまさか、恋バナの予感か。甘つたるい反動が来るが、店長の過去を探る数少ないチャンスだ。耐えろ、リツカ。

「……………」

だが、そんな私の予想とは裏腹に、マシユさんは愛おしそうに片手を握る。何か、大切なものを思い出しているかのように。

「マシユ。どうしたの」

げ、店長が戻ってきた。ってあれ、マシユさん。突然、店長の手を握ってどうしたんですか。

「どうしたの、昔のことでも、思い出した？」

この人たらしめ。この人が独身だったら、婚約者候補の引く手数多なんじゃなからうか。

「はい、カルデアにいた時のことを知りたいってリツカさんが」

「ああ、それで」

不意に、マシユさんを見る店長の目が優しくなる。不覚にも、ドキッとしてしまった。

「ねえ、リツカさん」

「は、はい」

あ、マシユさんの目が怖い、怖い。

「そういえば前に世界を回りたいって、言っていたよね」

どうして、今その話をするのだろうか。

「実はね、不本意だったけど、俺にもあったんだ。まあ、世界を回ったというよりは、過去の世界に飛び込んだって言うのかな」

……何、だって？

まさか私以外にもそんな奇特な人物が目の前に居たとは思わなかった。と言うか、過

去の世界に飛び込む、とはどういう事なのだろうか、まるで分からない。

「もう、あれから随分と時間が経ったんですね、マスター」

「つてあれ、珍しい。あの店長がマシユさん以外の話で照れ臭そうな顔をしている。と
 いうか、マシユさんも照れ臭そうにしているぞ。どうということだろうか。」

「そうだね、詳細は話すと不味いんだけど、御伽噺として聞くなら構わないよね？」
 そうしてマスターが一度、大きく息を吸う。

「——それは、未来の在処を求める旅路」

マシユさんが、マスターの片手を愛おしそうに握る。

「その旅路の詳細を知る人も、話す人達は居ないけれど、確かにそこに在った物語」

マスターは何を話そうとしているのだろうか。だが、そんな思いとは裏腹に、私の耳
 はその続きを望んでいた。

「——それが俺達の Grand Order」

——その物語と呼応するように、夜空の星々も一層輝いている気がした。

お題7：ジエツトなメンテナンス

生前は刀の手入れを欠かさなかった私ですが、最近あることで悩んでいます。それは……

「このジエツトパック、一体どうやって手入れをすればいいのでしょうか」

そう、ヒロインXXさんから（強制的に）頂いたジエツトパック、これの手入れが分からないのです。あの人に頼もうにも、結構テキトウだからなあ。はあ、この前のバルンタインで少し飛ばしてしまったし、点検をしておきたいのですが。どうせサーヴァントだから問題ないと言う人もいますが、これ外付けですからからね!?

「おや、オキタ・J・ソウジさん。顔を沈めて、どうしましたか」

おっと、この体に改造した方が現れましたよ。くっそう、この体になつてから快調なのは認めますが、ノツプにはひたすら笑われるし、土方さんには沢庵とも、誰かのおっぱいを視る目でもない、よく分からない目で見られるし……散々です。とは言え、ちょうど出会えたのは好都合です。

「実はジエツトパックの点検をしようと思いましたが……ただ、説明書が何処にもないので、自分で出来るか分からないんですよね」

「それでしたら、取り付けてしまった責任もありますので、私もお手伝いしましょう。幸いにして、ここに説明書が……あれ、何処に行った？」

悪い方では無いのは分かりますが……このいい加減さはどうにかならないものなのでしょうか。

「え、えーと」

「ま、まあ何とかなるでしょう。確か、何かあった時の為に説明書は残っていた筈です。いざ、改造室（オペルーム）へ！」

このままでは、ヒロインXXさんみたいな新たなパーツを取り付けられるに違いはない。何とかして脱出を……ちよ、ちよつとジェットの調子がですね。

「じ、自分でやりますから……だ、大丈夫ですよ？」

「それだったらいいのですが……？」

……バスン

「……へ？」

「オキタ・J・ソウジさん、ジェットから煙が！」

まさか、こんな時に限ってジェットの調子が……！

くく改造室（オペルーム）にてくく

ギューイイイイイン、ガガガガガガガッ!!

「これ、本当に大丈夫なんですかー!？」

「ええ、きつと大丈夫です。この説明書によれば……」

「きつと、きつとつて言いました!？」

ウイイイン、ウイイイイン

「あ、この説明書、ジェットパックじゃなくて、炉心のM・DRIVEの方でした」

「ちよつとお!? やつぱり、この人に頼むんじゃなかった!!」

「まあまあ、問題無かつたのですから気にせず進めましょう。折角ですから、全体的に

確認して見ますか」

「だくれ〜か〜……」

く〜改造室（オペルーム）にて、点検終了く〜

「改造室（オペルーム）に説明書が在って、本当に良かった……」

ああ、何事もなく点検が終わって、本当に良かった。生きてるって素晴らしいです。

「ギヤラクシー・セル・ドライブも動力源のよく分からないエネルギージェムも問題なし、炉心のM・DRIVEも快調でしたよ」

あの、動力源何て言いました？

「強いて言えば、ジェットパックを一時的に最大出力で稼働させた位です。まあ、あの位ならこちらで言うスピード違反に取締される程度のこと。機体には殆ど影響しな

いでしよう」

「心配ないと言つても、私の生命維持が掛かっているんですがあ!？」

「ノツプに聞いた、コフツ、が無いだけいいじゃないですか」

ノツプに私の病弱スキルを聞いている、だと。

「その件については、かつてないほど絶好調ですが!」

くそう、このままではノツプのライバルポジションすら奪われてしまうのでは？

「ところで、どうして今日は点検しようと思つたんですか」

む、急に踏み込んで来ますね。この人は。まあ、隠すほどでもないので話しますか。

「……何かあつた時はどうしても気になつてしまふんですよ。快調だったので暫く忘れていた、というのもありますが。実は、少し前にユニヴァースで話題になっているというお菓子があると聞いて買い出しに行つていたんです。その時、少しジェットで飛ばしていたこともあつて点検したいなく、と」

「あく、私も銀河有数の名店で予約していた品物を急いで取りに行つていましたからねえ……ハツ」

ヒロインXXさん、頭に電流が走つたような顔をしています……

「もしや、オキタ・J・ソウジさん。バレンタイン、バレンタインですね」

「ずい、と距離を埋めてくるヒロインXXさん。」

「私もデザイン含めて1からチョコを作って貰いましたから、お互い様ですね。マスター君には大き過ぎない、と微妙な目で見られましたが。二人で食べれば問題なし。もしかして、私と同じく銀河銘菓店でチョコを買った、ということでしょうか」

く、この余裕。これがお姉さん属性、というやつですか……!」

「ま、まあそんな所です。因みにヒロインXXさん、何処でチョコを作って貰ったんですか。来年以降の参考にしたのですが……」

因みに、土方さんには沢庵を買いました。「スペーストシゾー考案」と表紙にありましたが、まさか、ねえ?

「ああ、あそこですよ。○○○○、幸いネームレスレッドが懇意にしていたことと、普段は使わない銀河宇宙の権力を使って頼み込んだ結果、予約に成功しました。残念ですが、あそこは高いですし、新参者のオキタ・J・ソウジさんでは予約が難しいんじゃないかな、と」

確か、確かあそこは、並みのサーヴァントでは門前払いを喰らうという、あの!?

「うわあああ、聞いた私がバカでしたー!」

「そういえば、オキタ・J・ソウジさんはマスターへ何を買ったんですか?」

「は、この流れで聞きますか?」

何なんだ、相変わらず何なんだ、この人は。

「……恥ずかしいことに、美味しいお店を知っていても、仕事が忙しくて行く時間が取れないんですよ。私も私で、何かしらの特異点で地球に来る時以外はカップ麺生活が多くて……」

見る見る内にヒロインXXさんの顔が沈んでいく。ああ、これがマスターの言っていた【疲れたOL】という属性でしたか。

「成程、そういうことでしたら。実は最近有名になったあのお店で……」

おや、ヒロインXXさんも知っていたらしい。少し目に光が戻って来た。

「あそこでしたか。風の噂では、流離のシェフが考案した品が女性に大人気、とか。まさか、ネームレスレッドじゃあ無いですよね、あはは」

ネームレスレッドって誰だろうか。名無し、赤……誰だろう。

「少し前まではコスモヌードルが私の主食でしたが、最近はコスモカレーも出てきていますね。これがまた、キャンプの時に食べると……」

恍惚の表情を浮かべていますが、インスタント食品が主食って、大丈夫なのでしょう。いや、仮にもサーヴァントだから問題ないのか。

「そ、そうですか」

「ええ、実は太古の昔に失われた幻の料理、カレーライスがユニヴァースでも再現されましたね。他の店でも出るようになりましたが、元祖の味を再現にはまだまだ時間が掛

かるのだとか。それはそうと、こっちの食堂にもいるネームレスレッドのカレー。どうも、彼のカレーから懐かしい味がします。どうしてでしょうか」

初めて食べる時は抵抗感がありましたが、食べて見れば老若男女が好む食べ物なのは納得です。偶にノツブの配下やインドの方々が暴走するようですが。因みに、土方さんは福神漬けの代わりに、沢庵と一緒に食べます。

「そうだ、折角です。今からネームレスレッドに頼んでみましょうか」

「は?」

「さあ、善は急げと言うでしょう、行きますよ、オキタ・J・ソウジ」

この人、いつも突発的なんですよねえ。そう言えば、土方さんの沢庵が切れそうでしたね。ついでに、あの台所の守護者をお願いしておきますか。

今年もまた、あなたと新しい春をゆく

——いつか冬が過ぎて新しい春になったら……二人で……花を見に行こう

その約束は今年もまた果たされ、真冬に降り積もる雪のように、時を重ねてゆく

——春が来た

この季節になると、決まってお重箱に料理を詰めて桜を見に行く。それが、私と先輩のちっぽけな、だけど大切な約束。弱くて、身勝手な私を守ってくれた、誰よりも強い先輩が私にくれた、持ちきれない程の幸せと抱え過ぎた罪の証。

「桜、そろそろ行こうか」

「はい、先輩」

今年も料理を詰めた重い荷物を先輩が持ち、私がレジヤシートを持って家の鍵を閉めた。先輩がくれた眩しい世界の中で、私は先輩の横に立つ。

「悪いな、桜」

「いえ、先輩の方が重い荷物を持っているんですから、この位は任せて下さい」

「そう、だな。料理の腕も洋食では叶わないしなあ。それに和食の腕もそろそろ危ないか」

洋食にはそれなりに自信がある。ライダーにも姉さんにも好評だ。だけど……

「そ、そんな事はありませんよ。まだまだ教えて欲しいことは沢山あるんですから！」
和食特有の食材に関する知識や調理方法など、まだまだ先輩には届かない。

「そ、そうか。なら、俺も面目躍如、かな」

頬を人差し指で掻く先輩の横顔が愛おしい。

——その日々は夢のように、温かく

「そういえば……ライダーは後から来るんだっけ」

「はい、バイト先から少しだけお手伝いして欲しい、と言われちゃったみたいです」

「あんまり遅くならないといいな、ライダー」

「ああ、それでしたら大丈夫です。確かに残念そうにはしていましたが、長くはならないから先に行っていて欲しい、と」

「何だかんだでライダーも楽しみにしているからな、毎年」

「はい」

人前に出ることを好まないライダーだけど、この日は私達の約束の場所へ一緒に向かう。そうして、料理を少し摘まんだ後は本を読むことが多い。だけど、その年の春、花を見に行く日は別だ。不意に、一陣の風が私達を撫でる。

「——あ」

花びらを散らした春の暖かい風が、長かった冬を想起させる。生きていて良かったと感じたことなど、先輩と過ごした時間以外で無かったけれども、それでも、寒かったあの日々はもう過去のこと。空は今日も青く、降り注ぐ日差しは先輩のように暖かい。

「今年も満開ですね」

「そうだな。今年も満開だ」

気が付けば、集合場所の公園に着いていた。

「桜、士郎」

「こつちよ、士郎、桜ちゃん」

一足先に来ていた姉さんと藤村先生が私達を呼んでいる。

「行こう、桜」

「はい」

——私達は重い扉を開くようにゆっくりと歩く、変わる季節を踏みしめるように空を埋め尽くすように咲いた満開の花は、今年も変わらずに咲いている。そうして今年もまた、1年が始まるのだ。

「いやあ、やっぱり春は花見よね。桜を見てビールを一杯、桜ちゃんと士郎の料理を食べて更にもう一杯。くう、酒を飲む手が止まらないぜえ」

「もう出来上がってるよ、この虎は……」

「しくろく、ビール頂戴」

「はいはい」

藤村先生らしいと言えば藤村先生らしい。先輩が呆れた顔でお重箱から料理を取り出せば、空になったプラスチックのコップにビールを注ぐ。

「聞いてくれるう。最近ね、私を見る皆の視が日に日にさあ……」

苦笑いを浮かべながら、先輩は藤村先生の愚痴を聞く。

「桜、私にも貰えるかしら」

「はい、姉さん」

「藤村先生程のペースではないが、姉さんも同様だ。」

「……これ、桜が作ったの？」

「あ、分かりましたか？」

「……うん、あの家みたいに優しい味がする。とても美味しいわ、桜」

気恥しくなつて目を逸らしてしまう。横目で見ると、姉さんも同じだったらしい。顔を赤くしていた。間桐に引き取られてから過ぎ去ってしまった時間を取り戻すことは出来ないけれど、これからは姉さんとの時間も大切にしていきたい。

「……まだありますから、食べますか？」

「そ、そそ、そうね。折角の桜の料理だし、ね。もう少し、頂こうかしら」

——今年もまた、良い一年になりますように

暫くして、公園に見慣れた人が目に入る。

「おや、もう始まっていましたか」

「ライダー、もう用事は終わったの？」

「はい、桜。それとこれを」

ここへ来る前に買ってきたのだから。すると、姉さんに絡んでいた藤村先生がにゅつと、こちらに顔を見せる。

「あ、ライダーさんじゃなくい。それでえ、桜ちゃんに渡した物はなあに？」
期待一杯の視線から逃げるように、ライダーが私の方を向いて答える。

「バイト先からの差し入れです。急に来てもらったから、とお酒を頂きました」

「さつすが、ライダーさん。桜ちゃん、桜ちゃん、それじゃあ一つ頂こうかな」

「昼なんだし、あんまり飲み過ぎるなよ、藤ねえ」

先輩はため息をつきながら、藤村先生と便乗した姉さんにお酒を注ぐ。

「ライダーはどうする？」

「そうですね、まずは料理を頂いてから、貰ったお酒を頂くことにします」

「分かった。それじゃあどれから食べる、ライダー？」

満開の花に青い空、そうして隣にはライダーが、姉さんが、そして、あなたがいる。

——今日もまた、私は生きていく。償えない影を背負ったまま、あなたの側で太陽が西に傾き始める頃、私達は長い階段を昇って、柳洞寺へ足を運んでいた。

「衛宮に桜さん。今日もお参りですか」

「よお、一成。まあ、そんな所だ」

「こんにちは、柳洞さん」

軽い会釈をする。

「衛宮は勿論だが、桜さんもお変わりないようですよ。何よりです」

水の入った水桶と柄杓が二つ、登って来る間に入れてくれたのだろう。それを有難く頂戴する。

「行こうか、桜」

「はい」

本堂の伽藍を外れた所にそれは在った。これは私の罰。贖えない罪を背負いながら、日常を謳歌する私への罰だ。そう、それは聖杯戦争で行方が分からなくなった多くの方を纏めて弔う公営墓地だ。お線香を焚き、石碑に水を掛ける。一部枯れた花があつたので、それを新しい花に挿し替える。

「……………」

時折、思い返すことがある。もし、私がアンリマユに同調せずに堪えることが出来た

なら、これほど多くの方を殺してしまうことは無かつたのではないかと。もし、私が居なければ、間桐では無かつたら、と。

「……くら、桜！」

「……は、はい」

包み込むように握られた両手を見る。これから私は生ある限り、贖い続けるだろう。あの時は私が死ねば全てが終わる、と思っていたけれども。

「大丈夫、俺はここに居るから」

——それでも私の側について、私の幸せを願う大事な人たちが此処に居る

何時までそうして居たのだろうか。気が付けば、空は橙色から深い青の色に変わりつつあった。

「ありがとうございます、先輩」

あなたが側にいてくれる。たったそれだけで、私の世界は色を取り戻す。それなのに、これ以上ない程幸せなのに、どうしようもなく苦しいのだ。

「ご心配、お掛けしました」

喜びも苦しみも等しく、私とあなたの手のひらで溶けて逝く。例えば、自分が原因では無かつたとしても、自分がしてしまった事を戻す事は出来ないのだ。

「……大丈夫か？」

大丈夫か、と言われれば今は大丈夫かもしれない。だけど、また何時か。自分のしてしまつた事に耐えられなくなるかもしれない。

「……お手入れも終わりましたし、帰りましようか。先輩」

それでも、あなたは側にいる。私を守る、と言つてくれた。

「分かつた。帰ろう、桜」

正義の味方になる、と言つたあなたの夢を壊してしまつた、あなたの体を壊してしまつたにも関わらず、あなたはそれでも手を取つて帰ろう、と言つてくれた。だからこそ……

——私の側に入れてくれるあなたの側で、今日も幸せと罪を想い続ける

お題8：魅惑の夜食【現パロ注意】

バイトの時間が長引いたせいで、帰りがいつもよりも1時間半も遅くなってしまった。時計を見れば午後の10時30分。

「はあく、遅くなっちゃったなあ」

アパートまでは徒歩5分で着くものの、バイトの休憩時間に食べたカ○リーメイトだけではお腹が持たなかったみたいだ。

ぐ、ぐぎゆるるうううう……

抑えきれない腹の虫が静かな町によく響く。夜遅くに食べると太るという話はよく聞か、今日は無理だ。この空きっ腹を抱えて眠れる気がしない。

「仕方ない、か」

生憎、部屋には冷凍ご飯もインスタント食品もない。乾麺はあるけど、それに耐えるだけのお腹具合でもない。財布を見れば夏目さんが二人、これだけあれば十分に食べられるだろう。家への帰路を急ぎつつ、手近な店を探すとしよう。とは言え、こんな時間まで営業しているこの辺りのお店の殆どは居酒屋だ。酒を飲めない私が居酒屋に行くぐらいなら、コンビニに行つて適当な弁当でも買った方がいいだろう……そう思つてい

た私の諦念を他所に、美味しそうな匂いが漂ってくる。え、本当に？

「え、この辺にラーメン屋なんてあったっけ？」

私のフードサーチャーから逃れられる店などあったのだろうか。美味しい店は大体マシユと行つた記憶があるんだけどなあ……決めた、今日はこの未知のラーメン屋にしよう。

——この時間にそんなカロリーの暴力は大変魅力的かと思いますが、体型には影響しないのでしょうか？

何故か、此処にはいないマシユから警告を受けた気がするが……気のせいだろう。それに、今の私の空腹具合は空腹時に獲物を見つけた肉食獣のようなもの。そんな程度のカロリー、後で運動して消化すればいい、あのレオニダスブーツキャンプでな！

「……つと、そんなことより店を探そう」

お店が閉まっていたら、食べられるモノも食べられなくなってしまう。左右を確かめながら、匂いの元を辿っていく。……此処の曲がり角だろうか、匂いが強くなっている。匂いに惹かれるまま道を進んでいき、目的の場所に到達した事を、頭と鼻で理解した。

「……嘘お？」

私が驚いたのも無理は無いと思う。だって、そのお店は今時珍しい、屋台販売式のラーメン屋だったのだから。まあ、軽トラなんだけど。しかし、昭和の香りが何処とな

く漂うその外見、暖簾には慣れない日本語で書かれた「ラーメン食堂」、店主は一体何を参考にしたのだろうか、それとも古い価値観に捕らわれた人なのだろうか。それはそれで趣を感じられていいんだけど、何よりもお腹が減った。暖簾の内側に置かれた長机と丸椅子を見るに、席は五つほど。今は幸いにして、他のお客さんが一人居るだけだ、そのお客も何処かで見たような気がするが、後回しでいいだろう。何しろ、深夜のラーメンにありつけるのだから。

「すみませ〜ん、今やっていますか？」

「……ああ、やっているぞ」

何処かぶっきらぼうな若い声、てっきり厳つい面の店主かと思っただけで、若い店主のようだ。それにしても聞き覚えのある声だった気がするけど、気のせいだろう。気を取り直して、注文する為に店主の顔を見て……その感覚が間違っていないかったことを知った。

「……え？」

「は？」

マジか、マジかカドック。君が店主だったのか。

「カ、カドック!?!」

「お前、藤丸立香か。こんな所で何やってんだ!?!」

「それはこっちの台詞だよ、カドック。こんな面白……じゃない、美味しそうな店をやっているだなんて聞いてないよ!」

「誰が面白いだ、誰が!」

まさか、知り合いがラーメン屋台をやっていたとは、世の中とは存外に狭いのかもれない。と、同時にお腹の虫が鳴る。カドックが笑ったら面白可笑しく拡散してやろうかとも考えたが、ぶつきらぼうに座れ、と一言。とりあえず、客として扱ってくれそう
だ。

「あらカドック、その女性とは随分親しい様ね」

何処か、見覚えのあるお客さんがそんな事を挟んでくる……って、アナスタシアさんだった。しかも、カドックが見ていないタイミングを図って、口に人差し指を付けるジェスチャーを……うん、暫く黙っていて、ということだろう。

「君は一体、何を言うんだ?」

「だって、そうでしょう。私と話す時はいつも一步離れた話し方をするのに、そののりツカさんにはそんな様子が無いじゃない」

カドック弄りが楽しいのか、アナスタシアさんの声の上擦っている。うん、カドックは相変わらずだなあ。

「だとしても、君には関係ないだろう」

「いいえ、大有りだわ。あなたのラーメンが宝蔵院のラーメンより勝るその時を見る為に、私はこうして足繁く通っているのよ。それなのに……」

いつもの漫才、ご馳走様です。本当に、見ていて飽きが来ない。ただ、そろそろ私のお腹の方もエマーゼンシーコールが鳴りそうだ。

「……アナスタシアさん」

「リツカさん、面白い所なんだからもう少し……」

「今、面白いつて言ったよな、アナスタシア」

そして、二人の会話を遮るように鳴る私の腹の虫。

「ごめんなさいね、リツカさん。つい……」

「まあ、カドック弄りはアナスタシアさんの日常だもんね」

「……分かっていたら止めろよ、藤丸立香」

それはいいけれど、止めたら止めたで、別の面倒事が起きると思うよ。主にカドックが、だけど。

「それでアナスタシアさん。カドックのラーメンのおすすめは？」

「断然、シヨウユね」

このアナスタシアさんはサバスタグラムで「わたくし、この一杯のために生きている……！」と言うコメントと共に様々なラーメンの画像を上げる猛者だ。彼女の選択に間

違いはないだろう。

「カドック、醤油ラーメンで」

「分かった……少し待っている」

カドックが私の注文を請けて、調理を始めたようだ。アナスタシアさんと雑談をしながら、背伸びをしてカドックの様子を見ていたけれど、麵の湯切り、チャーシューなどの具材のカットなど随分と手馴れている。この屋台を始めて随分と経つのだろうか。以前はロックが好きと聞いていたが、まさかラーメンを作る屋台をやっていたとは。今度、マシユや他の方も連れてこよう。

「……出来たぞ」

「待つてましたー」

まず目に入るのは醤油をベースとした透明感のあるスープの湖とその湖の大地である主役の細麵だ。……む、よく見れば、細麵は市販の業務用の乾麵ではない。恐らく、小麦粉から作ったものだろう。アナスタシアさんが通うというだけはある。具材の方はスープの湖の上を船のように浮かぶ薄切りされたチャーシュー二枚と、器の縁に佇む黒い海苔。そして、細麵の大地に散らされた青ネギと濃い緑のホウレン草。パツと見た感じは、シンプルなラーメン。ただ、スープから漂う香りは醤油だけではなく、魚介類や他の具材も使っているようにも感じられる。いぎ、実食……と、その前に。

「ありがとう。お金はこれでいい?」

「ああ……」

お釣りを受け取って、財布に仕舞う。

「よし、頂きます!」

まずは透明感のあるスープを一口。折角なので、味を確かめるように口の中で転がしてみると、醤油だけではなく鰹節の優しい香りが口の中で広がっていく。あと一つ、二つの隠し味がありそうだけど、何だろうか。

「……美味しい!」

「良かったわね、カドック」

「うるさいぞ、アナスタシア」

やはり、サバスタグラム界のラーメンマニアの言う事に従って良かった続けて麺をズツと啜る。うん、麺に絡んだスープの香りが口に広がって……次の一口が待ち遠しい。お腹が減っていたのもあるだろうが、これならマシユも今度連れてこよう、絶対に。そう言えば、この麺を啜るのって、海外の方は出来ないと聞くけどアナスタシアさんは出来るのだろうか。ふと横を見れば、残り少ないラーメンから箸で掴み、レンジに入れてから麺を口にしていた。やはり、難しいのかもしれない。続いてチャーシュー。お腹が減っていたから、厚い方が……とも思っていたが食べてみてその考えを撤回する。こ

のスープの味に絡ませるために、カドックはこの薄さになっているのだ。そして再び、麵を一啜り。うん、これを一回しか食べないのは勿体ない。今度、何処でやっているのかアナスタシアさんに教えて貰おう。カドックにせがんでも言ってくれない気がする。

「やあ、美味しかった。ご馳走様！」

気が付けば、あつという間に器の中身が空になっていた。横を見ると、アナスタシアさんの器も水洗い程度で済ませられそうな程だ。ふとカドックを見ると、薄く笑っている。

「全く、こんな時間によく食べられるな」

「そりゃあ、昼がバイトの休憩時間に食べたカ○リーメイトだけだったんだよ。そりゃあ、お腹が空いちやうよ」

「それはそうだろうが、こんな時間に女性がラーメンを食べると太るんじゃないか？」
今何気なく返したその言葉、それが凄まじい地雷を踏んだ事に気が付いていただろうか。まあ、嫌でもカドックは理解させられるんだけど。

「……カドック？」

あゝあゝ、お客さんは私だけじゃないんだよ。

「……ご、ご馳走様カドック、またやっていたら来るね！」

いつも通り、アナスタシアさんと言い合いをしていて返事を聞くことは出来なかった

が、その内にまた食べられる、そんな予感がしていた。

そうして後日、アナスタシアさん經由で場所を教えて貰った私がマシユと一緒にカドツクの屋台へ行こうとした矢先、噂を聞き付けたキリシユタリアさんと合流して阿鼻叫喚の夕食となったのは別の日の事。

食事のお供

BOXガチャ——それは多くのマスターが血走った眼でひたすら同じクエストをこなし、集めた券でひたすらBOXに納められた景品を引き当てては、戦力であるサーヴァントをひたすらに育成するという……傍から見れば何かの病気に罹ったのでは、と思われる奇行である。特に、召喚されたばかりのサーヴァントはその奇行に訝しんだ視線を送るのだが、疲れ切った眼で「今、今頑張らないと、後が辛いんだよ……」と泣きそう、かつ覚悟が決まった眼で言われてしまつては、すごすごと引き下がるしかない。後の説明は、居残り組のサーヴァントやマシユが説明する事が殆どだ。そして、マシユはマシユでマスターの様々な作業を見送る事しか出来ず、かと言って一人休むことに気が引けているようだ。ミーティングなどの予定が無ければ食堂に居る事が多くなった。そんなマスターが周回続きの生活に浸っていた早朝、目を覚ましたマスターが目を擦りながら食堂に入ってくる。

「いや、今日も周回日和だねエミヤ」

「そんな日は存在しない、と言いたい所だがこの時期は、な。それはそうと、きちんと食事を取りに来たのはいい事だ。これを食べるといい」

「え……これって」

私が渡した食事を見て、マスターが顔を歪める。

「君の事だ。APがオーバーしていたら、此処に足を運んでなどいないだろう。ならば、食事時くらい、ゆっくりすることだ。本来は過度な周回など認めるつもりなどないのだが……ロビンフッドの「顔のない王」を使った追跡や清姫のストーキングスキルを利用した追跡すら振り切った上、そのまま周回に向かう君を見てしまつては、な。力を入れるのは分かるが、体を壊しては何の意味もない」

あの時は本当に驚いた。只の人間の執念が英霊を凌駕する……方に一つはそんな事もあるかもしれないだろう。それが勝利の為ではなく、素材の獲得に発揮されるとは予想も出来なかつたが。

「……はい、はい。面目ありません。それじゃあ、いただきます」

渡された食事を見て一度嫌な顔を見せたマスターだが、私の忠告が効いたのか素直に受け取った。酷い時はそのまま逃げだそうとするから、山場は過ぎたのだろうか。まあ、そんな事をさせない為のメニューでもあるのだが。そんなマスターの様子を見てみると、次の訪問者がこの食堂にやってきたのが目に入った。

——エミヤのおかんめ。

そう呟いたら、どんなに良かったか。そんな事を言ったら間違いなく耳に入れられる

だろうし、追加メニューが入ることが間違いなしだろう。あえて、食事に時間が掛かるものを用意してくるとは……山場は越えたからいいけれど、この時期だけは手軽に食事を取りたかったのに。

——だからこそ、久し振りの和食とは……ズルいにも程がある。

渡された皿は五つ。お味噌汁とご飯、主菜と副菜二つというザ・和食の構成だ。

「いただきます」

まずはお味噌汁。カルデアに来てからはめつきりと食べる機会が減ってしまったが、偶に食べるお味噌汁がどれだけ美味しい事を思い知った。具材はシンプルにネギと豆腐、味噌汁を一口含めば、味噌と共に僅かに魚介の香りが鼻を通っていく。いつもながら美味しいのが憎い。これでは、ゆっくり食事をするしかないじゃないか。

次に副菜。一つはキャベツを使ったサラダのようだ。温めたことで緑の色が濃く見えるキャベツを塩昆布とツナで和えたのだろうか。口に含むと、ワサビのツンとした香りが良いアクセントになっている。これではご飯が欲しくなってしまう。たまらずお椀を見ると、そこに盛られていたのは白米……と思いきや玄米だった。確か、エミヤが言うには栄養価のバランスが非常に良いのだとか。そう言えば、作り方にコツがあるとか言っていたような気がしたが……他にも何か忘れてるような。

「……？」

玄米を一口含んだ時、お椀の近くに紙が掛かれたメモ書きに気が付いた。

——マスター、玄米はよく噛んで食べないと消化不良を起こす可能性がある。幾ら周回続きの日々が続いているとは言えど、体調は崩したくないだろう？

「……………」

おかんの英霊が残したメモ書きは見なかったことにしよう。もう一つの副菜は納豆、とろろ、おくら……それらの食材が絹豆腐を覆うように敷かれた小皿。ネバネバ食材は体にいい、という奴だろうか。何れもご飯の供になり得るものの、豆腐とも相性がいい。カルデアに来てからエミヤが作った醤油瓶を添えているのが何とも憎たらしい。

「……………先輩」

「あれ、マシユ？」

この時間に来るとは珍しい。

「おはようございます。エミヤさんから食事を頂いたので一緒に食べませんか？」

「うん、いいよ」

図ったのか、と思わず視線を向けそうになったが、流石に起きる時間を予測してマシユを呼び出すほどのあの男は悪趣味では無いだろう。そんな事をやりかねないお供にはあるが。

「今日は和食なんですわね」

「うん、多分エミヤが図ったんだと思う。暫く周回しかしていなかったから」

「……そ、そうですね。近頃のマスターはとも鬼気迫る顔をしていましたから」
自覚はあったが、そんなに酷い顔をしていたのか。

「そんなに酷かった？」

「はい、締め切り間近に迫ったアンデルセンさんのような」

「ああ……」

否定が出来ない。最近はやく落ち着いたと言えど、暫く林檎生活が続いていたのだから。

「先輩、これは何と言う料理なのでしょう？」

そんな中、私がまだ手を付けていない主菜を指す。パツと見は豚の生姜焼きにも見えるのだが、使われている肉は鶏肉だったからだろう。

「多分だけど、甘酢で漬けたんじゃないかなあ」

そんな予想を立てながら一口。うん、予想通りだ。度重なる周回に疲れた体に、甘酸っぱいタレが染み渡る。それと、お酢に漬けたからなのか、心なしかお肉が柔らかいような……そんな食べ物を持つてくる辺り、やはりあの英霊はクラス：アーチャーなどではなく、クラス：おかんの間違いではないだろうか。

「甘酢が効いていて美味しいですね、先輩。思わずご飯が進んでしまいます！」

ようやく落ち着いてきたし、今日くらいはゆつくりしようかな。

マスター達の様子をキッチンから伺うのは、エミヤ、ブーディカ、それとキャットである。

「おお、食事で釣ろう作戦は成功だな、チーフレッド」

「キャット君か。まあ、前にもこんな事があつたからな……」

何処か遠い目をするエミヤをタママモキャットが突く。

「何があつたというのだ、一体。まさかご主人、かつては優秀なマスターというだけではなく、サーヴァントすら下したことがあつたとも言うのか」

「似たような所だ。サーヴァント相手に一步も引かなかつた、という面ではな」

ブーディカも同じことを思い返していたのか、苦笑いを浮かべるのみ。

「ところでチーフレッドよ、今日作っていた料理はいつも通り教授出来るのか」

「今回の料理は比較的簡単だからな。やり方さえ覚えれば、此処に居ないメンバーでも短時間で作れるだろう」

「それじゃあ、あまり時間が無い時でも作れるのか。相変わらずレシピの幅が広いねえ、君は」

エミヤを感じた様子で褒めるブーディカだが、当の本人は首を横に振るのみだ。

「いえ、私がこうして料理が出来るのは、知っている食材や調味料、それに調理機材が

あるからこそですよ」

「そうやって君はまた謙遜してく。あ、さっきの料理は私も気になるから、一緒に教えて貰おうかな」

「おお、ブーデイカも気になるのか。では、チーフレッド。他の者が大勢来る前に教えるがよい」

「承知した」

こうしてまた一つ、カルデアキッチンに新たなレシピが追加されるのだった。

お題9：ルート違いの悲劇

山で楽しくピクニック……だったはずが、大量の脱落者を出す結果となった夏の特異点。後から振り返れば、偽のマスターが現れたり、色々とおっかないサーヴァントである虞美人が二人に分裂していたり、と自分がマスターの側に居ない間に色々なことがあつたらしい。噂の一つによれば、自分同士の戦いもあつたらしいが、一体何の事を言っているのだろうか。

さて、何だかんだで最後まで残った数少ないサーヴァントであるマンドリカルドは、この間起きていた事象について改めて確認しようと思ひ立ち、マイルームに戻ろうとするマスターに声を掛けて、特異点であつたことを確認していた。

「……つまり、この間の特異点は様々なホラー映画をモチーフにしていた……つてことすか」

「うん、幽霊やゾンビが群れになつて襲つてきたり……サーヴァントでも考えられないような怪力をした敵が追いかけてきたり……みたいな。ホラー映画でも色々な種類があるんだ」

「へえ、怖がる為の娯楽があるんすね。マスターの時代は」

生前を思い返したものの、娯楽事情に疎かったマンドリカルドは生返事をするばかり。

(やつべー、折角話して貰っているのに、分からないことばかりだ)

「まあ、そんな俺も今まで進んで観たことは無かつただけだね。当事者になると結構怖いものだったよ……負けず劣らず、変な展開も多かつたけど」

「……変な展開って何すか？」

唐突に発生する特異点(イベント時空)での出来事は、毎回のように訳の分からない展開が起きる、ということとは既に身を以て知っている。配達時には無我夢中で動いていたから忘れていたが、何だ、チェイテピラミッド姫路城って。

「例えば……ホラー現象が起きた時、お約束のように死亡した後、当然のように復活するパイセンとか、ジャンクフードを食べながら幽霊退治とか、扉を破壊する髭とか……うん、どうしてああなつたんだろう」

当事者であるマスターすら、そんな感想なのだ。それを聞いたマンドリカルドが理解できるはずもなく、段々と死んだ魚のような目にな変わっていく。

「……つまり、あの水着の聖女様が使い魔にしていた鮫みたいな話が起きていたってこと、つすか」

訳の分からない最たる事例を挙げて、何とか納得しようと言葉にした直後、

「ゴホツゴホツゴホツ……」

突然、マスターが咳き込む。

「だ、大丈夫、つすかマスター？」

「な、何でも……ないよ」

しかし、その表情を見る限り、何でもないようには見えない。何か、トラウマを思い出させてしまったのだろうか。そんな自分が嫌になる。

「だ、大丈夫じゃないと思うつすけど」

（あの慌て方を見る限り、過去のイベントで絶対何かあったな）

「……いや、大丈夫だつて。あの時は兎も角、今は姉と認識してないから大丈夫、大丈夫」

「そ……そう、つすね」

（確かに、あの水着の聖女の方がよっぽどホラー、つすよね、何だ、姉つて。空気が悪くなつてしまった、どうしようか。何か、何か良い話題を……そ、そうだ）

「あー……話は変わるんですが、マスター」

「ん？」

「……その手の娯楽つてよく分からないんですけど、マスターの時代には色んな作品があるらしいじゃないですか。それで思ったんですが、（今後の為になるような）ホラー映

画つて下のライブラリーで見れたりするんすかね」

「うーん、紫式部さんに聞けば探してくるんじゃないかなあ。あ、そう言えば、前に借りた本を返すの忘れていたから、俺も一緒に行こうかな?」

「い、いいんすか、マスター」

(正直、一人だと何借りたらいいか分からなかつたんで、助かつたつす)

「うん。それにしても映像作品かあ……特異点が出てくるまでの休憩時間に観た、聖杯戦争に関する映像資料も見ただけど、あれは面白かつたなあ」

「え、聖杯戦争の映像作品?」

「うん。俺はあの作品の主人公みたいになんか戦えはしないけど、ああいうのもいいな、つて」

(聖杯戦争で戦う……サーヴァントがメインの話つすかねえ。マスターが面白いというなら借りて見ようか)

くく偉大にして恐るべきされど可憐なる紫式部図書館にてくく

「……と言う訳で、ホラー映画を何本か見繕ってもらつていいかな、紫式部さん」

「お、お願いします、つす」

「承知致しました。マスターが借りられた本は私の方で戻しておきますね。ところで、マンドリカルドさん。他にも映像資料を借りたいとのことでしたが……どんなジャ

「ンルを観られたいのでしょうか」

「出来れば今後の特異点に役立ちそうな資料があればいい、つつけど……」

（うう、あまり話さない人だし、目のやり場にも困るし、いつも以上に緊張する）

「特異点、ですか。そうですねえ、色んな事が起きますから……探すだけ探してみましよう」

そんな俺の心境など知る由など無く、マスターの依頼を請けた紫式部は慣れた様子で作品を探し始める。

（俺みたいな三流サーヴァントが役に立てるとしたら……そうだ）

「……あ、あと、一ついい、つつか」

別の用事で呼ばれたのか、丁度マスターが図書館を後にしていた。

「何でしょうか？」

（マスターが観たことあるんだし、聞くなら今しかない）

「あの、その……聖杯戦争に関するいいライブラリって、あるんすか。もし、あるなら観てみたい、つつ」

（レイシフト先では何が起きるか分からないんだし、色々な事例を知っておいた方がいいよな、きつと）

ダメで元々、無ければ他の資料を見ればいい。そんな考えで聞いたのだが……

「そういえば最近、それに関連する新しいライブラリが入ったんですよ。実はまだ、私も観ていないのですが……良かったら先に観ますか？」

意外なことに、そんな作品があるのだと言う。

「え、いいんすか。まだ、式部さんも観ていないのに」

「他にも色々な作品がありますので。それで、鑑賞されましたらこちらまで戻して頂けたら、と思います」

（この人も観たいだろうに、何か悪いことをしてしまったつす）

「あ、ありがとうございます」

それからマンドリカルドは、紫式部から他のホラー映画を借りた後、折角だし、という心持で図書館の内部を散策していた。資料を探してみると、トロイア戦争やヘクトールに関する書籍もあったので、それらを即決で借りることにした。そうして、貸し出し手続きを終えた時、図書館の入り口からマシユと一緒に入ってきたのが目に入る。やはり、誰かに呼ばれた後、ミーティングでもしていたのだろう。

「ごめん、マンドリカルド。途中で離れちゃって」

「いいんすよ、マスターは忙しいですし。それに、受付にいる式部さんが見繕ってくれたんで」

俺が何を借りたのかが気になったのか、マスターが徐に此方の手元を覗き見る。

(おっと、これだけは見られたくないの……)

そうしてトロイア戦争の書籍やホラー映画などの資料をマスターに見せる。

「ああ、マンドリカルドってヘクトールさんのファンだもんね。ホラー映画、かあ。最近そういう目には遭ったけど、作品は観てなかったからなあ。もし、面白い作品があったら今度借りてみようかな」

「うつつ。マシユさんも一緒に観られる作品だったら、是非おススメしとくつつす」

「そ、そうですね。マスター、今度一緒に映画を観ましょう！」

マシユが若干照れた顔を見せながら図書室を後にする。それを観て、マスターは子供の成長を見守る親のような顔を浮かべていた。

「マシユも期待しているようだし、面白いのがあったら宜しくね」

「うつつ」

そんなマシユを仕方ないなあ、と言いたげな顔を浮かべて、マスターはマシユの後を追った。

「……ふう、何とかこれはバレずに済んだか」

幾つか借りた映像作品の内、マスターには見つからないように他の作品の下に隠した作品の一つ。

「聖杯戦争……つつすか。俺みたいな三流サーヴァントには縁が無いと思うつつすけ

ど」

この時のマンドリカルドは知らなかった。今後の為に、と図書室から気軽に借りた聖杯戦争に関する映像資料は、マスターが言っていた作品と違っていたこと、そしてその作品を観ることで、彼の心を深い傷を残す事になるなど。

〳〳視聴中〳〳

「ひえっ、やっぱり冬木の聖杯戦争って恐ろしいメンバーしか居ないっすねえ。こんな所に居たら、即座に逃げるしかないっすよ……え、何すか。あの黒い影」

「ちよ……待つっす。冬木のキャスターって神代の魔女っすよね。その魔女がこんなあっさり……あの蟲のマスター、人外にも程があるっすよ」

「嘘……っすよね。クー・フリーンが何も出来ずに敗退……というか、サーヴァントですら勝てないあの黒いのは何何すか……怖、これが、聖杯戦争……」

「ヒエツ、騎士王すらあの黒いには勝てないんすか」

〳〳冷たい花びら 夜を引き裂く まるで白い雪のようだね 切なく……

「前々から思っていたっすけど、マスターも大概可笑しくないっすか？」

「こ、これが反転した騎士王とギリシャの英雄ヘラクレスとの闘い……」

「え、黒い影が風船みたいに膨らんで……あれ、これやばいんじや……な、よく厨房にいるあの赤い人、ローアイアスと言えばヘクトールさんの投擲を防いだ伝説の……一体

何処の英雄なんだ……!」

「……嘘、つすよね。あの、あの英雄王がこんなにあつさりと?」

「え、あの黒い影の正体って……!?!」

「……………」

「……視聴終了……」

「彼、どうしたんだろうねえ」

ブーデイカが心配そうに見る視線の先には、真つ白になって燃え尽きているマンドリカルドがいた。

「……あれはキャットでもどうしようも出来ないのだワン」

相槌を打つように頷いたキャットも同じ人物を見る。

「……………あ、あれがホ、ホラー映画っすか」

その視線の先の人物、マンドリカルドは食堂で水を飲みつつも、真つ白になって燃え尽きていた。その様子を見てどうしたらいいか分からず、心配そうにマンドリカルドを見るキツチンにいる人々。

「真つ白に燃え尽きたこと虚栄の塵の如し、このままでは、おとめ妖怪が暴れ出すと見た。それを察したキャットは根暗ボーイをラビットの如く、此処から切り離すのだワン」

「あ、おい、キャット君!」

他にキツチンに居たメンバーが止める隙もなく、タマモキャットはあつという間もなく、マンドリカルドを連れて食堂を後にしてしまった。

さて、マンドリカルドがそんな事になっているとは露とも知らないマスターは、高難度のクエスト編成を考えながら廊下を歩いていった。

「うーん、アーチャーとアベンジャー、か……ん、あれは」

どうしてか、マンドリカルドがふらふらした足取りで廊下を歩いている。

「あれ、マンドリカルド。ゲツソリした顔をしてどうしたの?」

「あー、マスター、ですか……この前言っていたホラー映画って奴をですわ……」

其処でマスターは、マンドリカルドの表情が青い事に気付く。

「え、そんなに怖い作品があったの?」

「ま、まあ、そんな所っすね。しばらくは——黒くて細長くてうねうねしたものは見たくないっすね……」

「え、何でそんな具体的なの?」

マンドリカルドの様子を心配していたマスターの後ろから、ゆつくりと、されど音を立てずに近付く紫髪のサーヴァントが一人。

「はい、何処からともなくやってきた、貴方の後輩BBちゃん、です!」

突然、話しかけられて驚いたマスターと、聞き覚えがあり過ぎた声とその姿を見て、一層顔を青くするマンドリカルド。

「急に驚かせないでよ、BB」

「ええ、先程アベンジャークラスがどうのつて言っていますませんでしたかあ？」

何処から聞いていたのか、そもそもどうしてこのタイミングに限って近くにいたのか。マスターは突つ込みを入れないことにした。

「……うん、そうだね。実は、今度の高難易度のクエストにアベンジャークラスが居てさ。良かったらマンドリカルドも……え？」

そうして、マスターは彼の異変に気付く。マンドリカルドはBBを見た瞬間、頭が真つ白になったのか、石像のように固まっていたからだ。

「え、どうしたの、マンドリカルド!？」

誰かがニヤリ、と面白がるような笑みを浮かべた気がした。

「マスターさんと、その冴えないサーヴァントに朗報です。突然ですが、BBちゃん特製キャンディーをどうぞ！」

突然、BBがそんな事を言い出すと、何処から取り出したか分からないオレンジ色のキャンディーを渡してきた。状況がよく分からないものの、悪意は無さそうなので、とりあえず受け取ろうとしたマスターが、おもむろに横を見ると……目を閉じて、カルデ

アから退去しようとしているマンドリカルドを見た。

「マ、マンドリカルドオオオツ!!?」

突然の事態に、珍しく絶叫を上げるマスターの声に気が付いたのか、マンドリカルドが薄っすらと目を開ける。

「……マスター、ごめん。俺はもうダメみたいだ。あの聖杯戦争のように、俺は、これから……」

……バタン

「え、ちよつと、マンドリカルド!?!」

気絶してしまったマンドリカルドを見て焦るマスターを他所に、一連の流れを見ていたBBは腹を抱えて笑っている。

「あく、これはもうちよつと時間を置いてからの方が良かったですかねえ。この反応も面白かったです。そっちの方がもっと面白い反応をしたかもしれません」

「BB、何をしたの?」

「おおよそ、原因であろうBBをジト目で見る。」

「ヒドイです。マスターさん、私を真っ先に疑うなんて、BBちゃん、ショックで泣きそうですよ」

「今の様子を見ると、BBがマンドリカルドに何かしたようにしか見えませんが」

「……まあ、それはそう思いますよねえ。ただ、今回に限って私は何もしていませんよ。どうしてそのちっぽけなサーヴアントがそうなったかを知りたいければ、図書室にいる方に何を借りたか聞いてみればいいんじゃないですかあ？」

——逃がしません♡

何故だろうか、BBの攻撃ボイスが聞こえたような……そんな幻聴を振り切ったマスターは、マンドリカルドと話していたことを思い出す。

「マスターさん、気になっちゃいましたか、気になっちゃいましたか？」

「……何となく、オチが見えたんだけど」

「何の事でしょうか、マスターさん。善は急げと言うらしいですから、早速レッツゴーです」

BBに引つ張られたマスターは、そのままある映像資料を視聴することに……
くくやがて、キラキラ夢の中くく

「……………」

「マ、マスター!!」

後日、マスターが真っ白になった姿を見たサーヴアントが集まっているのを、にやにやと眺めるBBが居たとか居なかったとか。

お題10：慣れた味と見知らぬ記録

マスターの指示の下で無事にモンスターの討伐も終わった俺達は、とある町から歓待を受けていた。町の住民も気のいい人物が多いからか、料理や酒を皆は思い思いに食べているが、見張りは大丈夫なのか。ふとそんな不安が頭を過る。

「ああ、そう言えば昔……」

護衛の任務があった。酔った振りをしようとして、酔っ払ってしまった過去のミスを思い出す。そんな事を思い出しながら見張りを続けていると、マスターが何かを持ってこつちに来ているのが目に入った。

「おや、マスターちゃん。どしたの」

「えっと、一人だけ見張りをしているのも申し訳ないな、と思つて」

マスターが持っていたのは酒瓶だった。確か、マスターは酒が飲めないはず。グラスも一つしかない事から、自分の為を持ってきたのだろう。

「あー……マスターちゃん、今日はパスで」

折角気遣つてくれたマスターには申し訳ないが、昔のミスが頭に過つたからか、どうしても酒を飲む気分になれない。

「あれ、飲まないんですか、分かりました。もし、欲しいのがあったら気軽に言っ下さい。斎藤さん」

「ありがとさん。ま、俺に構わず、マスターちゃんも他のサーヴァント達と一緒に楽しんできな」

無いとは思いますが、こんな時に酒を飲んで襲撃でも受けたらねえ、一人くらいは直ぐに反応できないと、な。マスターが引き返しているのをぼんやりと眺めていると、入れ違いに見慣れた顔が一人。

「あれ、斎藤さん。お酒、辞めたんですか？」

「あー、そういう訳ではないんですよ。沖田ちゃん」

「？」

それにしても、随分と雰囲気が変わったもんだ。ま、場所が場所だからかねえ。勿論、それだけではないとは思っけど。

「まあ、色々あつてねえ。俺から言えることは、仕事中に飲むと碌なことが起きない、つてことさ」

「あー……」

何せ邪馬台国での事、世渡り下手な人斬りが言っていた事は事実なのだから。まあ、そんな苦い記憶を思い返していた時に、沖田ちゃんから声を掛けられるとは思わなかつ

たが。

「あの時に梅戸が居なかつたら、死んでいたかもしれないからな。おまけにあいつは重傷を負った、と来た。酒を飲んでも呑まれるな、とは良い教訓だよ、全く」

「そ、そうでしたか……」

昔の失敗話を冗談交じりで話してみたが、沖田ちゃんには受けが悪かつたらしい。まあ、自分が関わっていない仕事の話をされてもピンと来ないよね。

「ま、そんな訳で俺はパスパス。沖田ちゃんもマスターちゃんと一緒に楽しんできたら？」

「……すみません」

しよげた犬のようにマスターの近くへ寄っていくのをぼんやりと見ていると、そんな様子を気にしたマスターが沖田ちゃんに話しかけに行くのが見える。やはり、マスターは俺達サーヴァントを驚くほどよく見ている。これが様々な特異点を攻略したマスター、というものなのだろう。他にする事もないので、その二人を引き続き見ていた所、何か案を貰ったらしい。試衛館時代以来、見ることが無くなつた笑顔を浮かべていた。まさか、あの沖田ちゃんが女の子の顔をするとは思わなかつたが。

「そうそう、それでいーのよ、沖田ちゃんは」

俺は最後まで生き延びたが、沖田ちゃんは体の所為で戦うことすら出来なかつたん

だ。今くらい、楽しんだっていいっしょ。まだ、此処に来て間もないが、それでも驚く事ばかりだ。沖田ちゃんの事にしろ、副長の事にしろ、自分が知らなかっただけで変わったことが沢山あるらしい。後、織田信長と上杉謙信は女だったとか。いや、驚くだろ、フツー。

……気を取り直して、マスターを含めた全体の状況把握でもするか。与えられた拠点の広さは申し分ない。マスターにマシユ、それと何名かのサーヴァントが入りしても問題ない広さがある。マスターとマシユが休んでいる間の見張りの交代要員も十分だろう。沖田にしろ、赤い弓兵にしろ、腕の立つ者が英霊となることが多いこのカルデアだ、誰に任せても見張りは機能するだろう。流石に危険は無いだろうが、やはり今日は酒を飲む気分にはなれないので、大人しく見張りでもしましょうか。とは言えど、このままでは暇を持て余す。折角だから、コロツケそばをもう一杯貰おうか。確かカレーコロツケを使ったコロツケそばもあるらしい、これを機に試してみようか。……何だ、沖田ちゃんが何かを持ってこっちに来ているな。井二つに……あれは何だろうか。

「齋藤さん、折角だから一緒に食べませんか」

「おっと、気が利くねえ沖田ちゃん」

持っていたのはまさかのコロツケそば、と団子でしたか。大方、マスターが案を出して、沖田ちゃんがあの赤い料理人に見繕って貰ったのだろう。

「折角だから頂こうかねえ。丁度、小腹が空いていたんだ」

「それなら良かったです。それにしても、かけそばにコロツケを乗つけて食べるなんて初めてです」

「お、じゃあ沖田ちゃんもコロツケそばデビューか。合わないようで意外と美味しいよねえ、これが。ま、とりあえずは頂きます」

二人でそばを啜る。時に汁に浸ったコロツケを食べていると、沖田ちゃんが感心したように呟いた。

「ふんふん……それにしても、斎藤さんのそば好きは知っていましたが、意外と合うんですねえ、コロツケとそば」

「俺も意外だったよ。サーヴァントに食事なんて……と思っていたんだがね。好物くらしいは偶には食べたいでしょ、ってマスターに勧められちゃってねえ」

「私も最初はそんな感じでしたね。まず最初にお団子を頂きました」

「やつぱ、沖田ちゃんはお団子を頼んだか。ま、俺もその流れでかけそばでも貰おうとしたんだけど、その時に何となくそばだけじゃ味気ないなあ、って思っちゃってね。何か見透かされたのか、食堂にいるあの赤い兄ちゃんが天ぶらを作ろうとしたんだけど、流石に一人の為に天ぶらを作って貰うのはねえ。かけでいいよ、ってあの赤い弓兵に言ったんだけど……」

今も尚、皆にデザートを作っている赤い弓兵を見る。

「コロツケならあるぞ、と言われてしまつてね。コロツケにそばとは思つたけどね、好意で用意したのだから断れなかつたのよ。折角だし、物は試した、と思つて食つてみたんだが、これが嵌つちやつてねえ」

「相変わらず、料理については何でも知っていますね、あの弓兵」

「本当にねえ。どの時代の英雄なんだか。コロツケのいい所は天かすよりも油が少な
いから、意外と脂っこくならない所。そして、つゆに浸して柔らかくなつたコロツケを
そばと一緒に食べる……すると、また違う味になる。これを生きている時に知つていれ
ばなあ」

気付けば、井が空になっていた。手軽に食べられて美味しいのは有難い。

「ふう、ご馳走様でした。やはり食べ慣れた食事はいいですね」

どうやら、沖田ちゃんも食べ終えたようだ。

「あー、色んな国の英雄様が居るからねえ。食べ慣れないのは、何の味が分からない時
が時々あるんだよね」

「ええ、そういう意味ではマスターが日本人で助かりました、本当に」

分かる分かる、宮本武蔵とか佐々木小次郎が同じ場所に居るだけでも顎が落ちても可
笑しくないのに、他国の王様まで居るとは。

「齋藤さん、折角ですから団子も食べませんか」

「おっと、いいのかい。沖田ちゃん」

好物だろうに、と思ったが一人で食べるには少し量があるような。

「ええ、その為に多く作って貰いましたから」

「そういう事か。マスターちゃんとじゃなくていいのかい、沖田ちゃん」

「そうなんですけど、久し振りに齋藤さんとも出会いましたから、色々な話がしたいと思ひまして」

なるほど、折角の好意なんだから有難く頂こうか。それにしてもこの団子、中々美味しい。昔と比べて味も進歩したんだねえ。若しくは、作る人がよっぽどの腕か。

「あー、確かに。俺たちは結局最後まで生きていたからねえ。とは言えど、沖田ちゃんに話せることなんてそんなに無いよ?」

「齋藤さんならそう言うとは思っていましたけどね……それでしたら、カルデアで今まであった事とかどうです?」

「お、いいね。俺も此処に来て浅いからねえ。面白い話があればよろしく頼むよ」

しかし、全く知らない場所で食べる、食べ慣れた味がこうも美味いと感ずるとは。長く生きた身だが、それは知らなかった。

「面白い話ですか……色々な事があり過ぎたので全部を話すと齋藤さんの頭がパンク

してしまいそうですが……ピラミッドを城でサンドイッチにした外見のトンチキ建造物の話と、持病が治る代わりにジェットパックを同意なく接合された水着姿になった私のお話、どちらが聞きたいですか？」

「……………今、沖田ちゃんは何を言ったのかな？」

「……………めんね、沖田ちゃん。俺の耳が聞こえなくなっちゃったかなあ」

10階建て高床式倉庫とか普通は驚くはずなのに、沖田ちゃんや副長も何の抵抗も無かったし、マスターに至っては、「今年は随分と控えめだなあ」とか言っていたけど、そういう事でしたか。

「まあ、私もあれを初めて見た時は目を疑いましたけどねえ」

「……………」

折角の団子とコロツケそばの味を忘れてしまうような、そんなインパクトのある話が初っ端から来るとは思いませんでしたよ、全く。僕はもうお腹いっぱいですよ、沖田ちゃん。それと、トンチキ建造物もそうだけど、ジェットパックもどういう事だい？

「大丈夫です。斎藤さんもカルデアにいれば慣れますから」

何、此処ではあんな事が日常茶飯事な訳？

「いやあく、それは慣れたくないなあ」

「大丈夫ですよ、私も土方さんも慣れましたし。何時か大空に浮かぶ特異点、なんてい

うのも起きるかもしれませんが。そうしたら、この沖田さんが大空を舞台に大活躍すること間違いなし、なのですから！」

「そもそも、水着は水辺で使うものでしょうが。そこで何で空を飛ぶのよ、沖田ちゃん」

そんな曇りの無い笑顔でそんな事を言われると本当に起きるかもしれないよ、沖田ちゃん。

「……そんな事が起きるのがこのカルデアなのです。まずは定期的に話題になる謎の違法建造物、チエイテピラミッド姫路城の話をしましょうか」

……そして、結局始まるのね、その話。まあ、沖田ちゃんが元気そうで良かったよ、色々と。

お題11：パソコン争奪戦!!

私はゴールドルフ・ムジーク。カルデアの現所長であり、白紙化した世界を取り戻すべく、現地調査員や経営顧問、技術顧問の暴走を防ぐ立場をしている。……と尝试してみるが、こんな組織の頂点など、誰かに勧められてやるものではない。特にレイシフト技術、これらの戦いが終わったら直ぐにでも凍結すべきだ。あれがあつては命が幾つあつても足りないじゃないか。……全く、前任の技術顧問が特異点に関する資料を捏造したのがよく分かつた。こんなもの、表立って書けたものではない。

さて、そんな私には悩みの種が沢山あるのだが、このカルデアでの生活が始まつてから続く大きな悩みがある……それは。

「フオウフオウ」

「止めんか。これは私の肉だ。やらんで、決してやらないからな。そもそも犬には多量の塩分を含むパソコンは不味いのではなかったのかね？」

「キュキュ、フオウウ！」

「仲が良いねえ、朝から君たちは」

何を言っているのかね、この技術顧問は？

「仲が良い訳ないだろう。このケダモノが私の大切なベーコンを奪いに来るこの光景……見て分らないのかね？」

「フォウ……」

可愛らしく嘆いても無駄だぞ、その眼がベーコンを見ていることなどこのゴルドルフ、疾うに分かつておるわ。

「本当かなあ、実のところ影でおやつを上げていたんじゃないの？」

「し、しとらんわ。じゃあ何だね、このケダモノは。私を給仕のような何かと思っているのかね？」

「キュキュ、フォウ！」

「むー！」

その軌道、読み切ったわ。さり気なく軌道を塞ぎつつ、クツシヨンの所に向かわせるように……

「ベーコンフォウ！」

馬鹿な、空中で軌道修正だと。何故、このベーコン泥棒は私のベーコンに執着するのかね？

「……あ、コラ！」

フォークで刺していた部分こそ免れたが、約7割のベーコンが奪われる、とは……こ

のゴルゴルフ・~~□~~ジーク、一生……ではなかった、本日の不覚!

少し離れた所で、ゴルドルフ・~~□~~ジークと同様に食事をする職員数名が、揃いも揃ってその光景を眺めていた。

「今日はペーコン残ったねえ。昨日は全部奪われたのに」

「流石のおっさんも少しは対策しているからだろ。まあ、奪われるんだけど」

「そこ、嫌いぞ。ピカタクん」

「俺だけかよ!? それと、あんた毎回間違えるよな、おっさん。いやあ、レーシヨン続きの生活が多いんで、少しでも面白いものがないとさ……それにしても、毎回負けるから意味がないなあ」

「だねえ、ペーコンを奪われる事が確定していますから……」

そこ、技術顧問含めて満場一致で頷くんじやない。そしてオクタヴィアくん、君は何故か満足げな顔をしているのかね。

「何を言うか、カワタクん。これは仕方なくだ。このケダモノが他のメンバーの食事を邪魔しないようにだな……」

「じゃあムニエル、掃除ね〜」

オクタヴィアくん、今のはどういうことだね。

「くっそ〜、全部奪われると思ったんだけどなあ……」

ん、どういふことだね。このスタッフたち。まさか……

「私をダシに、賭け事をしないでくれるかね?!」

「まあまあ、落ち着いて頂ければ、所長」

何だね、経営顧問。これは私の沽券に関わる話なのだぞ?!

「誰だつて楽しい時間は持ちたいものです。貴方が美味しく食事を取ることに喜びを覚えるように、スタッフ一同も食事や貴方とフォウ君のやり取りを楽しんでいるのです。所長もマシユや藤丸の様々な記録や微小特異点の様子を見ているでしょう」

ぐ、経営顧問め。それを言われたら強く言えないのを分かつて言っておるな。そして、それは私が所長として彼らの功績を知らないのは不味いと思つてだな……

「フォウ、フォウー!」

お前(ベーコン泥棒)はお前で満足げにベーコンを完食しやがって……明日こそは、明日こそはベーコンを奪われないようにしなければ……

朝食が終わればモーニングブレイクのコーヒータイム。砂糖は使わず、ケーキで糖分補給するのがゴルドルフ流だ。

「……………ふむ」

依然として、異聞帯の排除に迫られる私達だが悲観してはいけない。何故なら、我々しか世界を取り戻す事が出来ないからだ。悲観している時間があつたら彼らの報告を

読み、次の指示を出すことが大事だろう。

「今のところ……経営顧問からも技術顧問からも報告は上がっていないな」

彼らは実に優秀だ。彼らが居なかつたら我々は此処まで辿り着かずに全滅していたことだろう。ダ・ヴィンチの方は疲れが溜まっているようだから、休ませないといけなはずなのだが……空元気をしおって、あれではその内倒れてしまうぞ。これは調査員にも言えた事だが。

「……うむ」

それにしても皆がギリギリの状況で良くやってきている。責めて、私で出来る事をするでしょう。微小特異点へ向かっている調査員には悪いが、技術顧問には鍛えられたマッサージを再び披露するでしょう。休む時間を削つてまで発明するのも技術顧問の気晴らしかもしれないが、しっかり休まんと良いモノは出来ないだろうからな。よし、ついでにパソコン泥棒のいい対策を聞き出すでしょう。

「時間を貰っていいかな、技術顧問」

「うん、突然どうしたのかな。ゴルドルフ君」

全く、部屋に籠っていたかと思えばまた新しい発明をしていたか。他の職員は適度に休むようだが……彼の天才なのだ、そのように焦らずとも良い成果は出せると思うのだが。

「うむ、いつも忙しくしている技術顧問に休みを与えたいと思っていたのだが、君は暇さえあれば新しい発明をしているだろう」

「……うーん、確かに言われてみればそうかも」

言われてようやく気付きおったか。現地調査員が体を張っている手前、おいそれと休めないという気概か、気持ちは分かるが。

「経営顧問であれば誰も近寄らない所に行つて休んでいるようだが、君はそうでは無
いからな。とりあえずマッサージをしてあげるから楽にしなさい。これでもトウール
に褒められた腕だから、安心して受けるといい」

受けない、という選択肢はないぞ。と言うか、断られると割と傷つくからな。幾ら押しつけがましいとしても。

「まだすることはあるんだけど……何があつても休ませる、つて言う目をしているね。
分かった分かった、途中で倒れて二人に心配なんてさせたくないからね。大人しく君の
施術を受けるでしょう」

「技術顧問は物分かりが良くて助かる。ついでになのだが、マッサージが終わつた後
でいいから、一つ相談に乗つてくれないだろうか」

「それも目的だったか……まあいいよ。私の手に負えることならね」

技術顧問はそう言つて、殆ど使われていないであろうベッドへ横になる。全く、やは

り殆ど休んでいなかったか。

「うむ、ではまずマツサージを始めると……って」

君の肩は岩か何かか。全く、しっかりと休まないからこうなるのだ。

「全く、こんなに硬くしおつて。調査員も調査員だが君も君だな。しっかりと解すから大人しくしていなさい」

「あゝ、分かっちゃおう?」

全く、そんな困った風に言うんじゃない。責めるに責められないじゃないか。

「分かるとも、君はいつも二人に気を遣っているからな。それも含めて気が張っているのだろう。ほれ」

まずは指圧で……と考えていたが、改めなければな。しっかりと凝りを解すとしよう。

「あ、あああゝ……き、効くう……」

全く、困ったものだ。ここまで硬くなっているなら肘で固さを取った後、指圧で固い部分を満遍なく解してやらなければ……

「……き、君に……こ、こんな特技が……あ、あゝ……あつた、なんて」

うむうむ、効いているようで何よりだ。

「あ、ああ……あああ……あああああゝ……」

……効いているのは何よりだが、あられもない声を出しおつて。全く、皆には見せないがこれは相当に疲れを溜めておつたな。

「どうしたの、ゴールドルフ君」

「いや、君の体の硬さに驚いていただけだ」

うむ、どうやら此処の部屋、防音設備が整っているようだな。技術顧問は技術顧問だが、あらぬ噂は立てられたくないからな。

「そこは……もう少し、弱く出来るかな」

「分かった分かった。こら、じつとしたまえ」

これは……研究の為に同じ姿勢を維持していたな。そりゃあ筋肉が硬くなる訳だ。全く、サーヴァントと言えど、体に代えはないんだぞ。

「おとおおお……ああ、おとおおお……」

だが、マツサージは此処からだぞ、技術顧問。トゥールに鍛えられたマツサージ技術が飾りではない事を証明して見せるわあ！

「あ、あああ……。ま、まさか、此処まで効くとは思わなかったよ」

途中から君、寝ていたからね。全く、この様子ではまた揉んでやらないとな。

「うん、ありがとう、ゴールドルフ君。頭がすっきりした気がする」

「うむ、休めたようなら何よりだ」

背伸びをしているが……若干の硬さがあるな。微小特異点で時間が取れた時にやってやろう。そうすれば、トンチキな事態が起きた時にムニエルへ押し付けられるよね、よね？

「そう言えば、相談って何かな？」

おおっと、マツサージに本気を出し過ぎてつい忘れておった。

「うむ、朝食の度に現れるあの憎きペーコン泥棒を何とかしたいと思ってるのだ」

そこ、どうしてどうでも良さそうな顔をしているのかね。

「うーん、フォウは二人に懐いているからねえ……私も長い時間接した訳じゃないんだ」

ぐ、こういう時に限って、通信の届かない微小特異点へ出ているのだから困ったものだ。

「それでも何か知っておらんか。これでは明日もまた、あのペーコン泥棒に私の大事なペーコンを奪われてしまう。それでは、彼らへの威厳というものがだな」

「うーん、大した案じゃないけれど……こんなのはどうだろうか」

お、流石は技術顧問。名案を持っておったか。

「本当に大した事じゃないよ」

話を聞いたが……うむ。だが、それが一番確実なのは技術顧問の目から見ても思うの
だろう。ならば、それに倣うしかあるまい。

その日以降、フオウくんがベーコンを奪う事は殆ど無くなった。何故ならば……

「これ、お前の分はこつちだ。減塩しているベーコンを食べなさい！」

「フ、フオウ……フオーウ！」

「おい、こら！」

しかし、ゴルドルフ所長とフオウ君のバトルはまだまだ続くのだった。

剣を作る者

今年も色々あったなあ……ボックスも無事に走り終えて素材も回収した。急いで決する微小特異点や異聞帯もないのだから久し振りにのんびり出来そうだ。そんな訳でマイルームにマシユを呼んでブーデイカとキャットが作ったクツキーとエミヤが淹れてくれた紅茶を飲んでいた時、マシユが忘れてはならないイベントを教えてください。

「え、もう福袋の時期だっけ？」

「はい、今年も新しいサーヴァント召喚か星5サーヴァントの宝具強化のチャンスですよ、先輩」

最近は大忙しかったからすっかり忘れていた。早速ダ・ヴィンチちゃんが作ったであろうカタログを確認しなければ……

「そういえばこの時期ってさ。福袋の他にも別のピックアップがあったよね？」

「その件ですが、今回は何と、此方のサーヴァントが召喚出来るかもしれません！」
ドン、とマシユが置いたのは……

「な、ななな……馬鹿な、早すぎる」

「ですが、これは現実ですよ、先輩」

ま、マジか。遂にこの時が来たのか、マシユ。

「行くんですか、先輩」

気が付けば席から立ち上がっていたようだ。

「うん、別に全ての聖晶石を使い果たしても構わんのだろう?」

「せ、先、輩?」

行くしかない、この一世一代の大勝負に!

「先輩~~~~~!?!」

マシユが何か言っているけど気にならない。今まで手を出そうとして出さなかったピックアップが何度あったか。最近来てくれないという理由で11連位やってみようよお、と嘘泣きしながら悪魔の提案をするダ・ヴィンチちゃんから逃げてきたのは何の為だ。全ては今、この時の為だ!

「外れ……にエミ……ディカ……で来ないと」

よし、召喚室はあそこだ。

「おや、待っていたよ、藤丸くん。もう福袋は決めたのか……」

「そんな事よりもこつち、お願いします」

ダ・ヴィンチちゃんが何と言おうと、今はこつちが最優先だ。

「あゝ、こつちね。了解了解、けれど福袋用の石は間違っても使わないようにね」

「はい、その為にも今まで聖晶片を溜めてきたんですから!!」

さあ、勝負の時間だ。行くぞ!

くく召喚タイムくく

さあ、勝負の時。まずは深呼吸してから……行くぞ!

……

「11連程度で出るなど思っていないわ、次!」

……

「ハアハア……クソ、聖晶石の在庫が。こうなったら溜めていた聖晶片を使っても
!」

………n連目

「セイバー、千子村正。召喚に応じ参上した。ただの鍛冶師なんだが、疑似サーヴァン
トってことで、武士の真似事もできるようだ。ん?何だよ、その顔は。熟知り顔のよう
でもあり、意外そうな顔でもあり——っておいおい。どうして泣き出してんだ、お前さ
ん」

「いよつしやああああー!!」

成功した、ついに成功したぞ。今回のピックアップ、無事にKOだ。

「おいおい、本当にどうしちまったんだ、お前さん」

あれ、召喚ルームに誰かが入る音が。

「あ、先輩……それと村正さん、でしょうか」

ああ、マシユ。やったよ。俺はやったんだ。

「ああ、そうだ。それで、マスターつてのは此処で丸くなっている奴の事で良かったのか？」

「はい……それで、先輩。そろそろ復活してはどうでしょうか」

流石にマシユに言われては何とか復活しないと。

「すみません。俺は藤丸立香です。よろしくお願いします」

「おうよ。それで、此処は何処なんぞい」

そうだ、まだカルデアの案内をしていなかった。

「はい、今から案内しますけど、良いですか？」

「おう、頼むわ」

そうして召喚ルームから出た時、村正を見て驚いたダ・ヴィンチちゃんと、何故か此処に足を運んでいた二人が居た。

「おお、マスターが新しいサーヴァントの召喚に成功したんだ、流石だね。あ、私はブーディカです。よろしくね、新しいサーヴァントさん」

あれ、何でこんな所にブーディカが居るんだろう。

「別嬪さんに言われちゃあ名乗らねえとな。儂はセイバー、千子村正。ただの鍛冶師なんだが、疑似サーヴァントってことで、武士の真似事もできるようだ。よろしくな」
あ、ついでにエミヤ。自己紹介をお願いします。

「……あ、ああ。私はエミヤ。只のしがな弓兵だよ」

ん、何か反応が変だな。村正を案内した後に、話を聞いてみようか。

「この二人は戦闘も出来るけど、空いた時間で皆に料理を作ってくれているんだ」
「なるほど。儂は只の鍛冶師だけど宜しくな」

二人と村正が挨拶を終えたのを見計らって、声を掛ける。

「それじゃあ……案内しますね村正さん」

さて、皆はどんな反応をするだろうか。主に武蔵ちゃんとか。

「お、了解だ。それにしても……赤いヒラヒラした洋服を着た、アーチャーがいるだろう。オレ、あいつが苦手」

「え、そうなんですか。挨拶しただけですよね？」

どうしてあの挨拶だけで分かるんだろう。エミヤと村正……顔が何となく似ていそうなる事くらいしか共通点は無さそうだけど……

「見てるところ——背中がムズムズすんだよ。くっそ……虫使いか何かか」

「うーん、和食が得意なメンバー、エミヤなんだけどどうしようか」

ブーディカさんは苦手な人がいる中でも作ってくれているので、その点助かっているけど……どうしようか。

「あー、その辺は気にしないから安心しろ。あいつならその辺、手を抜くとは思えないからな。それと飯の話なら魚も好きだ、握り飯もなあ。酒はやらねえ、団子は食うぞ」

「多分、その辺りなら用意出来そうです」

「済まねえな、それにしてもマスターってのも大変だねえ」

さて、案内しないといけないうんだけど何処からにしようか……あ、武蔵ちゃん、そんなに村正さんを見てどうしたの、まさか。

「……まさかと思うけど、騒ぎなんか起こしてはいないよね？」

「そんな事はしていません……って、あの時のお爺様だよね!?ちよつと、マスター君いい仕事したじゃない」

武蔵ちゃん揺らさないで、揺らさないで。

「このお爺様が居るならどんな戦場でも武器には事欠かないつてもんでしよう」

「……ハッ、お前さんは何処でも変わらないな」

「あー、お爺様が笑った、何よもう」

あれ、もしかして下総の記憶があるのかな。偶に忘れるけど、通常の武蔵は男だから武蔵ちゃんを知っているはずが無いんだけど。

「ああ、俺の数少ない活動記録の中に残っていたんだ。あの風来坊め……最後に行き着く場所に辿り着ければいいんだが」

「……そうなんです。実はその時に力を貸してくれたサーヴァントが居るので案内します」

「お、そうなのか。案内を頼む」

さて、少し村正さんを驚かせてみようか。

「小太郎、居る？」

お、音もなく姿を現した。流星は風魔の頭領。

「ハッ、此処に」

本当、何処からでも君たちは現れるよね。何処に隠れているか分からない時があつて驚かされる事も多いけど……いつも溶岩水泳部を止めてくれて助かっています。

「うおっと。これは驚いた。まさか、忍までいるとは」

「風魔小太郎と申します、村正殿……また味方として肩を並べる時が来るとは……もし分からない事があればお気軽に話して頂ければ、と」

「おう、そうするでしょう。風魔の頭領」

さて、寄り道も終わったし、そろそろ施設の案内も終わりにしないと。

カルデアの案内を始めるマスターの背中を見送ったマッシュ、ダ・ヴィンチちゃん、エミヤ、ブーディカ。ダ・ヴィンチちゃんがマッシュと話したいことがあると呼び留められたので、二人でキッチンに戻っていた所、ブーディカがエミヤにこんな事を尋ねた。

「エミヤとあの村正ってサーヴァントは何か縁があるのかい？」

「いや」

「それにしても、いつも以上に反応が早い気がするけど……やっぱり何かあった？」
悪戯っぽく笑みを見せるブーディカを見て、降参するようにため息をつく。

「千子村正と言えば、日本史上最も有名な刀工名の一つ。斬味凄絶無比と名高く妖刀と呼ばれる刀すら作り上げたその刀名工だ。……その刀名工が数多の鉄を打ちながら求めたものはただ一つの極限、か」

エミヤの評価が想像以上に高かったことから、ブーディカは千子村正と呼ばれた人物に興味を湧いた。

「へえ、じゃあ日本人でマスターの時代にも伝わるような人だったんだ」

「ああ、後の時代の創作にも取り入れられる程の、な。まさか、天下を二分した刀名工が、最後に行き着いたものが精神論とはね。オレには少し、目に痛い話だよ」

「……それは何の話だい、あの挨拶だけでそれだけ分かるものなのかい？」

「……まあ、色々あるのだよ」

明らかに濁すような物言いに、ブーディカが探るような目を向ける。

「へえ、ま、人間一つや二つ内緒にしておきたい事つてあるよね。私達サーヴァントだけ。例えば、疑似サーヴァントと呼ばれるサーヴァント達から露骨な興味を持たれているとか、さ」

「それは言わないで欲しい」

頭を抱えそうなエミヤを見て、ブーディカがカラカラと笑う。

「さて、そろそろマスターも案内が終わったかな」

うん、施設の説明はこれでいいかな。

「……施設はこんな感じですよ。魔術で拡張が出来るそうなので、後でダ・ヴィンチちゃんにお願いで部屋を確保しますよ」

「お、そりゃあ有難え。鍛冶するにもいい場所がないと話にならないからな」

あ、そろそろお腹が減ってきた。

「お、マスター。腹が減ったかい」

「はい、此処から場所も近いですし、折角だから一緒に食堂へ行きますか」

「お、いいぜ」

此処を曲がって少し歩けば、と。

「お、もう着いたか」

其処は俺を含めた、カルデア職員の新2の憩いの場である食堂。レイシフトから持ち帰った食材や元々確保していた植物から収穫した物が、ここで料理として提供される。

「はい、基本は定食という形にしていますが、リクエストがあれば対応する事も出来ません」

「お、そうか。とは言えど、色々な英霊が居るんだろ。名前を見てもどうせ分からんから、選んで貰ってもいいか？」

「はい、まずは日本の料理の方がいいかなと思つていたので少し待つてくれますか」
さてと、今日のメニューはなんだろうか。あ、焼き魚だ、あれにしよう。

「エミヤ、キャット。焼き魚の定食を二つお願い」

「承知した」

「新しいサーヴァントも居るのだろう。キャットに任せておくのだワン」

さて、料理を待つ間に周囲を見ておこう。あ、アルトリアがいつも通り美味しそうに食べているな。あそこまで美味しそうに食べると作り甲斐があると、エミヤとブーディカが言っていたな、何となく分かる気がするかも。……あれ、アルトリアが村正を見て、いるのかな。あ、でもまた食べ始めた。一体、何だったんだろう。村正も村正で何か思う所がありそうなのは、何でだろう。

「マスター、出来たぞ」

「出来たのだワン」

「ありがとう、二人とも」

無暗矢鱈な深入りは良くないか。まずは村正さんにこの定食を渡さないと。

「済みません、村正さん、お待たせしました」

「おう、悪いな……へえ、いい仕事するじゃないか。厨房にいる奴ら」

彼らには前々から世話になっているから、その彼らを褒められると俺も少しだけ嬉しくなる。

「ああ、こりやあ毎日食べに来たがる他のサーヴァントが居ても仕方ねえな」

「はい、俺も毎回楽しみになっていますから……それじゃあ、頂きます」

「そりやそうだな。頂きます、と」

そんな二人の様子を厨房からこっさり見ている三人がいた。

「うーん、村正さんは魚が好きなのかな」

「うむ、キャットもそう思うぞ。しかし、村正と言えば有名過ぎる刀工故、洋食は控えた方がいいかもしれないのだワン……」

新しいメンバーに対するメニューを悩んでいた二人だが、それに意見する男が一人。

「そうでもないだろう。当時の食生活と現在の食生活が変わっているとは言えど、

サーヴァントとして召喚されてから新しい趣向に目覚める者もいる。まずは一通り出してみたり、場合によってはマスターに確認すればいいだろう」

その例を認識している二人が、エミヤに同意する。

「そうだね、一応、マスターには確認しておいた方がいいかな」

「ああ、周回の時にそれとなく確認すればいいだろう」

話が一段落ついた所で、ブルーデ이가アルトリアを見る。

「それはそうと……どうしてアルトリアが村正さんを見ていたんだろう」

「何、そんな事があったのか、キャットか、キャットファイトなのかワン!？」

若干興奮しているキャットを宥めながら、エミヤはさもその顔に覚えがないような口振りをさせる。

「さあな……ただ、以前にも似たような事があっただろう。今は居ない女神パールヴァティーや女神アストライア、諸葛孔明……あの千子村正は彼らのような疑似サーヴァントなのではないだろうか」

「ああ、それなら……つまり、あの村正さんの躰になっている人は元々アルトリアに関わりがあるって事か」

意識しないまま自分で地雷を踏んだエミヤ、何とか表情に出さないように苦勞しつつ返答する。

「……………そ、そうなんだろうな」

「……………」

ブーデイカとキャットが疑問に思うのも束の間、食堂に複数人のサーヴァントが姿を見せた。それと同時に食堂は慌ただしくなり、この話も流されていった。

村正の部屋を用意した後、幾つかのミーティングを終えて体の汚れを落とした藤丸は何となく気になることがあって、エミヤをマイルームに呼んでいた。

「……………うん、このお茶美味しいね」

カモミール、だったか。エミヤに淹れて貰ったそれは不思議と落ち着くのだ。

「ああ、君の口に合ったなら何よりだ。それで聞きたい事とは？」

それはそうと、確認しなければならぬ事が一つ。

「うん、単刀直入に聞くと、エミヤと村正ってどんな関係？」

その質問は答え辛い内容だったのか、エミヤから回答が直ぐには来なかった。ただ、その様子は答えたくないというよりも、どう答えようか迷っているようにも見える。以前、エミヤとイシユタルとの関係を聞いた時も同じような反応だったのだ。

「もしかして、また縁のある疑似サーヴァント？」

尋ねながらも、その質問には頷くだろうという確信が藤丸にはあった。

「全く、君には隠せないな。そうだ、あの千子村正のガワとなつてゐる男には、並々ならぬ縁があるのだよ。不服なことにね」

「じゃあ、一緒のパーティにしたらダメなのかな？」

そう、サーヴァントには意思がある。例えば、人理の影法師と言えど、背を合わせて戦いたくない誰かが居るのは仕方がないことだろう。

「それを決めるのはマスターだ。必要だと思つたら使うといい。それはそうと、マスターの苦手な食材は追加させて貰うがな」

や、やり方が陰湿だ、このオカン……………！

「何か言つたかね、マスター？」

「な、何でもありません……………」

エミヤとクー・フリーリンを一緒のパーティにした時に、あれがあつたのは気の所為じゃなかつたのか……………！

「分かつた。もし、致命的に相性が悪い人が居たら言つて欲しい。出来るだけ避けるようにするから」

「了解だ。さて、これ以上は夜更かしになるだろう。ゆっくり休むといい、マスター」

「うん、お休みエミヤ」

さて、村正の育成も頑張らないと……………。

お題12： サンタアイランド仮面……？

ジークフリートやシグルドに剣術を習いながら、忙しい日々を過ごしていると、不思議な充足感がある。きつと、全てが終わって世界の裏側でただ待っただけの日々を過ごす俺では得られない経験がここにあるからだろう。

「さて、今日はどうしようか」

シグルドとの訓練はないから、地下の図書館に行つて様々な英雄に関する本を借りてみようか。それとも、以前の聖杯戦争で関わったサーヴァント達の元へ行つてみようか。

「はい」

俺が巻き込まれた聖杯戦争で助けてくれたアストルフオやジークフリート、そして当時は敵対していた赤の陣営のサーヴァントとも、此処では味方として一緒にいることが出来るとは思わなかった。いつも思うが、此処は不思議な場所だ。

「英霊がこんなに沢山いるとは」

あの聖杯戦争以外の様々な英霊がいて、そんな人たちと話が出来るとは思わなかった。それにしても……

「いい匂いがするな」

俺が食堂を使うとしたら水を飲む程度だけだろうと考えていたが、まさか味覚が鈍い俺でも美味しいと感じられる料理を食べられる日が来るとは。ブーディカに猫のようなサーヴァント、エミヤといった食堂で料理を作ってくれる方々には感謝しかない。

「次のイベントは……え、ボックスイベント。それ本当、マシユ!？」

まあ、そんな場所だからか、それらの恩恵以上に理解を超える出来事が度々起きるのだが。……そういえば、俺も似たような事をしたのだったな。やったことは拉致そのものだが、それがあつたからこそ此処に居られるというのも不思議な話だ。

「……何だ？」

食堂に着いたと思えばいつもとは様子が違うようだ。具体的に言えば、様々な装飾が施されている。

「なるほど、クリスマスの時期だったか」

あれはナーサリー・ライムと黒のアシンだったか。浮足立っているのが遠目でも分かる。

「嬉しいわ、嬉しいわ。今年のプレゼントは何かしら」

「お母さんにお願いしなくっちゃ。今年のサンタさんからのプレゼントは、解体した時に解体出来るプレゼントが良いって」

プレゼント、プレゼントか。

「……そうか、クリスマスと言えばサンタさんのプレゼントだったか。毎年サンタが変わるようだが、今年は誰になるのだろうか」

俺は何が欲しいだろうか。うーん、こうして存在しているだけでも十分なのだが……。

「……ん？」

見知った顔が横切った気がしたが気のせいだろう。そう言えばこの時期、何故か天草四郎が変な仮面を付けて張り切っているが、そんなキャラだっただろうか。まあ、マスターに害が無ければいいか。聖杯を奪う、という事も無さそうだし。

「……うん、また騒がしくなるな」

また一騒動起きるのだろうか。此処に来た時は驚きの毎日だったが、最近は何かが起きない時の方に違和感を持ち始めているとは。世界の裏側で彼女を待ち続ける日々が、此処では全くの無縁なのだから、不思議なことだ。

「……ん？」

先程横切った者の服装や髪型に嫌と言う程見覚えがある。何故仮面を付けているかは分からないが、あれはやはり天草四郎か。この時期に限ってサンタアイランド仮面と名乗っているようだが、サンタアイランド仮面を付けたとしても天草四郎である事に変

わりはないのでは。まさか、微小特異点修復の隙を突いて聖杯を狙っている、とかか。

「そこ、聞こえていますよ。そして、冬木の聖杯クラスでもない限り、そんな事はしません」

「済まない、気が付かない内に口から出ていたようだ。天草四郎」

先ほどの子供サーヴァント達と話をして何かを渡していたようだが、今年のサンタはお前ではないだろう。

「私はサンタアイランド仮面ですよ、いいですね」

「そのサンタアイランド仮面とやらを付けた所で、お前が天草四郎であることには変わりないだろう」

咳払いした、隠せていないじゃないか。

「……クリスマスはこの時期は、子供たちに夢とプレゼントを渡すサンタアイランド仮面なのです」

何故、そこに拘るのだろうか。その昔、聖杯で検索を掛けたが、元々のサンタさんは白い顎髭を蓄えたご老人だと結果を出したはずだ。

「あの時奪った聖杯で、お前はそんな事をしていたのですか」

恨めしい顔をされても困る。世界の裏側へ持つて行った後、何もずつと眠っていた訳ではないんだ。

「ああ、流石に待ち続けるだけの時間が長いし、世の中の行事について多少は知っていた方が……って何だ、やはり天草四……」

「サンタアイランド仮面」

「……そ、そうか」

何だ、俺の知っている天草四郎と違い過ぎて反応に困る、姿も記憶も変わらないのに。あの時とは違う謎の圧がある、何故だ。あの仮面にはサンタの支援をする呪いでも掛かっているのだろうか。

「そんな事はありませんよ。これはあくまで一時のものです」

「……何だそれは」

訳が分からない。ただ、天草四郎相手に退くと言いやうの無い敗北感が出るため、出来れば退きたくないのだが……む、誰かが食堂に来るようだ。

「あ、いたいた」

マスターか。どうしたんだ。

「クリスマスが始まったから、出撃するよ！」

「ああ、分かった。と言う事は、今年のサンタが現れたのか？」

「うん、今年は……」

おや、何時の間にか天草四郎が居ない。まあ、聖杯を奪いに来たら対処するでしょう。

それと、よくは分からないが小さいジャンヌの世話も進んでやっている辺り、天草四郎なりにクリスマスという行事を楽しんでいるのかもしれない。まあ、フキの聖杯クラスがカルデアに現れたら話は変わるのだが。

「ところで、マスター」

「ん、何かな。ジーク」

俺は邪竜、決して良い子などではないが……

「サンタさんからプレゼントを貰えるのだろうか」

とは言ってみたものの、何が欲しいかなど決まっていけないのだが。

「貰えるよ。もし貰えなかったら、こつちからお願ひしてみるから心配しなくていいよ、ジーク」

「何時の間に口に出っていたか。心遣い済まない、マスター。しかし、いざ何が欲しいかと言われると、何も浮かんでこないんだ」

此処に居ること自体がある意味、奇跡だからな。これ以上何かを望むのも可笑しな話だ。

「うーん、そこは今年のサンタの采配に期待、かな？」

「そうか。ではそれを楽しみにしておこう。ところで出撃だろうか、マスター」

此方はいつでも準備が出来ている。

——その後、出撃を通して、未熟な俺自身でも十分に戦えるのだ、という自身が持つことが出来た。例え未熟な身だとしても、これから変わって行けばいい。ジークフリートはその事を教えたかったのかもしれないのだから。

お題13：触媒鑑定 in 召喚ルーム

戦力の増強は何時どんな時でも求められている。カルデアの電力にもよるが、出来るだけ用意出来る戦力を整えておくべきだろう。

「……という訳で新しいサーヴァントを召喚したいんですけど、いい案はありますか」
そんな思いから、聖杯戦争にも詳しい諸葛孔明に相談するために彼の部屋で話を切り出した。

「ふむ……一般的な話であれば教授しよう」

「お願いします」

「まず、一般的なサーヴァントの召喚だが、召喚したいサーヴァントに連なる聖遺物を触媒に召喚を行う。これは、私が参加した聖杯戦争でも変わらない点だ。ああ、アサシンとバーサーカーだけは一節を加えてクラスを指定することが出来るが、それ以外は基本的に出来ないと言っているだろう。そもそも、それがこのカルデア式の召喚に何処まで通用するかは分からないが」

流石は、依り代が時計塔で魔術を教えていたと言うだけはある。ロードというのはあまり分かっていないけど、先生としては人気だったんじゃないだろうか。ふと思うこと

があり、一緒にゲームをしていた二人の男性を見る。

「じゃあ、イスカンドルさんを召喚したかったら、イスカンドルさんの聖遺物を使うのが一番いいんですね」

「そういうことだ。しかし、その聖遺物を遣えば必ず同じライダーが召喚される訳でもないのが注意点だ」

「それはどうかのう。お主であれば儂が出てくると思うが」

「へー、やっぱり先生でも気にかかることがあるんですね」

「う、うるさいぞ。ライダー」

諸葛孔明なのか、その依り代であるロード・エルメロイ2世（多分、後者だと思うけど）かは分からないが、やはり縁があったのだろう。

「ま、まあまあお二人とも。師匠が恥ずかしがっていますので……」

その間、ロード・エルメロイ2世の髪を梳かし続けていたグレイが、控えめに間へ立つ。

「分かりました、ちよつと他の方に相談してみます。お時間を頂いてありがとうございます
いました」

「この程度のことであれば構わんよ。君の検討を祈っている」

一礼して、ロード・エルメロイ2世の部屋を後にした。

とはいえ、この先はノープランだ。こういう時、誰に相談したらいいだろうか……そんなことを考えていたら、英霊の聖遺物に詳しくそうな二人組に丁度よく出くわした。

「あれ、マスターどうしたの。何か考え事？」

「もしかして、おしごと？」

折角だから、二人にも協力してもらおう。

「……と言う訳で、手伝ってもらっていいかな」

「マスターのたのみだからね。まかせて」

「私も……いいの？」

「私は別に気にしないし、エリセも英雄に詳しいんだよね。ボージャーが言っていたよ」

「ああ、うん……それなりには、ね」

そんなことを言ったら私なんて……

「歴史の教科書の知識が殆どだからいてくれると助かるんだけど……どうかな」

「え、いや、私は別に嫌とか……言っていないから、いいけど」

「分かった。じゃあ、ボージャー、エリセ。誰から当ってみる？」

真つ直ぐ手を挙げたのはボージャー。どうやら、既に思い当たる人物がいたらしい。

「じゃあ……あのひとはどうかな」

——イアソンのマイルーム

「私の船員を召喚したいから、何か聖遺物を持っているなら貸して欲しい?」

「出来れば、お願いしたいんだけど……」

何となく暇そうにしていたイアソンに声を掛けて見たが、内容が気に入らなかつたらしい。反応から拗ねていたことが既に分かっていた。

「却下だ! 第一、私の船員をお前が扱えると思うのか?」

「でも、メデイアもアタランテも、アスクレピオスやディオスクロイも、カイニスもヘラクレスも、みんながりっかをマスターとして、みとめているよ」

「ふん、それがどうした。アルゴ号の船長は誰が言おうとこの私だ」

自信満々に言つてのけるこの男、確かに間違いはないのだが、どうしてこんなに残念なのだろうか。

「……イアソンのケチ」

「ふん、私の船員を使おうなどダ・ヴィンチが許そうとこの俺が許さん。もし、召喚したければ、自分たちで縁とやらを繋ぐんだな!」

「うーん、そっかー。だめかー」

イアソンの物言いに気になることがあつたのか、エリセがボソツと呟く。

「……もしかして、ライダーじゃないから船が出せない、聖遺物を出せない、とか?」

その、何気ないエリセの一言が、イアソンの端正な顔をピシッと石のように固まった。「ごめん、まさかあんなことになっちゃうなんて……」

「まあ、しようがないよ。イアソンはイアソンだし」

あの後、ヘラクレスコレクションを持ち出したイアソンを見て、終わらない語りが始まる予感がした一行。しかし、ここで機転を利かせたのがマスターだった。

左の手に刻まれた令呪を見せて、それ以上エリセに近付くとどうなるか分かっているかなあ、イアソン。何処かのメカクレみたいに花火……いつちやう？という脅迫により、何とか撤退に成功した。

「じゃあ気を取り直して……次は誰にあたってみようか？」

「クラス的にも、ライダーの方が宝具を多く持っているサーヴァントが多いよね」

「じゃあ、つぎはライダークラスのサーヴァントにきいてみよう」

そうして、取り留めのない話をしながらカルデアの廊下を歩いていると、正面からピシク髪のライダーがいたので相談してみることにした。

「うん、いーよ。僕は元々、色んな仲間から力を借りていたからね。ねえねえ、誰を召喚したい？」

予想は出来ていたが、まさかの即OK。

「出来るかどうかはまだ分からないから、まずは借りるだけでもいいかな？」

「そうだなー。だったら、ヒポグリフがいいかな？」

「どうかな、ボイジャー」

「うーん、やってみなければわからないけれど、しよくばいにはいいんじゃないかな」
まずはヒポグリフでやってみよう……そんな話で落ち着いた所、何処から聞いていたのかブラダマンデがぬつと現れた。

「え、上手くいけばロジエロを召喚出来るんですか!？」

その迫真具合に、マスターの脚が一步後退る。

「うーん、出来るかどうか分からないけど、ね。出来たらいいなーってことで」

「あー……そうでしたか。でも、やってみなければ分からないですよね!」

ヒポグリフを触媒にしたら確実に召喚出来ると淡い期待を寄せていたようだ。とは
言え、やってみなければ分からないものだ。

こうして触媒を確保した立香は、マシユを連れて召喚ルームへ向かうことに。

さて、召喚召喚。出来たらいいんだけど……私はこの運命に打ち勝てるのだろうか。
いや、打ち勝つためにここにいるのだ。

「それにしても、聖遺物かあ」

「どうしました、マスター?」

召喚ルームには、マシユの他に、付き合ってくれたボイジャーやエリセ、ついでにやつ

てきたアストルフオとブラダマンデがいる。

「いやね、骨董品って言うとき、カルデアへ来る前に見ていたテレビを思い出して……」

カルデアに来る前、と聞いてマシユが興味を持ったらしい。

「それはどのような番組なのでしょうか」

「色んな骨董品を、鑑定士が鑑定して真贋を調べるの。それで、もし本物だったらどれくらいの値打ちがするものなのかを提示するんだ」

よくは分からない素材だらけだけど、他の魔術士が見たら君を殺してでも奪いにくるだろう、と孔明は言っていたけれど、やっぱりその価値が私には分からない。

「へー、そのような番組があるんですね。何か、決め台詞なんかがあったんでしょうか」

「うん、あったよ。こう……オーオン・ザ・ライスって」

カツコつけようとして、なけなしの聖晶石が手から離れていき……

——召喚陣が起動してしまった。

「」「え?」「」

「あ、ちよ、まだ、心の準備が……!」

慌ててももう遅い。既に召喚は始まってしまったのだ。そうして、なけなしの聖晶石

を使って召喚されたのは……

——それは、とても紅かった。白すらも紅く浸すそれは、香りだけで数多の人を圧倒する。エリセ以外の全員が目を背ける程に。ついでに、ヒポグリフが逃げ出す程に。

何度もそれを見た。それをこの場で見た私は、深く膝を折るしかなかったのだ。

「……ダメ、だったか」

「ドンマイです、先輩」

——激辛麻婆豆腐

「やっぱり、そううまくはいかないか」

「……マスター、大丈夫ですか？」

「……さんねん」

ふと後ろを向けば、能天気感想を述べるアストルフオ、マスターの項垂れ具合に思わず心配するブラダマンデ、残念そうに視線を落とすボイジャー、そして、麻婆豆腐を見て目を輝かせるエリセがいた。

あの後、慌ててヒポグリフを追って姿を消したアストルフオとブラダマンデを置いて、今回の結果を整理する。

「まあ、エーテル体で出来たものは使えないってことか。今回分かったことは」

「あたらしいサーヴァント、こなかったね」

「やっぱり、カルデア式召喚だからかな……それとも、エーテル体じゃ召喚陣に認識されないのかな」

三人が思いつきの感想を述べた所で、整理を終えたマシユが声をかけてきた。

「ところで、こちらはどうしますか？」

そうして5個以上は積まれた——激辛麻婆豆腐。一体、何がいけなかったのだろうか。

「これって食べられるの？」

「普段はマナプリ行きだけど……食べる？」

「うん、じゃあボーイジャー、一緒に食べ」

「え、わーわー……ぼくはもうちよつとマスターにつきそってみようかな、って」

断られたエリセがジト目でこちらを見る。止めて欲しい。彼はその殺人的な料理を口にしたいだけなんです。何なら、私も口にしたいくありません。

「まあ、いつか。それじゃあ、これを持っていくよ」

「お願いします」

何処か楽しそうに、それを持ち去って行く。

「たすけてくれてありがとう、マスター」

「分かるよ、あれを口にしたいくはないからね……」

「それにしても、あれを食べてどうしてピンピンしているのでしょうか。エリセさんは」

今日の所はここで店開きだろう、後の事はダ・ヴィンチちゃんに興味を持ったら調べられるかもしれない。

「そうだ、ボイジャー。キッチンでおやつを作っているって聞いたから食べに行く？」
今回の同行人にもご褒美が必要だろう。

「いいの、やった！」

「マシユも勿論行くよね？」

「ええ、ご一緒いたします」

お題14：UDON DAY

それは武蔵ちゃんの一言から始まった。

「おうどん食べたい」

「この前の特異点では食べなかったの？」

何故かミートタワーまで登り切ることになったが、そういえば武蔵ちゃんの姿を見ていなかった気がする。

「アキハバラね。ラーメンとかお蕎麦はあったんだけど……おうどん屋が中々なくて」

「そうなんだ」

言われてみればそうかもしれない。ラーメン屋や立ち食い蕎麦は多いが、うどんは蕎麦と一緒に提供している程度だろう。

「この食事は美味しいし不満なんてないんだけどね……偶には食べたいな〜って。けど、紅閻魔ちゃんにはね……言い辛いというか」

「はははは……」

全く以てその通りである。聖杯うどんのことを考えると、こうしてきちんと反省して

いるだけいいのかもしれない。

「おや、マスター。どうしたのかね？」

通りがかったエミヤが、俺の様子を見に来たようだ。

「武蔵ちゃんがね、偶にはおうどん食べたいって」

好物が食べられない気持ちは分かる。だって、日本人だもの。

「ふむ……」

何か妙案があるのだろうか。まあ、エミヤなら幾らでも出てくる気がするが、一人のサーヴァントの為にそこまで力を入れなくても……いや、入れるだろう、彼ならば。

「うどんと言えば地域によつて様々な方法で食べられているが……この機会だ、試してみるのも良いか」

「え、本気なの。エミヤ」

まあ、この人たちが作るなら、外れなんて在り得ないから期待はするけれど……

「何、彼の宮本武蔵からのオーダーだ。少しくらい応えても問題あるまい」

「え、いいの!？」

跳び上がらんばかりに武蔵ちゃんは喜色満面の笑みでエミヤを見る。ただ、そういった視線に慣れているのか、さらりと流した上で……

「折角だ。どうせ作るなら色々やってみようじゃないか」

夏の装いを着た時のような子供っぽい目をしていた。

それが起きたのは三日後のこと。その日は特異点や異聞帯の攻略が無かったため、トレーニングで汗をかけた後にお昼を食べに食堂へ行った時だ。

うどん、うどん、うどん、UDON……皆の食事のありとあらゆる食事がうどんだった。驚くことに、うどんと言えば、きつねうどんやたぬきうどんの定番から、肉うどんやカレーうどん、焼きうどんが浮かぶかと思うが……それにしても。

「……種類が多い、だど？」

一体どれだけの種類のうどんを作ったのだろうか。大部分の利用者がうどんを食べているにも関わらず、あまりレシピが被っていないようにすら見える。よく見れば、洋風のうどんや中華風のうどんなんかもある。最早何でもありか。

ふと、数人が食べているうどんを見ると、更に変わったことに気付く。白いうどんではなく、桃に近い赤のうどんや緑色のうどんを食べているようだ。

「へえ、こんな色の麺も作れるのね」

感心しながら食べているのは女性のサーヴァントや職員だ。なるほど、食べやすい量で盛られたうどんに加え、紫蘇の千切りや大根おろしで彩ったそれは春を思わせる一品だ。さっぱりした味も併せて、女性たちに人気なのだろう。あ、珍しいうどんだからか、ゲオルギウスさんが写真に収めている。

「なるほど。この酸味は梅干しか。梅干しは白米に合わせるものだと思っていたが、このような使い道があるのだな」

柳生さんや宝蔵院さんが感心したように呟きながら食べるのを聞いて理解した。あれは恐らく、梅干しを練り込んだ麺なのだろう。他にも緑色、恐らくほうれん草を練り込んだうどんを食べるサーヴァントもいる。

「……見ていたら、お腹減ってきた」

そうして、いつも食事を作ってくれる彼らの元へ近付くと、発端となった人物もいた。

「え〜、こんな色々作って貰っちゃっていいの？」

信じられないものを目の当たりにしたような武蔵ちゃんの声だ。

「折角の機会だからな。カルデアは食事こそ十分だが、季節を感じる機会が少ないだろう。偶にはこうして工夫を凝らすことも大事なことだ」

エミヤの言うことには同意だ。何しろ、外に出られないも同然なのだ。

「それにしても……エミヤは色々知っているし、本当に器用だよ。今回はうどんをやったけど……もしかして、練り込みとかはパスタやピザでも使えるんじゃないかな」

「その通りだよ。パスタだとバジルやホウレン草などで使われることもある」

「ほうほう」

そう言って、メモを取っているのはブーディカだ。今回の試作も手伝ったのだろう。

「おや、マスターか。今日は試作も兼ねて様々なうどんを作ってみた。色々あるが、どんなうどんを食べたいかな?」

元は武蔵ちゃんの発言から始まったのだ。

「武蔵ちゃんと同じうどんは出来る?」

「どれを食べたいんだ、マスター?」

エミヤの質問が分からず、武蔵ちゃんが持つているお盆を見る。

「なるほど、そういうことか」

麺の太さが全部違う……しかも、麺を味わうために一つ一つの量を少なくしているぞ、この大剣豪……!」

「説明しておく、きしめんにさぬきうどん、それから梅干しを練り込んだ細麺のうどんだ」

エミヤから、麺の説明が入る。とりあえず、色んなうどんを食べたいんだな、武蔵ちゃん。

「いや、まさかこんなに種類があるとは思いませんでした。折角だから、色々試さないで勿体ないじゃない」

「……と言う訳だ。マスターは何にする。一番人気は梅干しの冷やしうどんだが」
多分、ここでそれを言うことは残りが少ないからだろう。

「じゃあ、それをお願い」

「了解した。茹で上がるまでの間、席に座って待っていてくれ」

折角だ。出来上がるまでに、武蔵ちゃんの食べっぷりも見ておこう。

「あれ、マスター。一緒に食べる？」

「折角だから、うどんに目が無い武蔵ちゃんの感想を聞いてみたい」

「そつかく。マスターの分が出来上がるまで待つてあげたい所だけど、温うどんだけは先に食べちゃっていい？」

「勿論」

温うどんは伸びると美味しくないからね。

「ごめんね。先に頂くわ、マスター」

さて、そんな武蔵ちゃんが平たい麵をずずつと一口。

「んん、美味しく。このコシに麵全体の噛み応え、これがきしめんかく。食べたことあると思うけど、こここのうどんはまた違いますなあ……」

麵を食べる武蔵ちゃんを見てみると、更にお腹が減った気がする。満足そうに何度も頷きながらきしめんの温うどんを食べ終える。一度食べ始めると手が止まらなくなつたらしい。こちらの茹で上がりを待つことなく、次は梅干しが練り込まれたうどんに手をつける。

「へえ、初めて食べたけどさっぱりしていて美味しく。付け合わせの紫蘇もいい味してる。うんうん、暑い時にはこれが一番ねえ」

まるで、暑い日にビールを飲むサラリーマンの台詞だ。更に腹の虫が鳴った気がする。中太ながらもさっぱりとしているからか、するするっと口に入るようだ。瞬く間に食べ終えて、さぬきうどんを食べ始める。

「ん〜。やつぱうどんと言えばこれよね〜。このコシにのどごし……やつぱり、うどんは美味しいなあ……」

やばい。どれも食べたくなくなってきた。

「マスター、出来上がったから持ってきたぞ」

丁度そこに、天の遣いがやってきた。

「あ、うどんのお代わり頂戴！」

「了解した。マスターはどうするかね？」

同時に、悪魔の遣いでもあったようだ。

「……お願います」

「量は少なめにしておくぞ。何、うどんは保存が効く。例え、今日食べることが出来なくとも、別の日に食べたいと思ったら作ることは出来る」

よし、まずは梅干しを練り込んだうどんを堪能しよう。

「ごちそうさま」

気が付けば空の器が二つ。美味しそうに食べる人を見ると余計にお腹が空くよね。

「マスター君も成長期って所ね。梅うどんと追加で頼んだ肉うどんもけろつと食べちゃったね」

「目の前で美味しそうに食べる人がいたのと、作る人が上手だからね」

おっと、横から褐色の腕が。

「それは光栄だ、マスター。それはそうと、午後からも予定が入っているとマシユが言っていたと思うが、時間は大丈夫かね？」

「そう言えば……マシユはお昼、何を頼んだのだろうか。」

「エミヤ。そう言えば、マシユは何を頼んだの」

「ああ、皆の様子を見て、感心したようにこちらを見た後、普段は見られない梅のうどんを頼んでいたよ。まあ、梅干しの酸味に苦戦していたみたいだが」

確かに、梅干しの酸味は日本人じゃないと中々慣れないよね。

「確かに、うどんは大体白いからね。それより、あんなうどんってあるの？」

「あるとも。梅干しで有名な和歌山県が発祥だったはずだ。発売されたのは平成になつてからだがね」

「へえ、初めて知った」

おや、うどんに目がない武蔵ちゃんも知らなかったようで、かなり驚いている。

「ふむふむ、そうなのね。私が生きていた時にはそんなおうどん無かったから新鮮だったわ」

あれ、何故か唐突に悪寒が。

「いやー改めて、おうどん美味しかったわ。そう言えば貴方、アーチャーだけど二刀流の剣士でもあるって聞いたんだけど……」

「確かに私はアーチャーだが、時と場合によって剣を使うこともある」

「へー、そうなのねー」

あ、ヤバイ。鯉口を切ろうとしていない、武蔵ちゃん。

「何をしようと言うのかね」

「何をしでかすつもりでちか」

エミヤは兎も角、閻魔ちゃんは何時の間に……あ、気配遮断か。武蔵ちゃんも観念したのか、両手を挙げた。

「ご、ごめんなさ〜い。この通りです」

「どうちますか。エミヤ様」

「とりあえず、一週間は皿洗いだな」

流石、食堂の主。あらゆる英霊にはそれなりに敬意を持っているらしいけど、自分の

領分を乱そうとする者には容赦がない。

「助くけくて、マ〜ス〜タ〜」

「聖杯うどん」

あれと似た事態を引き起こす訳にもいかない。

「うっ」

「それに、このうどんパーティをやる為に色々準備してくれたんだから、それ位やってあげたら？」

それを聞くと、決心がついたらしい。

「それを聞いては仕方ありません。この武蔵、皿洗いの手伝いをさせて頂きます」

「割らないように気を付けるでちよ」

こうして、うどんパーティが幕を下ろしたのだが、今回の企画が武蔵ちゃんの一言だったのが何処かでバレたらしい。特定の好物を持つ英霊たちが次は別の食材を使って色々作って欲しいと言う要望が上がったとか。

お題15：古き友人との語らい

いつもは食事の準備を共にするメンバーと献立を考えている頃合いだが、今日は珍しく友人からの呼び出しがあった。

「ねえ、えんまちゃん。今日の夕食、見繕って貰っていい？」

「了解でち。お二人分で宜しいでちか」

「いえ、今日は一人分でいいわよ。料理が出来たら、部屋まで持ってきてもらえるかしら」

「おや、珍しい。てつきり項羽様か蘭陵王様と一緒に食べると思っただのでちが……そんな気分の時もあるかもちれまちなん。」

「了解でち。腕によりをかけて作ってきまちなよ」

さて、ぐつちゃんには何を作りましょうか。

食堂へ戻れば、いつものメンバーが夕餉の支度を始めておりまちな。今日も大変だと思うのでちが、事情は話しておかないといけないでち。

「……と言う訳で、夕餉の時に少し離れるでち。忙しいのに申し訳ないでち」

「いやいや、そんなことないよ。こっちは食材から調理方法まで色々手助けして貰っ

ているんだからね、紅閨魔ちゃん」

ブーディカ様は優しいでちね。

「キャットにニンジンとはこのことよ。紅先生、ここは玉藻乱舞にお任せあれ」

おまえ様は何を言っているか、相変わらず分からないでち。何となく任せてくれ、と言われている気がちますが。

「いつも紅女将にはお世話になつている、ここは任せて欲しい。折角だから、旧友とゆつくりされてはどうだろうか。何、サポートメンバーは充実しているからな、その者に頼んでみるさ」

あちきが言うのも何でちか、お前様の方こそ休んだ方がいいのでは。

「ありがとうでち。それじゃあ、準備をさせてもらうでち」

ぐつちゃんは好き嫌いが無いからどうちましようか……シオン殿のお陰で魚に困っていないでちから、焼き魚にちましようか。それから山菜のお浸しに野菜の煮物、それから、御御御付けには豆腐とわかめを使いましよう。それから白米でちが……折角でち、山菜と魚を使つて炊き込みご飯にちましよう。そうと決まれば、後は作るだけでちね。

「それにしても久し振りでちね。ぐつちゃんから頼みごとをされるのは」

昔は偶にしか来なかつたが、こうして毎日顔を見る日が来るとは思わなかつたでち。

これも、マスター様の縁によるものなのでちよう。皆からはのんびりしてもいいと言われたものの、食ベにくるお客様はマスター含めて沢山いるのでちから、早めに戻つてくるようにしないといけないでちね。

後ろめたい気がちますが、厨房を後にしてぐつちやんの部屋まで着きまちた。

「ぐつちちゃん、ご飯を届けに来まちたよ」

「ありがとう、えんまちゃん」

おや、これは刑部姫の部屋にあつた炬燵ではないでちか。中々貴重な一品だつたと思いまちが……よく持つてこれ待ちたね。これなら他の雀の手を借りずとも、食卓へ乗せられるでち。

「それじゃあ、あちきはこれで……」

「えんまちゃん、偶には話し相手になりなさい」

とは言え、あちきにはまだ仕事が残つているのでちが……

「まだ厨房が忙しそうなのでちが……」

あ、この顔は……

「どうせエプロンの似合う弓兵が助つ人を呼んでいるはずよ。さつき、何人がが食堂へ向かつたのを見かけたわ」

既に手を回しておりまちたか。

「そ、そうでちか……なら、大丈夫でちようか？」

「えんまちゃんも働き過ぎよ。今までもあの弓兵達が回していたんだから、今日くらい休んだって何とかなるわよ」

確かに、彼らはあちきが来る前も回していたってマスターも言っただけ。皆もゆつくりしてもいいと言っていました……

「そうでちね。丁度、あちきの料理について、ぐつちゃんからも感想が欲しいと思っただけだよ」

「言うわね、えんまちゃん……ま、いいわ。折角えんまちゃんが作ってくれたんだもの。しっかり頂くわよ」

「今日の献立はでちね……」

それにしても、ぐつちゃんはいい顔をするようになりましたね。マスター様の縁を中心に、項羽様や蘭陵王様と再会出来たことが大きいのでちよう。色々騒ぎを起こしているという噂は気になりましが。

「今日も美味しいわよ。えんまちゃん」

「それは良かったでち」

それにしても、手元が落ち着かないでち。以前だったら、暇さえあれば閻魔亭の掃除をしていたけれど……

「えんまちゃん。落ち着かないの？」

ぐつちゃんにはお見通しでちたか。

「全くえんまちゃんは……そうね、項羽様や蘭陵王には話していたけど……夏の特異点で起きた話でもしましょうか」

そう言えば、あちきはカルデアの台所の整理も兼ねて出ていなかったでちね。項羽様に聞いたら、気になるなら虞に聞いてみるとよい……と言っていまちたが。

まあ、まさかぐつちゃんのDieジエストを聞かされるとは全く思わなかったでちが。

お題16：夏の魔物

「先行舞台として到着したはいいが……」

一昨年はホノルルとハワイが合体したルルハワ、昨年はラスベガスだった。今年も素晴らしい都市だろう……そんな想像していた私達が見た光景は、見渡す限りの緑と湖だった。

「しかし、これは参った。せめて、どんな場所か分かっていれば良かったのだが。これでは、折角のアロハが栄えないではないですか」

「それには同意しよう、ガヴェイン卿。しかし、我らの役割はマスターが安全に過ごせる場所の発見と周囲の散策です。我ら三騎であれば、大抵の敵は払うことが出来るでしょう」

「そうだな、ランスロット卿」

無事に特異点へ到着し、周囲に敵が居ないことを確認した三人は手に持っていた武器を仕舞う。

「まずは、マスター達の拠点になり得る場所を探しましょう。行きますよ、楽しいトリスタン」

「私は哀しい——このような場所では曲を聞かせる相手が居ないではありませんか」
何故、三人がアロハのまま出撃してしまったのか、それは度重なる夏の魔力に中てられた……のだろう、きつと。生前にはつちやける場が少なかつたからとか、そんな事ではないはずだ、きつと。しかし、そんなアロハな三騎士でも彼らは円卓の騎士。幾度の行軍で鍛えられた彼らの健脚が、それを見つけるのは時間の問題だった。

「ふむ、これはコテージか。マーリンや他の魔術士が来れば詳しい事は分かるだろうが、拠点としては十二分か」

「しかし、問題は中です。そこに危険があつてはマスターも安全に過ごすことが出来ないでしょう」

「そうだな。ガヴェイン卿、トリスタン卿。まずは中を調べることにしよう」
気配がない事は分かつていたが、三人は一応の警戒をして散策を行う。しかし、何が起きる事も無く、室内の散策は終了した。内装はサーヴァントやマスターが数人で屯しても問題ないほど広いラウンジ、キッチンなどの水回り、二階には大所帯でも問題なく泊まれそうな個室が複数、と。しかし、それだけの施設が人気の無いこの場所にあることが少々気がかりだった。

「このような場所で、此処まで揃っているものなのか？」

「……時代の違いはあるかと思いますが、卿の意見に同意ですね。ラスベガスやルル

ハワのような都市であれば兎も角、秘境と呼べるような場所でベッドに水道などがしっかりと通っている……このような事があるのでしょいか」

「ですが、これ程の拠点は他に無いかと。他の先行部隊が到着次第、直ぐにこの場所を伝えた方が良いでしょう」

「違うない」

ふと、窓から覗く太陽を見れば、天高く昇っていた。

「もうこんな時間か。簡単なものだろうが、食事にするか」

三人が取り出したのは、先行部隊に渡された食事で、カルデアのキッチンを預かる赤い人が監修したものだ。数分程度で仕上げているのを見たランスロットはそれを簡単な料理と言ったが、赤い人が監修した数分程度の食事は彼らが数分で出来るような料理とは比較することすら。

「……美味しい」

「ふむ、これにマツシユとエールがあれば言う事なしですね」

「……私は哀しい。草花のような色鮮やかな食事を味わう機会がサーヴァントになつてからだったとは」

三人はコテージを出た後、湖畔などを散策していたサーヴァントを発見する。

「……と言う訳で、この辺りにマスターがレイシフトしたならば、其処にあるコテージ

へ」

「了解した。それで、これから貴方達は何処へ？」

「ええ、三人で森へ行こうかと。貴方達の話だと狂暴化した獣がいるとか。それでしたら、調査ついでにマスターが来る前に少しでも狩っておこうと思ひまして」

すると、集まっていたサーヴァントの1騎であるジェロニモが口を開く。

「貴方達に限っては、万に一つも無いかと思うが、どうか気を付けて欲しい。まだ調べられていないのだが、この土地は何かしら呪的な影響があるみたいだ」

「ご心配頂き、ありがとうございます。もし、何かあつたら直ぐに声をお掛けしますの
で」

ジェロニモとの話を一度切り上げたガヴェインが、近くで曲を弾いているトリスタンと、もう一方で情報収集しているはずのランスロットを探そうとして……そのランスロットが呆然とした立ち姿で湖を見ているのが目に入った。

「——ランスロット卿？」

「ああ、ガヴェイン卿か。済まない、少し気になることがあつてな」

そうして湖を眺める端正な顔は、眉が釣りあがっていた。

「貴方程の者が珍しいですね。もしかして、マシユ殿かガレスの事でしょうか」

「その二人も気になっている所ではあるが、目下の悩みは目の前の湖でな」

「湖、ですか。ああ、貴方は——」

「ああ、不思議なことにあの湖を見ているとな、私に囁いてくるのだ。この湖には決して入るな、と」

ガヴェインはその言葉で、ジエロニモが話していた内容を思い返す。

「……それは」

「ああ、もしかしたら我々が向かう森も同じかもしれない」

「なるほど、一層気を付けなければなりませんね」

トリスタンを回収した二人は、拠点となるコテージの場所を伝えた後、ジエロニモ達とは合流せずに深い森へ足を運ぶ。

——それがこの夏の最後の思い出になるとは、この時の三人は想像すらしていなかったが。

彼らが入った深い森は長い間、人の手が入っていないかったらしい。家の支柱にも使えそうな程に太い幹を持つ木々が、空からの恵みを奪い合うように天へと伸びていた。

「これ程の深い森が、この特異点では色濃く残されているのですね」

「そうですね、森とはこのように、人の手が無くとも逞しく生きることが出来るのですね。ところで、貴方はどう思いますか、ランズロ……ツト卿？」

アロハを着ているにも関わらず、その端正な顔からは気難しい表情がありありと浮か

んでいた。

「……ガヴェイン卿、トリスタン卿、この森について貴公らの意見を伺いたい」

「突然どうしたのですか、ランスロット」

「ジェロニモ氏とランスロットの予感が当たりましたか。戦つても勝てる相手ではありませんが、これは撤退すべきかと。どうやらこの森も普通の森では無いようです」

「私も同意見だ。直ぐに撤退して……何だ!？」

——先程まで日は高く昇つていたはずだった。しかし、周囲を見渡せば辺りは真つ暗な闇に覆われている。そう、いつの間にか夜になってしまったのだ。平常時であれば、その程度の危機も物ともしない彼らだが、この特異点の夜は怪談から始まる恐怖の祭典。オオカミの遠吠えがあちこちで響けば、姿なき人影が跋扈する夜の森へ変貌する。気が付けば、近くで歩いてきた筈の二人が姿を消していた。

「……ガヴェイン卿、何処だ。返事をしろ!」

如何に屈強な彼らであろうと、その法則に打ち勝てるものでは無かつたらしい。

「——わ、たしは哀しい。今年は夏を……謳歌出来ないのですね」

「何処だ、トリスタン卿。私の声が聞こえるならば返事をしろ!」

終わらない夜は如何に強靱な彼らであっても確実に精神を消耗していく。

「ガヴェイン卿、今すぐ下山するぞ!」

しかし、下山を試みても同じ場所をループしているかのような錯覚すら覚える。

「この山、全くどうなっている……む」

ふと気が付けば、色の付いた煙が眼前に迫っていた。

「何だ、この靄みたいな煙は……」

そうして、ランスロットは信じられない人物を見た。

——馬鹿な……どうして彼女が、ここに居る？

「二度と会う事は無いと思っていたよ、——」

……こうしてアロハ三人衆は、深い森で短い夏を終えたのだった。

お題17：とあるイベント時のカルデアより

「……はい、主の命であれば」

「じゃあ、お願い出来るかな。後で聞きに行くからさ」

「ハッ」

流石は忍者。一瞬で姿を見せたかと思いきや、一瞬で姿を消す。

「とりあえず、微小特異点の解決に行こうか。同行するメンバーは……」

さて、自分がカルデアにいない間、皆はどう過ごしているんだろうか。

日差しの差さないカルデアでは、時間を意識しなければ簡単に生活のリズムが崩れてしまう。サーヴァントであれば、日中だろうと夜中であろうと活動に支障はないだろう。しかし、生きている者達はそうではない。

——カルデアのある一角、とある倉庫から緩慢な動作で起きる中年の男がいた。

「今日も寝心地が悪かった。早く私専用の部屋を作って欲しいものだが……」

ふと、夢に出てきたホームクルス達を思い出す。そう言えば、彼らの寿命が来る前にハワイへ連れて行ったものの、私の中のサイレンが鳴り響いた為、急いで脱出したのは

何時の話だったか。あの時は悪い事をしてしまった。だが、結果的に危機を避けられたはずなので、ノーカウントにして欲しい。何しろ、私は一文無しなのだから。

「……さて」

ここ最近、異聞帯の攻略以外にもあまりに理解出来ない出来事があり過ぎて、頭がパンクしかかったことが何度あったろうか。姉にしろ、あの藤丸が怯えるチエイテピラミッド姫路城にしろ……というかあれ、本当に何なのかね。本当に何なのかね。

「知らない方がいい事もある、か」

そもそも、他の面子に聞いてもまともな回答が帰って来ない以上、碌でもない代物なのだろう。確か……技術顧問は今日もマシユと一緒に、微小特異点ヘレイシフトした藤丸のサポートをしているはずだ。私も上司として見ておくべきだが、これに関しては彼らの方が上手だ。ならば、基本は彼らに任せておくのが一番だろう。

「そうなるかと彼らは……」

折角だ。彼らの日頃の労いも兼ねてケーキでも作ってやろう。何だかんだ言って技術顧問も無理をするし、マシユも藤丸に何かがあると血相を変えるから、多少の息抜きは大事であろう。うむ、他に取り急ぎ確認する資料も無さそうだし、作りに行くとしよう。

「それにしても、毎度の如く微小特異点が発生するとは。これも人理漂白の影響だろう

か

私に出来ることは無いので、アフタヌーンティーとケーキを楽しむだけだ。

……幾らリソースとなる聖杯が取れるチャンスだからとは言え、些か頻度が多すぎるのではないかね。

——料理はいい。

調理中は余計なことを考えることもないし、美味しいと思える料理を食べた時は心の底から幸せになれる。だから、料理にしる、菓子にしる、それらを作っている間は余計な——例えば、シミュレーション室で模擬戦闘を始めたサーヴァント達が、シミュレーション室以外でも戦闘を始めようとしたことや、ムニエルが成人向けのゲームを片付け忘れたのか、子供サーヴァントに見つかつたことなど——そんな身に余る面倒事を忘れられるし、出来上がった料理を食べ終わるまでは、そんな些細な悩みなど吹き飛んでいくからだ。そこに笑顔で食べる者がいれば一層というものだ。

「よし、これでいいだろう」

さて、確か今回の特異点は博物館に收容された聖杯の回収が目的だったな。うむ、異聞帯攻略時のような荒事が少ないのは何よりだが、その分理解できないことが起きるから用心せねばなるまい。食堂に置かれた時計は、短針が二を回っていた。

キッチンを出た後、作ったケーキとティーポットを台に乗せて、二人の元へ足を運ぶ。

「あ、ゴールドルフ新所長。お疲れ様です」

「やあ、ゴールドルフくん。よく来たね。大方、立香君の確認かい？」

「うむ。首尾は順調かね？」

そうして、モニターに映る映像を見て目を疑った。……何で、天草四郎時貞が怪盗風の衣装を着ているのかね？

「……考えても仕方ない、か」

彼女らには、その独り言は流されてしまったが。

「それはバッチリさ、普段はあまりやらない広告宣伝、コラム作業にやる気を出したサーヴァント達が居るからね」

確かに普段ならば敵対戦力に対して最適な人材を用意するところだが……ああ、だからか。

「通りでシエイクスピアや何故かライオン頭のエジソンが張り切っていた訳だ。うむ、問題ないなら構わない。それより疲れていないか。幾ら君たちが優秀でも、休憩は必要だろう」

「そうだね。モニターさえ維持できていれば少しは休んでもいいかもしれないね。マシユ、休んでいいからね」

「それを言うならダ・ヴィンチちゃんだって休んだ方がいいですよ。レイシフトも安定

していますし、あまり休まれていないのでは？」

全く、二人共無意識に無理をしようとするからな。ここは私が言つてやらないとダメか。

「あー、こほん。いいかね」

「あれ、それは何ですか」

マシユ君、今気付くの。折角、言おうとしたのに。

「おー、もしかして私達のために作つてくれたのかな？」

「うむ、日頃から異聞帯だけではなく、微小特異点でも頑張つているからな。キッチンの者から材料を借りて私で作ったものだ、感謝して食べなさいよ」

料理に関しては何やら生意気な赤い弓兵がいるが、幾ら英霊と言えど現代の調理技術を舐めて貰つては困るのだよ。

「ありがとうございます。ゴルドルフ新所長」

「いやー、ゴルドルフ君の作ったケーキか。こりやあ楽しみだ」

うむ、何だかんだ言つて、二人共年若い少女なのだから、偶に食べても罰は当たらないだろう。

「それじゃあ、切り分けるから待ちたまえ」

さて、あまり私の分を多くし過ぎると、技術顧問に文句を言われるからな。気をつけ

て切らないと……今、誰かそこに居なかったかね。いや、気のせいかな。まずはケーキを食べるとしよう。

カルデアへ帰還した藤丸が、バイタルチェックを終えた後にマイルームへと戻る。そして、他に誰も居ないかを確認した後、手を合わせて音を鳴らす。

「お呼びですか、主殿」

音もなく、赤髪の忍が姿を見せる。

「うん、お願いしたこと、どうだったかな」

「今からお話致しましょうか」

「うん、寝る前に聞いておきたいな。皆がどうしているのか、やっぱり気になるから」

「承知致しました。まずは今朝の話からですが……」

そうして赤髪の忍、風魔小太郎は、ゴルドルフ・ムジークを含めた職員達の行動について、簡潔に説明する。

「……以上が、皆様の行動でした」

「ありがとう、小太郎」

「いえ、この程度のことなど私達にかかれば造作もありませんよ。そう言えば、どうしてこのようなことをお願いしたのでしょうか」

小太郎の問いに、彼は照れ臭そうに頭を掻く。

「いやさ、普段は特異点の攻略ばかりだから、マシユとかダ・ヴィンチちゃんとか、皆はどうしているのかな、って思ってたさ」

「なるほど、主らしい心遣いです。そういえば、話に出てきたケーキの件ですが」

「うん？」

「どうやら、話の続きがあるらしい。しかも、新所長作のケーキ、思わず聞き耳を立てるしかない。」

「結局、ケーキを振る舞ったことが他の職員にもバレてしまったのですが、これは私の分だと言いついてゴールドルフ所長はケーキを渡さなかつたようです」

「ムニエル達職員が詰め寄る様子が思い浮かんだのか、うんうんと頷く素振りを彼が見せる。」

「どうなるかと思いましたが、エミヤ殿やブーデイカ殿へ事前話をしていたのでしよう、職員達のケーキは彼らが既に作っていたようです」

つまり、自分だけケーキ無しってことなのか……酷くない？

「そしてこれは余談なのですが……ゴールドルフ殿が作ったケーキの残りが食堂の冷蔵庫に置いてあるとか」

つまり新所長のケーキを食べるチャンスはある、ということか！

「……の、残っているなら食べられるかな」

「あまりお勧めは出来ませんが、食堂に行きますか？」

でも、気がかりがある。こんな時間に甘味を取ろうとすると……

「だよ。水なら兎も角、甘味目的でエミヤにバレるとお叱りがなあ……」

エミヤお母さんから一本取る（つまみ食い）のは並みの英霊でも難しいと聞いた。そして、その後に畳み掛けるような説教が待っていることも。

「どうする、恐らく明日の朝には無くなっているだろうゴツフケーキだ。ならば、今から食堂に行つて確保だけでも……！」

「お待ち下さい、主殿」

思わず、心の声が出ていたようだ。

「小太郎、止めないで。今のオーダーは、明日には無くなるだろうゴツフのケーキを食べること……！」

この想い（食欲）は、決して間違っていない。間違っていないんだ！

「その件ですが、ブーディカ殿がゴールドルフ殿に内緒でこつそりとマスターの分を取り分けていましたし、エミヤ殿とブーディカ殿が作ったケーキもマスター用に確保している、と聞いています」

……これは聞き捨てならない。

「……ホント?」

「ええ」

「……ホントにホント?」

「はい。エミヤ殿とブーディカ殿から明日の昼にでも用意する、と言っていましたよ」

オーケー。それなら素直に言う事を聞こう。

「分かった、寝る」

翌日の昼、昼食を食べ終えたマスターの下に新所長作のケーキが届き、満足な笑みを浮かべて完食したとか。

お題18：マーリンチご苦勞様、じゃあ次にいこう

昼のミーティングが終わり、遅めの昼食を取っていた時のこと。定食を食べ終わったタイミングを図って、セイバーのアルトリアから声を掛けられる。

「マスター、少し宜しいでしょうか？」

「……アルトリア、何かあった？」

マッシュが円卓の騎士について話を聞きたいと言っていた時に、勉強も兼ねて同席したことがあったけど……ここまでイライラしたセイバーのアルトリアは初めて見る。

「少し、シミュレーション室を借りたいと思ひまして……」

濟まなそうに頭を下げているけど……一体、何が目的なんだろう。

「いい機会なので、マーリンに灸を据えたいと思ひまして」

「……うん、何かあったの？」

「……他の方には言わないでくれますか？」

聞けば、何となく理解できる話だった。楽しみにしていたおやつを誰かに横取りされた時はイライラするのも仕方ない。それも、美味しそうに食べている感情も好きだけども、偶にはしょんぼりした感情も食べてみたい……などという愉快犯よろしくな行動を

されたら、腹が立つというもの。

「……でもさ、マーリンのことだから気が付くよね」

「その点についても十分に理解しています。なので、一計を案じて欲しいのです。そもそも、このような我儘など許されないと分かっているのですが……」

「まあ、考えてみる。丁度、不足していた素材もあるから、その時にマーリンを連れて行けば……」

普段から、あまり強い要望を出さないセイバーのアルトリアからのお願いだ。

「ありがとうございます」

深々とお礼をするアルトリア……まさか、これがあんなことになるとは思わなかったけど。

翌日、アルトリアの宝具威力を確かめたいからとマーリンを引つ張ってきて、無事にクエストを終えたまでではない。さり気なく退出しようとした時にそれは起きた。何となく嫌な予感がしたマーリンの腕を掴むアルトリア。そして、そこに入ってくるアルトリアと同じ顔をした……

「何故、周回に私を呼ばない。我が夫」

「えっと……ですね。今日の周回は終わったので、そろそろこの部屋を出ようと思って

いるんですけど……」

何故か俺ではなく、部屋の中を見ているような気がする。

「まだ使われているのに、か。丁度いい、私もこの奥に用事があるのだ。マスターもついでくるがいい」

いや、あの奥にはアルトリアとマーリンがいるから……というか、アルトリアとモルガンを接触させては不味いんじゃない……そんな声を掛ける暇も無く、誰かに引つ張られて強制的に退出させられた。

「……一体、何が？」

不味い、シミュレーター室が不味いことになるのでは……？

「ご無事ですか。マスター？」

この声は……ランスロット？

「う、うん。大丈夫だけど、なにか……な？」

一緒に来ていたガウエインから、シミュレーター室の中が分かる端末を渡されて……思わず呻き声が出た。

「……怪獣大戦争、かな？」

白と黒の聖剣の輝きがクロスするように、白髪の魔術士に襲い掛かっている。あ……そう言えば、全体宝具だからアルトリアオルタの方も連れてきていたんだ……

出てきていないと思つたら、混じつていたのか……そうかー、マーリン死なないよね？
「アルトリア、私が一体何をしたと言うんだい!？」

この安心すら覚える胡散臭い声は黒の聖剣を剣で、白の聖剣を杖で受け止めている。アルトリアの師匠を謳い、魔術よりも剣が得意と言う魔術士だけ……何で捌けるんだろう。

「死ね!」

おまけに、乱入してきたモルガンも加わつて、リンチのようなマーリン退治が始まった。ただ、厄介、かつ幸いなことに、モルガンはアルトリア達と致命的に息が合わないらしい。あ、モルガンの魔術がアルトリア達を巻き添えにしようとして……その隙にマーリンが逃げた。

「姉上、もう少し範囲を抑えられないのですか!」

「マーリンはその程度で殺せないだろう!」

おや、誰かが歩いてくるような……気の所為かな？

「ですが、その威力では私達も避けざるを得ません。マーリンはその隙を突いて攻撃を避けるのです!」

「ならば、諸共死ね!」

これは酷い。どうして、こんな大惨事になつたんだろう……

「先輩、先輩、聞こえますか！」

「マシユ！」

端末越しに、マシユの声が！

「モルガンが来た理由……マシユは何か聞いている？」

「ご、ごめんなさい。私もそこまでは……」

端末越しのマシユも分からないらしい。だけど、端末越しからマシユ以外の声が入る。

「それは私から説明しよう」

「おや、この声はブーディカさん。」

「あ、ブーディカさん、こんにちは」

「一体、何があつたんですか？」

「あまり聞きたくないけど、聞いておかないと。」

「あれは、私とエミヤ、キャットがいつも通り食堂にいた時の話なんだ」

「前にアルトリアが言っていたんだけど……マーリンって食事は取らないけど、人が何かをする際に生まれる感情が好物なんだよね？」

「確か、似たようなことをバビロニアでも言っていた記憶がある。」

「だから、姿を消して食堂にいることも多いんだって。聞くまでは、全く気付かなかつた

けど。だから、かな。あれが起こったのは」

「ブーデイカさん、目が遠くなっています」

マシユのツツコミが耳に入る。あれ、何かランスロットも目が遠くなっていない？

「……元はモルガン妃だったのかな。バーヴァンシーにご飯を食べさせたい、つて言つたんだ」

「あ……………」

唐突にフラツシユバックする忌まわしい記憶。即死を放つ作られるべきではなかったチヨコ…………アルトリア・キャスターとモルガンが同じ樂園の妖精だと言うのなら…………そういうことも似る可能性は十分に考えられる。そして、マシユの考えていることは同じのようだ。

「マスターとマシユも落ちが読めたみたいね。それで、私もエミヤも手伝っていたんだけど……………」

「もしかしてあの時みたい…………ある食材を魔術でまとめて投入した、のでしょうか？」

「そう、当たり」

「やっぱり…………か。」

「いやー、私達も急に減ったから何でだろう、つて思っていたんだけどさ」

「ほら、娘にご飯を作りたい、つて気持ちさ。痛いほど分かるんだ。だけど……………ね？」

「そうしたらマーリンがさ。魔術なのか分からないけど……それを消しちゃってさ」

ああ、モルガンが怒った理由は分かった。そして、マーリンが善意でそれをしたことも理解した。だけど、何でそれにアルトリアオルタが混じっているんだろう。モルガン、アルトリアは嫌いだよね。というか、まだ持っているんだ、マーリン。二人の剣戟を捌きながら、モルガンの魔術は最低限の守りと幻術を使って避けている。もう、お前一人でいいんじゃない？

「……ところで、何でアルトリアオルタが混じっているの？」

「あつちはあつちで積年の恨みというか……何と言うか」

呆れたように、疲れたようにブーデイカがため息をつく。

「この前さ、パーシヴァルが来たじゃない？」

うん、頑張って召喚したからね。

「マーリンがさ、食堂にいたパーシヴァルに要らんこと言ったらしくて……」

「よし。その辺りの話は私からさせて貰おう」

おや、キッチンで聞き慣れた男性サーヴァントと言えば……

「あ、エミヤ。食料……どうしようか？」

「幸い、地下に備えている備蓄庫に十分な食料がある。それから、あの時に冷蔵庫へ入れていたのは完成品ばかりだった。それが幸いしたのだろう、モルガン妃もそれには手を

つけていなかったから、被害はさほど大きくない。あの分なら俵藤太殿に言わずとも支障のない範囲だ。まあ、それはそれとして、だ……」

きつと、エミヤも遠い目をしているのだろう。端末越し、かつ画面に映っていないくても想像が付く。それにしても、どうして食堂では他のサーヴァント達が問題を起こすのだろうか、無意識に。

「パーシヴァルがアルトリア達に背丈を伸ばさないと、と言つて肉と根菜を振る舞おうとしたんだ。それを止めたまでは良かったんだが……」

何だ、今度は何があったんだ。

「その時にマーリンがな……年頃の少女に不相应な量の食事は相応しくないだろう、と助言をしたらしい。パーシヴァル殿はパーシヴァル殿で、騎士たる者として食事を取らねば体を作る事は出来ません、と言つて退かなかつたんだが……その時に言つた言葉がな」

その続きを、ブーディカが口にする。

「アルトリアはアルトリアでとつても頑固者だからねえ。君が用意すれば食べてくれるとは思うけど……ここには食堂があるんだ。どうせなら、色とりどりの料理を用意出来る者に任せてはどうだろうか、と」

「別に悪いことではないよな……」

マシユもそう思うよね。パーシヴァルも生きていた時の感覚で言っているだけだし、無理強いをさせるような人でもないし……

「ただね、続けてこう言ったんだ。何、アルトリアはいるだけで戦場を制圧できる。カルデアの食事情という戦場をね、と」

「……………」

うん、雲行きが怪しくなってきた。

「そこにアルトリアオルタが来ちゃってねえ。余計に問題が拗れちゃったの」

「……………具体的には？」

きつと碌でもないんだろうな……それでも、マーリンはアルトリアオルタをなるべく避けるようにしていた記憶があるけれど。

「おっと……それよりも、ジャンクばかり好むアルトリアがやってきたぞう。食生活を改善しなければならぬ程の、暴食の限りを尽くす王様が。パーシヴァルも、そちらの王様よりも、猛獣のようなこっちの王の食生活を改善させてくれないかなあ。私からの助言はここまでだ。それじゃ、私は失礼するよ……と、言っただけを消したんだ」

「……………マーリンシスベキフオーウ」

おっと、何時かフオウ君が言っていた言葉が蘇る。いや、どうしてそうなった。

「ああ、あの時のことですね……」

そうして、深いため息をついたのはランスロット、どうやらその場にいたらしい。

「ああ、だから私を呼んだのですか、ランスロット卿」

何故アルトリアとモルガンが協力とは言えないものの、同じターゲットを狙っているかがようやく理解できたガウエインが頷く。

「突然、理由も言わずに呼び出して済まなかった。ガウエイン卿」

多分、他の円卓の騎士はランスロットの呼び辛かったんだろうな。

「いえ、それにしても私の知らない所でそのような騒ぎがあったとは……」

あれ、誰かがこっちに近付いてきて来ているような……あ、ちよつと危ないよ！

「今、この部屋に入ったら危ないよ！」

って、その姿を……

「大丈夫です。私もモルガンと同じく、マーリンに用事があったので」

おや、全く同じ声でモルガンと似たような装いということは……

「あれが異聞帯の我らが王……」

二人が物珍し気に見ている内に、キャストリアが部屋に入ってしまった。

「……不可抗力ですが、力を貸しましょう。モルガン」

「お前……」

でも、セイバーのアルトリア達は気付いていないので、先ほどと変わらずにマーリン

へ白と黒の聖剣を振るっている。あ、そう言えばアルトリア・アヴァロンは数多いアルトリアから見えないんだっけ？

「この時のために、死なない者を処する魔術を編んだのです。ここで使わずに何時使うというのでしょうか……楽しみにしていたチョコレート罪、ここで贖うといい」

あ、アルトリア・キャスターが普段通りの表情で、見たことない魔術を放って……シミュレータ室で良かったと同時に、恐ろしい。

「……………」

あ、あまりの光景にランスロットとガウエインも閉口している。あれ、マーリン大丈夫??

「全く……乱暴だな、君たちはー」

生きているよ。何か焦っている気がするけれど、ぴんぴんしているよ、この夢魔。

「ねえ、ランスロット」

「どうしました、マスター?」

「マーリンつてき、武芸百般でも持っていたかな?」

うん、どうしてあれを捌き続けられるの??

「ない筈ですが……疑いたくなる気持ちは分かります。しかし、流石はマーリンと言わべきか。あそこまで魔術と剣を巧みに使い続けられる魔術師は、早々いないかと」

ズゴー……!!

端末から物凄い音が……まさか、宝具使ったの!?

「全く……乱暴だな、君たちは!」

本気で怒ったアルトリア達はここまで怖いのか。というか、マーリンはなんでまだ無事なの?

「それにしてもこれは……酷い、ですね」

マシユの声を聞いて、改めてシミュレータ室の様子を見る。

「うわぁ……」

「……これは」

「……………」

これは、酷い。シミュレーション室で構築されていた風景が更地になっている。中心部のクレーターは恐らくモルガンだろう。そして、クロスするように地面に刻まれた剣線はアルトリア達の宝具かな。あ、上空から白い光が……これは、アルトリア・キャスターの魔術だろうね。でも、魔魔を殺す魔術だと言うなら、喰らったら不味いんじゃないか……

「退散退散……後は任せるよ」

今、何か聞こえたような……

「あ、あー……!!」

マシユ、今度は何が……って、いつの間にセイバーオルタとモルガンで戦闘が!

「何故だ。アルトリア。何故、その宝具の名前に私の名前を付けた!」

「後からのこのこと現れた姉上に話す道理などあるまい!」

「貴様!」

……壊れないよね、シミュレーション室。

「……マスター、マーリンを見なかつたですか!」

「へ?」

唐突にシミュレータ室から声を掛けられたので、反応が遅れてしまったけど……少し目を離れた際に、マーリンを見失ったアルトリア・アヴァロンと青いアルトリアが憤慨していた。

「まさか……幻術で逃げた?」

この後、アルトリアとアルトリア・アヴァロンが個別でマーリンを追いかけたみたいだけど……エミヤがデザートの差し入れに行っていた辺り、何も起きなかつたことから捕まえることが出来なかつたんだろう。

さて、シミュレータ室の様子を見たけど、アルトリアオルタとモルガンの戦闘が続いている。うん、どうしようか。

「……この後、どうしよう」

ここまで来たら、自分で止められるかが分からない。困ったなあ……あれ、ランスロット卿が、覚悟を決めた表情でアロンダイトを取り出したぞ。同じように、ガウエインも柄ティーンを取り出したぞ。

「ガウエイン卿、協力を頼めるか」

円卓最強……今度、マシユとのお茶会に呼ぶね。

「そうですね、ランスロット卿。マスター、ここは我らにお任せを」

太陽の騎士……今度、じゃがバターと一緒に食べよう。

「二人共……お願い出来る？」

「お任せください」

おや、こんな危険地帯に誰が……

「ランスロット卿にガウエイン卿……一人でも手が多い方がいいだろう。私も協力しよう。何、夕食の仕込みは終わっているし、食堂もブーディカやタマモキヤットがいれば回るだろう」

諦めたように声を掛けるエミヤ……ごめん、迷惑を掛けて。

「何、いつものことだ」

「うんうん。マスターは自分の時間を大事にしないとね。夕食の遅れは無いから安心し

てね」

……端末越しからありがとう、ブーディカさん。

数日経った後、その後の経過をエミヤとブーディカに聞いてみた。

モルガンについてはブーディカとエミヤ、キャットが付きつきりでお菓子作りを手伝ったらしい。そして、そのお菓子とエミヤが淹れた紅茶で、バーヴァンシーとお茶会をしたのだとか。

アルトリア・キャスターやセイバーのアルトリアにはチョコレートを使ったデザートを作り、セイバーオルタにはジャンクな料理を振る舞ったのかと思っただけ……そこはエミヤ、細かい所に手を入れていたらしく、ケチを付けている所をムニエル達が何度も目にしたらしい。

「はあ……」

ようやく頭の片隅に置いていた問題が全て片付いたので、マイルームのベッドに寝っ転がる。そうした時にふと思いだしたのが……モルガンのマーリンに対する言葉だった。

「マーリンとは悪夢そのもの。何度殺そうと、何かの弾みでひよこつと現れては、最悪の思い出を更新していく。なので……奴は閉じ込めるに限る」

「うーん、頼りにはなるんだけどなあ……」

きつと今日も、マーリンは食堂で俺達の様子を眺めている（食事をしている）のだから。

それが悪いとは思わないけど、問題は起こして欲しくないなあ……

空の下を二人で過ごす

切っ掛けは夕食の後だった。恋人になったのはいいが、恋人らしいイベントを今までやっていかなかったじゃないか。そう思い立ったのなら、後は口にするだけだ。

「先輩、今度一緒に出掛けない？」

こちらを見て満面の笑みを浮かべた先輩だったけど……気になることがあるらしく、どうしてか目線が下がってしまう。はて、何か問題が。

「お誘いは大変嬉しいのですが……昼間に外へ出ちゃったら、体が痒くなっちゃうんじゃない……」

ああ、そのことか。困ったことにあの日を境に、俺は純粹な人間ではなくなってしまった。まあ、これでシエルと一緒にいられるのなら、文句はない。それだけのことがあつただから。

「その件については大丈夫ですよ。フードを被れば、少しは楽になるので」

あまりに強い日差しは厳しいけど、その時は室内に避難すればいい。

「それなら良かった。それじゃあ……何時頃、お出かけしますか？」

華のような笑顔と紅の差した頬。ああ、この笑顔をずっと見ていたい、と

「先輩に用事がなければ今週の土曜日とか……どうですか？」

「はい、私も空いていますので、よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げられてしまうが、俺もあまり経験がない。上手くリード出来るだろうか。

「そ、それじゃあ明日も学校ですし、寝ますか」

「そうですね」

同じベッドに入り、横になる。……元々が一人用のベッドだからか、二人で寝るには少し手狭だ。おかげ様で先輩の肢体に触れられるのだから、寧ろいい。

「……………」

「……………」

シエルの体温を腕から感じ取っていると……ふと、目が合った。

「ちよ、遠野く……………」

その照れた顔があまりにも愛おしくて、口付けを一つ落とす。いつもなら抱き合っていた所だけど、最近は頻度が多過ぎると言われている。怒りはしないだろうけど、せつかく出かける約束をしたのだ。今日くらいは抑えないと。代わりに、シエルの香りを胸いっぱい吸い込んで我慢する。

「……………お休み、シエル」

取り乱した先輩だったけど、俺が眼鏡を外したことでそのつもりがないことに気付いたようだ。

「……はい、お休みなさい、遠野君」

遠野家にいた頃は眠りが浅かったような気もするけど、今は先輩がいる。……俺にはそれで、十分だ。

来たる土曜日がついに来た。ついに、先輩とのデートである。以前は有彦と一緒にだったけど、今日は違う。二人きりの初デートだ。内心で息が荒くなるのも仕方ない、というものだ。

「その服、何処で買ったんですか。俺、始めて見ましたよ」

けど、それは先輩もだったらしい。朝起きたら、既に朝食（いつものカレー）が用意されていた上、普段は見掛けない服を着ていた。

「内緒です」

……薄いピンクの唇がとても艶やかに見える。思わず食らいつきたくなくなるが、ここは我慢だ。今日は折角のデートなんだから。

「さ、遠野君も早く着替えて下さい。今日は色々回るんでしょ？」

見るからに先輩は楽しそうにしている。こちらも誘った甲斐があった、というものだ。

「はい、先輩と夜に見回りすることはあっても、昼に遊びに行くことは無かったですからね」

「言われてみれば……そうですね」

時間は朝の九時三十分、この時間帯の日差しであればフードが無くても問題ないだろう。……と思ったが、今日の天気は曇り。これなら、フードすら要らないな。

「やっぱり……日差しはダメなんですね」

どうしてこちらを心配そうに見ているのか……って、そういうことか。どうやら、フードをする癖が染みついていたらしい。

「あ……癖になっていたみたいです。今日のところはまだ大丈夫なんで、フードは外しておきますね」

「……でも、大丈夫ですか。無理しなくていいんですよ？」

「折角のデートですよ。俺が先輩の顔を長く見たいだけです。だから、気にしないで下さい」

思うままに言っただけなんだけど……先輩の顔があつという間に紅くなっていく。

「……それは反則です、遠野君。そんなこと言われたら……何も言えないじゃないです

か。分かりました。ダメだと思ったら、直ぐにフードを被ってくださいね。えっと、まずは何処に行きましようか？」

「南口の公園に行きませんか。あそこなら色々な人がいますし、出店が出ている時もあるので」

「ほうほう、そうなんですか。私もよく出歩いていましたが……あまり出店を見たことは無いです。何かあるといいですね」

道すがら、先輩がしりとりを仕掛けてこようとしたりもしたが、特に何も起きることもなく公園に到着した。南口の公園……思えばここでは色々な思い出があった。雨が降っていたあの日に俺を拾ってくれた先輩。きつと先輩がいなかったら、冷たくなつたまま体が動かなくなっていただろう。だからこそ、あの日のことは忘れられない。他にも、アルクエイドと一緒に夜の見回りに行く時の集合場所でもあった。あれもあれで、忘れられな……

「遠野くん、何を考えていたんですか？」

「へ!?!」

俺の思考が読めるのか、この人は。につこりと笑みを見せているが、その笑みが不穏だ。もし、今が夜で他に誰もいなかったら、人除けの魔術と共に対吸血鬼折檻の秘蹟が使われても可笑しくない。

「い、いやあ。この場所で色々あったなあ、って思つて。どうしても、雨が降つていたあの日を思い出すんです」

嘘ではない。嘘ではないんだ、先輩。

「まあ……そうですね。あの時は驚きました。傘も差さずに、石のようになっていたんですから」

コツン、とお互いの手の甲が当たる。その手を繋ぎたいと思う欲求のまま、俺はそつと指を絡める。

「あの時、先輩が見つけてくれなかったら……償いの意味も分からないまま、自分を殺していたと思います。だから、先輩には感謝しています。あの日、俺を見つけてくれたから……今があるんです」

そうだ……きつと、あの日から。俺は惹かれていたんだと思う。自分ですら自分を信じられないのに、信じると言つてくれた先輩に。

「あの時の遠野君、今にも死んでしまひそうな顔をしていましたから。だから……どうしても放つておけなかつたんですよ」

あの時と同じ柔らかく、見守るような表情だ。

「ありがとう、シエル。俺の隣にいてくれて」

「そ、こそ、それは、私の台詞です。私の方こそ、し……遠野君にはいつも助けられてい

るんですから」

「……………」

「……………」

気恥ずかしさから、手を繋いだまま、お互いに黙ってしまふ。どう声を掛けようか迷ったものの、ふと視線を遠くに外すとこれ幸いに出店が見えた。

「せ、先輩。あそこに出店がありますよ。見に行つてみませんか？」

若干緊張して声の上擦つたけど、先輩も同様のようだった。多分、見た目の可愛らしさからカレー関係の出店では無さそうだ。まあ、見るだけでもいい気晴らしになるだろう。

「そ、そ、そうですね。行つてみましょう」

「少し見てみましょうか。幸い、あまり並んでいないみたいですし」

朝のそれなりに早い時間だったこともあり、公園はご老人が半数を占めている。財布も多少は暖かい今なら、少しは売り上げに貢献してもいいだろう。

「先輩は何を食べますか」

出店はアイスクリーム屋のようだけど……興味があるのか、チラチラと視線が動いている。てつきり、カレーにしか興味がないと思つていたけど、これは新しい発見だ。

「へえ……出店でも、色々種類があるんですね」

暇そうにしていたアイスクリーム屋にはまだ人だかりが出来ておらず、直ぐに注文することが出来そうだ。

「物珍しい味で客寄せしている、とも言えますけどね」

チョコ、バニラ、ストロベリー……といった定番の味から、抹茶、チョコミント、グレープ……それから。

「……変わり種つてあるところにはあるんですね」

「ええ、世界を色々回っている私ですが、これは初めて見ました」

まさか、スパイスアイスなるものがあるとは……先輩も初めて見たらしく、視線が釘付けになっている。俺も気にはなるが、そこまで挑戦する気にはなれない。

「いらつしやいませ。ご注文はお決まりですか？」

店員がにつこりと挨拶をすれば……後はもう、何を食べるか選ぶだけだった。

「ありがとうございます」

結局、先輩はスパイスアイスを二段重ねに、俺はバニラアイスをベンチで食べることにした。

「先輩、それは美味しいんですか？」

「これは純粹な興味だ、どんな味がするんだろう。」

「そうですね……普段食べているモノとは違いますが、偶にはこういうのもいいですね

……遠野君も食べてみますか？」

「じゃあ……少しだけ」

匙が無いので、直接口にするしかない。そつと、一口分貰ったけど……ピリツとした刺激が、舌に残るはずの甘い感触を程よく流してくれる。

「ど、どうでしょうか？」

少しぎこちなく、味の感想を求める先輩。

「美味しいです。意外と合うんですね」

「ええ、私も食べてみて驚きました。スパイスをふんだんに使ったカレーとはまた違う……甘みを引き締める為のアクセント。個人的にはもつとスパイスが効いたものの方が好みですが……デザートして食べるならこれ位の量がいいのかもしれないですね。それに、新しい発見です。何しろ、デザートにもスパイスは通用する……ということなのですから」

ぶつぶつとアイスにおけるスパイスの有用性を呟き始める先輩。まあ、口に合ったようでは何よりです。

アイスクリームを食べ終えた後、公園の風景を眺めながら雑談をしている内に時間が過ぎていく。ふと公園の時計を見れば、11時を回る頃だった。さて、この分ならそろ

そろ開いている頃だろう。

「遠野君、次は何処に行くんですか？」

「繁華街の方に行こうと思つています。前に有彦が言つていたんですけど、近所で評判の揚げ物屋があるらしいんです。で、その中にカレーコロツケとかも」

「行きましょう、是非、行きましょう」

「この張り切り具合、どうやら知らなかつたらしい。

「それにしても、遠野君がそんなお店を知つていゝなんて、意外でした」

まあ、そうだよな。先輩みたいに拘りがある方でもないし、不思議に思うのも想像で
きる。何しろ、この情報は有彦に教えてもらつたものだ。店自体は俺も知つていたけど
……何処からこんな情報を仕入れてくるのやら。

「ああ。有彦に連れ回されたりしたこともあつたんで、その時に」

「なるほど、有彦君経由でしたか。そう言えば、中学からの付き合いだとお聞きしました
が、その辺りを伺つても」

「いいですよ。とは言つても、とりとめの無い話ばかりになりますよ」

折角だし、色々な店を物色するのも悪くない。

「さて、この辺りだったな」

「……この辺りは時々来ていましたけど、そんな店があつたんですね。ムムム」

「まあ、コロツケとかの惣菜がメインですから、大々的にカレーを売っている訳ではないですからね」

お、ここだ。

「おや、いらつしやい」

御婆さんが声を掛けてくる。さて、俺はどうしようか。

「ほおほお……カレーコロツケ以外にも、色々売っているんですね」

「おや、うちのカレーコロツケが気になるかい？」

「はい、人伝に美味しいとお聞きしたので」

うん、いい笑顔だ。連れてきた甲斐がある、というものだ。

「こんな若い子に言われるのは嬉しいね。ほら、1個食べてみるかい？」

「お、お金出しますよ！」

「いいの、いいの。気に入ってくれたら、次からは買って行ってくれると嬉しいけどね」
先輩の人徳、ここに極まれり。と言った所か。慌てこそしたが、渡されてしまつては無下に出来ない先輩はそのままカレーコロツケを一口。

「美味しいです！」

「おお、そうかい。嬉しいねえ」

「遠野君もどうですか？」

「そうですね。御婆さん、カレーコロツケを一つ下さい」
「はい、ありがとうございます」

流石に俺は無料とはいかなかったけど、まあ先輩の好物（方向性は変わっていないけど）が増えたのはいいことだと思う。結局、カレーコロツケをもう一つ頼んだ先輩が、俺と一緒に食べ終える。

「ありがとうございます。また来てくれるのを待っているよ」

「ありがとうございます、また来ますね」

「ごちそうさまでした」

そうして、繁華街を一旦外れて大通りに出た所で、時間が12時を回っていた。食べたといいってもアイスとカレーコロツケくらいだから、先輩はまだ食べられるだろう。まあ、何処で食べるかなんて決まっているようなものなんだけど。

「そろそろお昼にしましょうか」

「で、でも先程カレーコロツケを食べたばかりですよ」

お腹を減らした素振りは見せないけど……

「メシアン」

「行きます……って、遠野君！」

「先輩ならカレーはイケると思ひまして」

結局、以前に先輩と行ったカレーショップ・メシアンへ行く。予定通りである。俺は、あの時食べたバターチキンカレーのセットを頼んだ一方、先輩は10倍スパイスセットを頼んでいた。一口だけ食べてみたが……アルクエイドと先輩が戦っている時を思わせる、非常に刺激的な味だった……という感想を残しておこう。

さて、この後はどうしようか。デパートで先輩の服でも見ようかと思ったけど、ヴローヴのことを思い出してしまうのでは……とふと思ってしまった。さっき、繁華街を歩きながらちらりと北口公園の方向を二人で見たが、復旧には暫く時間が掛かりそうだったからだ。折角のデートなのに、吸血鬼が根城にしていた場所に行くのもな……どうしたものかと視線を泳がせていると……

「あ」

駅前の映画館が目映った。そう言えば、電車で先輩と映画の所感を話した記憶はあるが、一緒に観に行ったことは無かったな。うん、これもいい機会だ。

「先輩、映画館に行きませんか？」

「いいですよ。それで、何を観ましょうか」

「あー……えーっと。すみません、上映している映画を把握してなくて。一緒にどん

なものがあるか観てみましょうか」

「はー」

恋愛、SF、ミステリー、アクション、ホラー……うーん、ジャンルが分かれているのはいいけれど、最後の二つは避けた方がいいだろう。何せ、先輩にアクションは身近過ぎるし、ホラーな光景は映画以上に見てきているはずだ。どうせなら、先輩が楽しめるものに行こう。

「俺はどれでも大丈夫ですけど、先輩はどれがいいですか？」

なので、アクションとホラーの欄をそれとなく外して先輩に聞いてみる。

「私、遠野君が観たい映画と一緒に観たいです」

とても嬉しいことを言ってくれる……思わず、勢いのままキスしてしまうところだった、危ない危ない。そうなると、だ。恋愛、SF、ミステリー……この恋愛ものは中くらいだな。うーん。ミステリーもホラーの要素が混じっていいそうだし、ここは……

「SFにしましょう」

「いいですよ。それじゃあチケットを買いましょうか」

二人でチケットを買う。映画開始まであと20分といった所か。これなら、映画の前に軽食を買っても問題ない。

「折角だし、ポップコーン買いますか？」

定番だが、何も無いよりはいいだろう。

「はい。私、気になっていたものがあるんです。遠野君は少し待っていてくれませんか？」

映画館の軽食で気になるもの……か。何だろう。

「分かりました。じゃあ、座って待っていますね」

はて、先輩の目が真剣だったが……何故だろう？

待つこと数分、先輩の目的はポップコーンのようだけど……ああ、そういうことか。

「はい、こちらカレー味のポップコーンです！」

「さすがは先輩ですね」

映画館に来てまでカレーに拘るとは流石、先輩。ところで、映画館は臭わないのだろうか。

「最近の映画館は換気にも注意していますから。こうして食べられるのはいいことです」

ふふん、と眼鏡をクイツと上げつつ、ポップコーンを食べる先輩。

「それは良かった。ところで、飲み物はどうしますか。紅茶も売っていますけど」

「はい、それじゃあ買いましたようか」

映画の座席に座り、開始まで映画のパンフレットを二人で読む。そうしてこれから始

まる映画について話している内に、開始のブザーが鳴った。

「おっと、そろそろ始まりますね」

「ええ」

自分たちの他には、奥の座席に数人がいる程度。これなら静かに観ることが出来るだろう。

上映が終わり、他の観客が去った後、俺達は映画の感想を話していた。ストーリーはそれなりだったので話がそれなりに続いたのだが、次第に話がストーリーから舞台設定へ移っていき……ふとした思い付きで。

「先輩的には、あの映画で使っていた武器についてどう思いますか？」

——と、主人公たちが使っていた武器の話をしてしまったことが俺の敗因だ。

「私から言えば……発想は悪くないですが、もう少し使い方があっていいか、と思いましたがね。彼らの世界では使える人が少ないのですから、持っているだけで有利であることは変わりないですが……だからこそ、彼らはその武器の使い方を熟知する必要があります」

先輩が見た限りでの武器の使い方が始まってしまった。歴戦の代行者、ということももありその話が始めれば……長い。何とか相槌を打って話を続けようとしているも

の、意識が宙に行きかけてしまう。

「——だからこそ、その欠点を補う為にはもう少し改良されるべきだと思いました。SFなのでからこう……もう少し飛躍した武器をですね。それと工夫が足りないと言わなきゃでしょう……黒鍵のように手軽に持ち歩き出来る武器なのでから、それを活かした戦法も必要です。例えば、遠野君のように素早く近付いてから、武器を展開して強襲する。腕に仕込んで置いて相手が油断した隙を突く……なんていう使い方も出来ると思うのですが……まあ、そこは映画ですから置いておきましょう」

……危なかった。もう少し続いていれば、意識が宙を漂っていただろう。「そ、そうですね。まあ、演じている人は普通の人ですから」

「おおっと。それもそうですね」

熱を入れて語ったからか、先輩はズレかけた眼鏡を元の位置に戻す。

ふと空を見れば、もう時期夕方になる頃だった。

「そろそろ帰りましょうか?」

「そうですね……今日は楽しかったです、遠野君」

先輩はそう言つて、こちらまで幸せになれるような笑顔を見せてくれる。

「大したことは出来ていないですけど、シエルが楽しんでくれたなら、俺も嬉しいです」
「何を言っているんですか、遠野君。私は、遠野君が側にいてくれる……それだけで幸せ

なんですよ」

……天然なのか、狙っているのかは分かりませんが、笑顔でその台詞は反則だと思います。

「俺もシエルが隣にいただけで、十二分に幸せ者ですよ」

不意を打って名前で呼んでみたが、どうだろうか。

「そ、そうですね」

うん、いい反応だ。段々と頬を染めている様子はいつ見ても可愛いとしか言いようがない。

「し、し……遠野君」

まあ、今回も名前で呼んでくれなかったのはちよつと残念だが、もうじき呼んでくれるような……そんな進展が少し垣間見えたので良しとしよう。その代わりに触れるような口づけを一つ。

「それじゃあ、今度こそ帰りましょうか。先輩」

「……そうですね、遠野君」

夕焼け空の下、手を繋いで帰り道を歩く。先輩の手から伝わる体温は、俺には勿体ない程に温かった。

お題19：マイルームの惨劇未遂

数多の戦力を保有することは重要だ。故に、軍事調達は欠かさない……と言う名目で、マスターは今日も虹色の石を溶かしていた。

「マスター、もうそれ以上は……!」

マシユの静止が耳に届く。だけど、これは退けない戦いなんだ。

そうして、なけなしの石を召喚陣に送り込む。

「どうだ」

直後、奇跡が起きた。召喚陣から虹色の光が灯されたのだ。これが真正正銘のラスト

チャンス!

「……来い、来い、来い!」

そうして召喚陣から現れたのは……

「私を召喚したのですね……パーサーカー、モルガン。妖精國ブリテンの女王にして、汎人類史を呪い続けるもの。それで問題がないのなら、サーヴァントとして力を貸しましょう」

妖精国の女王：モルガンだった。

モルガンを召喚して一週間モルガンはバーサーカーだけどNP獲得のスキルも使えて、クリティカルや全体宝具といった攻撃面でも期待できるサーヴァントだ。指揮する側としても使い易いため、召喚に成功してからは様々なシミュレータ室で出来るクエストに連れて行き、その能力の高さを再認識していた。そうしてモルガンのことなんかも色々聞いていたんだけど……事件が起きた。

「以前から不思議に思っていたのですが……何故、私以外のバーサーカークラスが要るのです?」

「え」

「全員解雇しなさい、必要ありません」

マイルームで二人しかない状態だったら、まだ何とかなつたんだ。だけど、さ。

「ま・さ・か・聞き入れるつもりなんて、ないですよねえ……ますたあ?」

「つうわあああああつ!!」

……本気で、本気で驚いた。気配遮断スキル持っていたつけ、清姫!??

「誰かと思えば、龍になれると思いがつた小娘ですか」

え、何か違うバトルが始まりそうなんですけど。

「ちよ、ちよつとモルガンも煽らない!」

「マスターが言うのであれば」

こっちの言う事は聞くけど、他の人やサーヴァントの言うことはほとんど聞かないから……例外があるなら、食材を取り扱う際のキッチンに多いサーヴァントやマシユくらい、か。

「ま・す・た・あ……ところで、さっきの世迷言はどういう事でしょうか？」

眼が怖いです、清姫さん。

「ただ、事実を言ったままでですが……何か？」

そしてモルガンは喧嘩を買わないで。

「貴女には聞いていません、シャーツ！」

清姫が蛇のような威嚇をしている……でも、爬虫類より昆虫の方が効くと思うよ。

「貴女も知ってるの通り、此度の現界によるバーサーカークラスとは、基本的に攻撃が有利なクラスです……反面、どのクラスよりも撃たれ弱いという欠点があります。それを踏まえた場合、バーサーカークラスは強力なサーヴァントである私がいれば事足りるので、という結論に至ったまでです」

これはモルガンなりの分析なんだろうけど、戦闘面だけで言えば間違っていないから困る。

「それは他のクラスのサーヴァントにも言えるでしょう。それに、色んな状況に対応出

来るサーヴァントがいた方がいいとますたあも仰っていましたわ」

「……そうなのですか、マスター」

「うん、そこは清姫の言う通り。微小特異点とか色んな有事を考えると、ね」

「だけど、その時の状況で必要な戦力や適合出来るサーヴァントは変わってくる。だから、より多くのサーヴァントがいた方がいい。魔力が持てて、カルデアを荒らさなければ。」

「それに、長い付き合いのあるサーヴァントがいると助かることもあるんだけど……やっぱり、モルガンにも狂化スキルの影響があつてその辺りの意思疎通が難しいのかな？」

「ですが、それは戦闘だけのこと。普段の生活や食事情などではまた違う話でしょう」
お、清姫が言い返している。え、仲裁に入らないのかつて。導火線に火が付いた爆弾に突っ込んででも砕け散るだけだよ。せめて、爆発が終わった後にしないと。

「普段から食堂にいるサーヴァントはエミヤというアーチャー、ブーディカと呼ばれるライダー、よく分からないですが料理が出来るタマモキヤットと認識しています。タマモキヤットはバーサーカーですが……料理の腕は認めましょう。戦闘にさえ出さなければ良しとします」

「どうしてキヤットさんだけ別なんです!？」

そりゃあ聞くよね。同じバーサーカーなのにキヤットだけ除外されたんだから。

「意思の疎通こそ不要だが、奴は自分の領分を理解しているからだ」

……もしかして人間じゃないから、バーヴァンシーにとつて付き合い易いサーヴァントに成り得るかもしれない、とか。うん、有り得そうだ。

「確かにキヤットさんは料理上手ですのでその点は言うまでもありませんが……そもそも、安珍様のことを勝手に夫（妻）と呼ばないでくれませんか？」

あ。

「そちらこそ何を言っている。私を召喚したのです、マスターが夫（妻）であることは明白でしょう」

そして、お互いに間違っていないことを間違った形で言っているので、会話になっていない……

「私だって、ちゃんと段階を踏んですね……」

「そもそも、安珍とやらをマスターと混合すること自体が無理のある話だ」

……そろそろ止めないと、ヤバイ。

「ちよ、ちよつと二人共その辺で……」

「何でしょう、マスター。今は大事な話をしているのですが」

「そうですよ、ますたあ。強い絆で結ばれたこの私を解雇させようと宣うこの女郎を放

置いてよい、と?」

……清姫の怨念がましい眼と冷めきったモルガンの眼が怖い。どちらかと言うと清姫の視線が怖い。だけど、ここで逃げてはいけない。

「俺は色んなサーヴァントの力を借りてここにいます。だから、必要に駆られない限り、他のサーヴァント同様に解雇は考えていません」

「……なるほど、マスターがそう言うのであれば」

モルガンはこちらの意見をきちんと聞くのは有難い。サーヴァントによつてはそれで済まない場合もあるからなあ。

「それに、どうしても人手が必要な時もあるので、そう言った時にも他のサーヴァント達が居るお陰で助かっていることも多いんです」

実際、沢山のサーヴァントがいなかったら解決出来なかった微小特異点も数多くあった。

「確かに、それであれば必要ですね。具体的にはどのようなことがあったのですか?」
「少し前は日本の都市に出来た微小特異点で買ひ物を……その少し前はサーヴァントユニヴァースのペンテシレイアと協力して配達の手伝いなんかを……」

ああ、流石のモルガンも訳の分からない顔をしているな。うん、普通はそうだよな。

「マスター……まず、微小特異点は兎も角、サーヴァントユニヴァースとは何でしょうか

？」

「ああ、うん……それはね……」

さて、何処から説明しようか……それにしても、さつきから清姫が静かなのが不気味だ。

「……これもわたくしと、ますたあの愛ゆえ、ですな。あとはそうですな……指輪……結納……ウエディングドレス……ふふ……うふふつ、うふふふ、ふふつ」

これじゃあ、サーヴァントユニヴァースの説明どころじゃないよ。まあ、説明できるものでもないけどさ！

「その小娘は何を言っている。只でさえトトロットに避けられているにも関わらず、婚姻衣装などとよく言えたものだ」

トトロットってハベトロットのことだよな。花嫁の手助けをする妖精から避けられているってことだから……あ、終わった……これ。

「……」

ウイーン、ってマイルームの扉が開いた気がするけど……こんな状況だもの、皆が逃げるよね。……ところで、マイルームって何だっけ？

「……その方、いま何と申し上げましたか？」

……マイルームじゃなくて、火薬庫の間違いだよな？

「トトロットが避けるような奴に花嫁衣装が似合うものか、と言ったのだ。トトロットが推していたマシユなら別だろうが」

そう言えばそんな話があったし、ハベトロットからもそんな被害報告あったね……それはそうとして、火にガソリンを注いだんだけど……分かっています？

「……燃やします」

「戦闘は、シミュレータ室でやって下さい!!」

モルガンもその釜は何ですか!?

「ますたあ……ますたあは私のウエディングドレスが見たくは無いのですか!？」

清姫が暴走状態に入った。マシユ、助けてー!!

「お二方、そこまでです!!」

「え、マシユ!？」

いつもの盾が俺の眼の前に現れる。

「はい、先輩の正式サーヴァントのマシユ・キリエライトです!!」

あれ、顔が赤い。もしかして、さつきモルガンが言っていたことが耳に入っていた

……?

「どうする、マスター。私としては我が友人のストーカーをここで退治してもいいのだが」

だから、いつも以上にやる気なんです。勘弁してください。

「お二方、戦闘ならシミュレータ室でやって下さい。そもそも、ここは先輩のマイルームです！」

ふと何でマシユがこつちに來たかを考えていたけど……そうだ、次のミーティングがあるんだった。

「そう言う訳で、ここで戦闘は止めてください。それから、そろそろミーティングがあるので一旦ここで去りますけど、ここで戦闘だけは止めてくださいお願いします」

最悪、ゴールドルフ新所長の所へ逃げ込むか……！

「それもそうか。では龍の成りそこない、シミュレータ室に來るがいい」

「望むところです。私のお嫁さん力53万の力を見せてあげましょう」

うん、清姫は清姫で何を何処で覚えたのかな。……とりあえず、シミュレータ室に行くみたいだからマイルームは無事が確保された、よね？

「た、助かった……マシユ」

「先輩、大丈夫でしたか」

普段の戦闘以上に、冷や汗がどつと流れた気がする。

「久し振りに生きた心地がしなかった」

思わず、尻餅もついた。

「どうですか。ダ・ヴィンチちゃんに伝えて、休みにしてもいいですよ」

「いや、出るよ。こうしてマシユも迎えに来てくれたし……何より今はマイルームにいるのが怖い」

「……愁傷さまです」

ミーティングが終わった後、マシユと一緒に食堂へ行こうとしてシミュレータ室を通りがかった時、あるシミュレータ室に二人のサーヴァントがいたことに気が付き……知らない振りをすることにした。

二日後、確認することがあったのでとあるサーヴァントを呼び出すことにした。そのサーヴァントは快く応じてくれたのだが……マイルームへ着いた途端、どつと疲れた顔をこちらに見せた。

「ど、どうしたのハベトロット？」

明らかにやつれている。いや、サーヴァントだから食事等でやつれることはないはずだんだけど……

「……マスターがマイルームへ入ることを禁止したサーヴァントがいるじゃんか」

ああ、マイルームで暴れようとした清姫とモルガンについて、ゴドルフ新所長から1週間とはいえ立ち入り禁止にされたんだね。生まれたての小鹿のように足を震

わせていたから説得力があまり無かったぞ、と後でモルガンに言われていたけど。

「そうしたらさ……清姫のストーリーキングが激しくなった、というか」

「……ごめんね」

気が付けば謝っていた。うん、あれは怖いからね。

「いいんだ、マスター。まあ、正直言うと、ちよつと疲れていてね……まあ、ここなら逆に心配ないんだけど」

「それはそれでどうかと思うけど……」

四六時中、何かを求めるように視線を向けられ続けるのは辛いよね、うん。

「まあ、それはいいや。で、確認したいことって何かな？」

「うん、今まさに言っていたことなんだよね。モルガンと清姫と関わりがあるサーヴァントって少ないから」

強いて言えばメリュジーヌも該当しそうだけど、清姫のことは眼中に入れてなさそう、というかそんな雰囲気を感じるの。

「あー……なるほど。まあ、清姫はマスターの部屋に近付けない以外に変化はないよ。それからモルガンも変化はないかな。アフタヌーン決めてる時に偶にうつとおしそうな視線を何処かに向けていた気がするけど……その位かな」

「なるほど、ありがとう。どうしているか、ちよつと気になったからさ」

だからと言って……マイルームで暴動を起こすのは、勘弁して欲しいんだけど。

「そうだ、マスター。折角だから僕のケアをしてよ。ほめる、なでる、いたわる、ハグる。なんでもいいよ〜」

うん、ちよつと苦勞させているみたいだし、普段の3割増しでケアをしますか。「お、やつとその気になったか。ハベにやんのケア……しつかり頼むよ、マスター」

今までは被害を受けるだけだったが、こうして蚊帳の外だったはずのハベトロットまで被害を受けたことが申し訳なくなり、存分にモフモフする。

「うーん、気持ちいいな〜。それにしても、こう……随分と手馴れているね。猫とか飼っていたの?」

「猫らしき生き物と言えばタマモキヤットがいるし、ここには馬とかもいるから、慣れたんだと思う」

「そっか〜。確かに、色々いるから慣れるのか。他の動物だけじゃなくて、マシユや他の女性サーヴァントに同じように対応しているかと思っただけ」

「していないよ、それは!?!」

確かに、やたら近付いてくる女性サーヴァントが多いのは事実だ。だが、俺は断じてアーチャーのエミヤではない。

「冗談だって、君がその辺はしつかりしているって分かっているから」

「全くさあ……」

「でも、君もそろそろそういうことを頭に入れてもいい年齢なんだろう。マシユなんてどうだい。僕的にはおススメしたいんだけどなあ……」

どう答えようか口籠った時、部屋の外からガタつという音が耳に届く。誰かが聞いていたんだろうか……あれ、ハベにやんが死んだ魚のような眼に……一体どうして？

「だ、大丈夫。ハベトロット？」

「いや、うん。大丈夫さ。僕は何時だつて毛並みがつやつやなハベにやんさ!!」

明らかに強がっているハベにやんを見て、気付いてしまった。だから、外には聞こえないように耳元でハベトロットに。

「もしかして……清姫が外にいる？」

そう聞くと案の定、ぶんぶんと勢い良く頷いた。

「マスターこそ大丈夫なのかい。四六時中付き纏われるのはキツツいんじゃないか？」

その痛すぎる指摘は置いておこう。まずはハベトロットをどうにかしなければ……

「モルガン……は呼べないし、マシユを呼んで話でもしようか」

そうすると、ハベトロットがぱあつと顔を明るくする。

「いいのかい。何だかんだ君たちは忙しそうにしていたからこちらとしても機会を作る

うとは思っていた所だけど」

「そうだったんだ。そうだ、折角だから、エミヤかブーデイカさんからお菓子も貰ってくるよ」

「おお、いいのかい。それじゃあチョコレートというのを食べたいな！」

「うん、分かった。それじゃあ、少し待っていてね」

モルガンに倣ってではないけれど、アフタヌーンをマシユと一緒に決めてみようか。

お題20：聖剣のお手伝い

「こんにちは。キャスターアルトリアと申します。実のところ、サーヴァントというの
はよくわからないですが、魔術なんかでお役に立てると言うなら遠慮なくお使いくださ
い。え？魔術は「なんか」じゃない？……うわあ、こっちの世界じゃそうなんですか？」
そうして召喚された私はマスターの案内を終えた後、他の人に話を聞きながらカルデア
アがどうい存在かを少しずつ知っていった。

魔術師と呼ばれる人たちがいること。彼らにとって私たちの存在は兵器であるらし
いこと。マスターという人たちはそれを使い、世界を救う存在であるということ。

……同時に、マスターという存在が如何に重要かを知り、心底心が痛んだ。だって、私
はただ喚ばれただけの存在だったから。

——あんなにポロポロなのに、どうしてまだあなたは戦うのか。

メディアというサーヴァントからカルデアの話を聞いている傍ら、そんな思いに駆ら
れる。まあその思案も……

——セイバーと同じく金髪で、小柄でえ、キリツとはしていないけど、素朴な村娘の
精一杯の晴れ姿。フフフフ。その姿もとても似合っているけれど、もっと可愛らしい

服なんかも着せてみたいわ……

私の脳裏にちよつとした危機を知らせる鐘が鳴る。うん、これは不味い。

「あ、ちよつと。まだ話は終わってないわよ」

早々に逃げ出すことにした。

「お話、ありがとうございます。色々と分かりましたので、一旦失礼します！」

「待—ち—な—さ—い—……」

何とか逃げ切れたけど……あの人、とんでもない魔術士だ。今は上手く巻いたけど……魔術を使われたらどうやって逃げようか。

私のレベル面での強化が終わり、ようやく私は自分と言う存在を把握した。ブリテンの守護を定めとする者。あの少女ではたどり着かなかった、そう在れと願われた姿。そんな私でも僅かですが、能力が上がる……不思議なこともあるようだ。

「よしっ—」

そうして、ようやくスキル強化も終わった。これで成長が打ち止めになるかと思えば残念だが、なればこそ。十全に力が振るえるということなのだろう。

「ありがとうございます。ようやくこれでスキル強化が終わりましたね、お疲れさまでした。早速、クエストに行きますか？」

「うん、色々と確認したいこともあるから、同行よろしくね」

マスターの努力はこうして実り、私はマスターと共に周回を共にする毎日となった。何もすることが無いよりはいいけれど……毎回毎回スキルを放つだけの作業というのはどうなのだろうか……と思っていたが、流石は歴戦のマスターだった。他のサーヴァントが宝具を放つだけで直ぐに終わるのだから、多くの敵を相手にする場合は間違っていないのだろう。

今日も同様に、クエストを回るのだろう……そんなことを考えていた私だったが珍しくマスターが見当たらない。

「さて、この時間であればクエストに出掛ける時間で会ったような……」

そんな折、マスターが鬼気迫った形相でマッシュと一緒に召喚ルームへ入る所を見掛けた。

「珍しいこともあるのですね、一体」

あのマスターが時折見せる、余りにも切実な顔をしていた。絶対に引いて見せる、と強い意志を持っていた。聞いた所によると、私の時もそうであったらしい。定期的に起こる発作のようなものと諦めた顔をする者もいたので……それがどのようなことが気になった私は召喚ルームに足を踏み入れる。

「マスター、こちらにいますし……」

「いよっしやあー！」

……何か、いいことがあったらしい。その証左として、足元から虹色の光が零れている。さて、何が来るのだろうか。……そうして、光が止んだ時、私の中の誰かが叫んでいるような、気がした。

「セイバー、千子村正。召喚に応じ参上した。なんで儂がセイバーなのか疑問だったが、今なら多少は納得がいく。こうして喚ばれた儂（オレ）とは無関係ではあるが、ま、同じ顔で好き放題暴れたんだ。気の済むまでこき使ってくんな」

それから暫くして、マスターと共にクエストを回っていた私だったが、何故か暇が出来るようになった。何やら、新しいクエストの回り方を実践してみたい、だとか。色んな状況に合わせる、対応出来る集会の検討を始めた、らしい。最初はとても理解できなかったが。

しかし、それでは時間を持て余す。そのため、村正の手伝いをすることにした。

アルトリア・アヴァロンの私ではクエスト以外の縁は少ない筈だが、アルトリア・キャスターにとっては違うらしい。まあ、鍛冶師なので、私も気になると言えば気になるが……どうせなら、縁の深い彼女の方がいいだろう。といっても、手伝いの内容は只の荷物運びだが。

「よし、こいつの調整は終わりだ。次の調整は、と」

よくよく思い返せば、スキルの育成が終わった後の私は毎回の如くクエストに同行していた。個人的な用事の手伝いをするのは、カルデアで初かもしれない。いや、初めてだった。

「よし嬢ちゃん、こいつを徳川の剣術指南様に持つて行つてくれ。俺は別の仕事が入っているからよ」

「了解……つて、嬢ちゃんじゃなくて、アルトリア・キャスターだぞお！」

この鍛冶師と話す時は、何故か旅を共にした時の姿（第2再臨）になる癖がある。そうした方が気軽に話せるからだと思っている。その一方で、この鍛冶師の一言には反射的に言い返したくなるの……何故だろうか。

「ああっ？選定の杖だろうが、選定の剣だろうが、嬢ちゃんであることには変わらねえだろう」

……………！

「そういうところだぞ、村正アツ！」

そういうところだぞ、村正ア！

——さて、村正からの預かり物を両手で持ちながらカルデアの廊下を歩きつつ、ふと思ひ返す。さて、どうして私が暇になったかと言うと……

「戦術の新しい可能性を模索してみる」

マスターがそう言つて、敢えて不利な相性でクエストを行うという狂気に走つたからなのだ。私やマシユを始めとしたサーヴァント達も苦しい顔を浮かべていたんだけど……心底参つたような顔で。

——本当にきつい場面は、相性有利程度では勝てないんだ。

ああ言われては、私も他のサーヴァント達も言い返せなかつたのだ。

おっと、気が逸れた。今は村正のお使いをしつかりやらないと。

「徳川の剣術指南様……確か、やぎゆうたじま……イタ、やぎゆうさんでいつか」

——舌を噛んだ。ではなくて、マスターが前にりゆうたんと言つていたような気がする。だけど、あまり面識のない人に愛称はちよつとね。

変なことを思い出していたからか、気が付けば村正にこの剣の調整を依頼したお爺さんがいる部屋に到着していたようだ。

「あの、やぎゆうさんはいらつしやいますか?」

「ここにおる。おや、お主は……村正殿の使いか、入るがいい」

「し、失礼しまーす」

——本人にはその気がないのだろうけど、とても威厳があるように聞こえる。

「こちら、村正さんが調整を終えた、と」

「どれ、少し見てみるか」

渡した剣を一度見たやぎゆうさんはスツと音もなく鞘から剣を抜く。その音すら置いていくような動きと、剣自体の美しさに思わず目で追っている自分がいた。

「この刀が珍しいか。だが、古今東西の英霊がさーばんととして集まるこの場では、如何なる武器の在り方も有り得よう。己の腕よりも太い剣を振るうものもおれば、己よりも長い武器を振るう者も然り」

「はい。それは分かっています」

「ならばよい。して、要件はそれだけでは無いのであろう？何用で代理を務めてまで、此処を訪れた」

剣術指南役というのは妖精眼でもあるのだろうか。私の考えを先読みして答えてくる。

「……それじゃあもう少し、その刀を見させてもらってもいいですか」

「うむ。村正殿の仕事もまだ残っているだろう。心ゆくまで見ていくがいい」

私の考えが分かっていったのか、やぎゆうさんは本当に鞘と共に私に刀を渡してきた。

「あ、ありがとうございます」

「うむ。私は暫く禅を組むが故、居ないものとして扱うがいい」

——自分のことなど気にせず、我が剣を見ていなさい。

その心遣いに感謝し、しっかりと見ていくとしよう。役目を果たした私は、どうして

も作るモノが剣になってしまふ性質だ。だが、そんな私だからだろう。彼らの武器は妖しくも美しい、と感じる時がある。見た目は私の杖と同じか細い位なのに、その切れ味と耐久性は驚かされる。何らかの神秘が宿っているのではないか、と思う程に。いや、サーヴァントの時点で神秘が宿っているんだらうけど。

気が付けば、それなりの時間をかけて刀を眺めていたことに気が付いた。時間としては10分くらいだろうか。まだ、村正は仕事をしているだらうけど、役目を終えたことを伝えにいかなければ。刀を鞘へ仕舞い、やぎゆうさんの隣に置いた時……

「ならば、あれを持って行くといい」
「へっ!？」

驚いた。この人、起きていたの!?

驚く私を置いて、やぎゆうさんはあるものを取り出した。

……濃い紫色のそれは何でしょうか。

「何、初めて見るだらうが、我々の国で食べられているすいーつなるものだ。今日の礼に持っていくがいい」

「ありがとうございます。村正に渡しておきますね」

「うむ。暇が出来た時はまた来るがいい」

今度、何か差し入れを誰かに作ってもらった方がいいだろうか。

そうして、羊羹を携えて村正の部屋へ戻る。そうすると、一仕事終えた村正が畳なる床で横になっていた。

「すみません、少し遅くなりましたが戻りました」

「おう、気にすんな……って、それは羊羹か」

村正もやぎゆうさんが渡してくれたこれに気付いたらしい。

「はい、やぎゆうさんから今日の礼だ、と言つて渡してくれました」

「そうか。なら、ありがたく頂かないとな。嬢ちゃんも食つていくか？」

「え、いいんですか？」

カルデアの食事はそもそもが美味しいのだ。見知らぬ料理であろうとも、虫料理以外は喜んで口にしよう。

「ああ、きつと儂が出向いちやあ、その羊羹は貰えなかつただろ。それじゃあ、茶を淹れるから少し待つていてくれ」

マスターの気紛れで出来た休暇だったが、こういう時もいいのかもしれない。

お題21：渡り鳥のように、前へ

新しいサーヴァントであるハベトロットを迎え、諸々の準備（レベル上げ等）を終えた私は、マイルームでマシユを待つ時間潰しとして、ハベトロットと話をしていた。

「マシユは僕の一推しの花嫁だね。ひと目見た時に、ビビツときたのさ！……でもその話をするとき、マシユはちよつと悲しそうな顔をするんだ。なんか僕したのかなあ……」妖精國のハベトロットと大切なやり取りがあつたんだろう。きつと、似たようなやり取りが出てきたことか思い出したんだろう。どんなやり取りかは分からないそれはそれとして、マシユのことを気にいつてくれたのは大いに歓迎すべきところだ。

「ねえねえ、マスター。君が住んでいた街が知りたいんだけど……」

……住んでいた街、か。それにしても、随分と遠いところまで来たなあ。

「……ちよつと記憶が曖昧だけど、大丈夫？」

「……もしかして、聞いちゃいけないかった？」

……ハベトロットはよく見ているね。まさか気付かれるとは思わなかったけど。

「大丈夫大丈夫。ただ、最近の色々あつたから忘れていることも多くてね」

「そっかあ……じゃあさ。もし、カルデアのシミュレーションで再現できるとしたら

……興味あるかな？」

それは……考えたこと無かった。素材獲得の為にシミュレータを使うことは多々あったけど、そんな風にも使えたね。そういえば。でも、どうやって再現するんだろう。

「そうだね。でも、そんなこと出来るんだろうか」
「うーん……言ってみたはいいけど、僕だとやり方が分からないや。変なこと聞いてごめん」

だよ。おや、扉を開ける音が。多分、マシユが戻って来たかな。

「先輩、ハベトロツトさん。紅茶を持ってきました」

お、フオウ君も一緒だ。

「マシユ、ありがとー……それじゃあ、砂糖、砂糖と」

「ミルクもありますよ。どうしますか」

「欲しいなー」

「フオウフオウ！」

あれは多分、僕の分は無いのか、かな？

「フオウさんにもミルクは用意していますよ！」

「フオウ！」

「先輩はどうしますか」

「折角だから貰おうかな」

さて、今は休憩時間だ。何をして過ごそうか。

「先輩、トランプは如何でしょうか」

「何だい、それ。遊び道具なのかい？」

ああ、そう言えば最近は何も触っていませんでしたね。丁度いい、久々にやろうかな。さて、何のゲームをしようか。

「それじゃあまず、ババ抜きをしましょう！」

「フオウ！」

ババ抜き、神経衰弱、七並べ……色々なゲームをやっている内に、そろそろ眠る時間となっていた。

「もうこんな時間ですね。片付けも終わりましたので、また明日会いましょう！」

「お休み、藤丸。しっかりと寝るんだぞ」

「フオウ……」

二人とフオウ君がマイルームを後にする。うん、最後に筋トレしてから寝ようかな。

先輩は誰よりも前向きで、辛いことがあっても他の皆には見せない強い人です。最近

は笑いながら何でもないと、と言って誤魔化すことが多くなったのが最近の心配事です。ジャックちゃんもマスターが笑わなくなった、と言っていましたし……ゆつくり過ぎる時間も先輩に必要だと思うのです。

「なあ、マシユ」

どうすればいいんでしょうか。私に何か出来ることはないでしょうか。今、ハベトロットさんに呼ばれましたか？

「何ですか、ハベトロットさん」

「さん付けしなくていいんだぜ……じゃなくて、マスターの住んでいた街について、何か知っているかい？」

行く機会があれば、是非行ってみたいのですが……今の状況ですし、伺うことも出来ないのが残念です。

「実は私も知らなくて……ごめんなさい」

「フオウ……」

おや、フオウ君も何処となく寂しそうですね。

「いや、マシユが謝る必要はないさ。でも、興味はあるんだろう？」

「はい。先輩がどのように過ごしてきたのか、どんなものが好みなのか、もっと詳しく知る必要がある、と常に思っています」

将来的には、アイコンタクトだけで戦闘、炊飯、掃除、談話が出来る関係になりたいと思う、マシユ・キリエライトです。

「お、おう……：そういうええさ、僕と同じ大きさの色んな発明しているサーヴァントいるじゃんか」

「ダ・ヴィンチちゃんでしょうか」

「そうそう。いやさ、今の話をダ・ヴィンチちゃんにしてみたらどうかなーって思ってた成程、それはとてもいいアイデアです。

「いいですね、善は急げと言いますから、今からダ・ヴィンチちゃんの所に行つてきますね！」

「フオウ！」

「い、今からかい!? まあいつか。マシユ、僕も気になるから一緒に行くよ」

勢いでダ・ヴィンチちゃんの部屋まで来てしまいました、よくよく考えればお休みしていても可笑しくない時間だったことに今更ながら気付ついた。ど、どうしましょう……。

「あ……」

「ちよつと入るぜ、ダ・ヴィンチちゃんはいるか？」

「ハベトロットさん!？」

まさか、迷いなく入られるとは……

「おや、マシユにフォウ君、それとハベトロットじゃないか。どうしたんだい、こんな時間」

今は休憩の時間だったのか、ゴールドルフさんが作ったフィナンシェを摘まみながら、紅茶を飲んでいたようだ。

「ほら、マシユ」

「おや、マシユからのお願いかい？」

「はい、実は……」

そうして私はマスターの住んでいた街について、その風景だけでも見てみたいという勝手な要望をダ・ヴィンチちゃんに話す。

「マシユが何かを頼むこともそうそうないからね、私に任せたまえ。毛色は違うが、似たような依頼をゴールドルフ君からも請けていたからね。それと一緒に開発してしまおう！」

「いいんですか!？」

まさか、私の無理なお願いを聞いてくれるなんて……!

「私は万能の天才、ダ・ヴィンチちゃんさ。出来ない事なんて無いのだよ。私に任せて、

マシユはゆつくり休むといい」

「でも、そうするとダ・ヴィンチちゃんの休む時間が……」

「私は気になったことはやってみたいと気が済まない性質なのさ。それに、ゴルドルフ君から請けた依頼も私の休息に関係ある。まさに一挙兩得というやつさ」

ダ・ヴィンチちゃんの言葉に強がりは見られない。ならば、ここは大人しく休んだ方がいいのでしょうか。

「分かりました、楽しみにしていますね。それから、あまり無茶はしないでくださいね。お休みなさい、ダ・ヴィンチちゃん」

「ああ、ゆつくり休むといい」

——二日後、バイタルチェックの時間になった。

最近異聞帯攻略で後から思えば無茶ばかりしていたこともあり、いつも以上に入念な検査となった。とは言えど、もうお互いに慣れたものだ。ムニエルを始めとしたカルデアスタッフ協力の元、いつも通り検査は終了した。

「よし、今日のチェックはこれで終わりだね」

「うん、お疲れさまだ。それじゃあ着替えて大丈夫だよ」

検査を終えて普段の礼装に着替えようとした時、普段は見掛けないものが小テーブル

に置かれていたことに気が付いた。さつきまでこんなものあったかな。

「ダ・ヴィンチちゃん。これは何？」

……聴覚を診断するあれかな？

「ああ、それかい。私の新しい発明品さ。体を休めながら過去の記憶を抽出する代物さ。まだ試作品だけど、中々の出来さ」

「凄いね。そんなものまで作れるんだ」

つまり、思い出さなければ良かったハロウィンも、これがあれば思い出せた、と。

「万能の天才だからね、私は。と言っても、精度が低い部分もあるからそこが今後の課題かな。私もさつき使ってみたんだが、いい感じに疲れも取れるんだ。良かったら、試してみるかい？」

そういえば、最近では会議中もうとうとしている時がありますよ、とマシユから言われたんだっけ？

「そうですね。折角ですから」

「分かった。それじゃあ、これを耳に付けて貰えるかな。よし、時間は1時間に設定して、だ」

「……あ、れ？」

ダ・ヴィンチちゃんが時間を設定した瞬間、何か、急に、眠気が……

「元々はゴールドルフ君が一向に休む様子を見せない私に対して、直ぐに眠れるようなものを作っても休むようにしろ。そうでもしなければ、新しい開発も思うように進まないぞ、と言ったのが発端でねえ」

……それ、じゃあ。

「安心して、藤丸君。休む時間は1時間に設定した。それに、だ。マシユから最近君が休めていないのではないか、という不安……もとい相談を受けたんだ。マシユには心配を掛けたくないだろう。だから、休んでいくといい」

——それが、意識が途切れる前の最後に聞いた声だった。

——所定時間ヲ経過シマシタ。スリープモードヲ解除シマス。

「やあ、突然ではあつたけど休めたかい。藤丸君」

「あ……ダ・ヴィンチちゃん」

まさか、電源が落ちたように意識が落ちるとは思わなかった。それにしても……思いの外すつきりしたかも？

「試すような形になつちやつてごめんね。それでしつかり休めたかい？」

「ええ、それは……それと、懐かしい夢を見たような……」

今はもうあまり思い出せなくなった、カルデアに来る前までの頃だったような……

「ああ、それはちよつと理由があつてね。三日ほど経ったらマシユとハベトロットを連

れてシミュレータ室に来てくれないだろうか」

どうして、マシユとハベトロットを？

「……分かり、ました」

「何、新しい訓練とかじゃないんだ、楽しみにしていたまえ」

「？」

何をするつもりだろうか。

——三日後、マシユとハベトロットを連れて、ダ・ヴィンチちゃんが指定したシミュレータ室に入る。隣を見れば、マシユとハベトロットがそわそわしているような気もするけど……何をするつもりなんだろうか。おや、シミュレータ室に備わっているモニターからダ・ヴィンチちゃんの顔が。

「よし、皆集まったね。それじゃあ、始めるよ！」

おや、いつものシミュレータ室に入力された情報は……何処だろう、ここ。

「ここがマスターの故郷、ですか」

「……あ」

カルデアへ連れていかれる前までに通っていた高校か。ただ、どうも記憶があやふやな部分があるみたいだ。校舎の色とかグラウンドの色に僅かな揺らぎが見える。

「へえ、こんなことも出来るのか、凄いなダ・ヴィンチちゃんは」
「フオー！」

「完全な再現とまではいかなかったけどね。だけど、その辺りも上手にカバーするのも私の手腕あつてのことさ」

本当に久しぶりに見た高校は、何処か自分にとって遠い場所のように思える。そして、先生も同じ学生の姿もない高校はどうしても……人気のない廃墟と変わらないと感じる自分もいた。

「十分凄いですよ、ダ・ヴィンチちゃん。ありがとうございます」

「？」

何でマシユがダ・ヴィンチちゃんにお礼を……確かに、この再現はダ・ヴィンチちゃんがやったものだけど……あ。

「気が付いたかい、藤丸君。実は君には言っていないかったんだけど、マシユとハベトロツトが君の過ごした街を見てみたい、と言っていてね。私がやっていた発明の機能に併せて作つたんだ。黙っていてごめんね」

「ああ、そういうことだったんですね」

ようやく、どうしてこうなっているかを理解した。なら、案内を……と思つたけど、校舎の中には入れそうにないね。

「あれ、この先には入れそうにないですね。そう言えば、学校ですけど先生や先輩と同じ学生の姿も見えないですね」

「そうだよな、これだけ大きい建物なら何十人どころか、何百人もの人が通っていても不思議じゃないよな」

きつと、それはシミュレーターだけの所為ではないと思う。高校の景色も、今見ている景色と比べれば……

「うーん。そこはシミュレーターの再現性に課題があるかもしれない。私の方で調整してみたんだけど、藤丸君が意識していない部分や情報量が少ない部分の再現が難しくくてね。それがこれからの改善点だね」

思わぬタイミングでダ・ヴィンチちゃんのフォローが入る。

「それでも、たった1時間寝ているだけでここまで再現できるのは凄いわ、ダ・ヴィンチちゃん」

「ふふふ、お褒め頂き光栄だとも。とは言え藤丸君。この発明にはまだまだ改善点がある。今後のバージョンアップを楽しみにしていたまえ」

「へえー、僕が生きていた頃にはこんな高い建物なんて無かったけど、学校って所以外にも現代にはあんな建物が建っているんだなあ……」

ハベトロットが物珍し気に周囲を見ている。……そう言えば、ハベトロットは異聞帯

のハベトロットでは無いんだったね。そりゃあ、見たこと無いから物珍しい訳だ。

「……ここで先輩と同じ年齢の学友がケイローンさんのような授業を受けるんですね」

これは、マシユに誤解されかねない。訂正しなければ。

「いや、あそこまでは厳しくないよ。まあ、授業の内容を聞き逃していたら、テスト期間になつて必死こいて勉強する羽目になるんだけど」

「それじゃあ、先輩はどんな学生だったんですか。テストの対策は日頃からコツコツやるタイプですか。それとも、一気に対策するタイプだったのでしょうか」

「そういえば、昔の自分はどうかだっただろうか。今は出来ることをなるべくやってからやろうと努めているけれど……」

「そういえば、一夜漬けタイプだったかなあ」

「そうだったんですね。先輩はテスト範囲も一晩でおさらいが出来たんですね、凄いですー！」

マシユ、そんなに期待されても何も出ないよ？

「ねえねえマスター、折角だから見える範囲を散策してきていいかな？」

「折角だから一緒に行くよ。マシユもどう？」

「はい、ご一緒させて頂きます」

さて、思わぬきっかけから昔の景色を見る機会が出来たけど……うん、こんな日常が

あったんだったね。そういうえば、最近は何々なこと（イベントなどで）気を張り詰める日も多かったから、偶にはこうして昔を思い返すのもいいかもしれない。

校庭から校舎を一通り歩いて回ったところで一段落した時、ダ・ヴィンチちゃんからオペレーターが。

「うん、再現性に課題があるけれど、急ごしらえで作った結果としては上々かな。他にも幾つかのパターンを抽出することに成功したけれど、そつちも見てみるかい？」

折角ダ・ヴィンチちゃんが作ってくれたし、見てみようかな。

「お願いします。それで、次の場所はなんですか？」

「次はね……これだよ」

おお……あつという間に風景が切り替わって……これは、公園？

「多分、日常的に通っていた場所なんじゃないかな。一部分は再現性に欠けるかもしれないけど、他と比べてよく再現出来ている筈だよ」

「すつげー、こんなに広い公園があるんだ。公園を出ない範囲で周囲を見てくるね」

おや、ハベトロットがテンション高めで公園を散策し始めたぞ。

「おや、あれは……」

ハベトロットが歩いている先に見える、1m程度の植物の隙間から姿を見せたのはキャット……ではなく、野良猫。あれ、シミュレータなのに動物が出てきたの？

「猫です、猫ですよ先輩！」

そういうえば……野良猫が結構いたんだっけ、この公園。ああ、野良猫目当てによく公園に寄っていたような気がする。シミュレータとは言え触れるかな……つて。

「あ」

ハベトロットに向かってダツシユ、だと？

「わわわ、何だ君達。ここの猫、めっちゃ僕にまとわりついてくるなあ。なんだよ、君たちも糸巻きに興味あるのかい？」

見た所、植物の所で屯していたんだろう。あつという間に猫たちに囲まれてしまう。その数は5匹。くそう、うらやましいぞ、ハベにやん。

「裁縫道具を遊び道具には使いたくないんだけど……まつ、しゃあないか。いづくぜえく！」

糸巻きから飛び出した糸に飛びつく野良猫達、だけど生き物のように動く糸の前には勝てなかつたようだ。

「はあつ！やあつ！それえつ！」

イルカのように跳ねる野良猫達は、完全に獲物を狙う目だ。

「ハベトロットさん、大人気ですね。少し様子を見て見ましようか」

マシユと一緒にベンチに座り、ハベトロットが猫の家族相手に糸巻きで相手をする様

子を見る。

「これが君達に捕まえられるかな〜？」

幾度に渡つて、糸巻きから射出された糸に向かつて跳びつく野良猫たち。今度こそ糸を捉えるかに見えた跳躍だったが、その跳躍むなく野良猫達は綺麗な着地を決める。しかし、まだまだ諦めてはいないようだ。にやあと一鳴きした後、体が内に仕舞い、尻尾を振っていた。さながら、次からが本番だ、と言わんばかりの動きだ。

「やるじゃ〜ん！」

野良猫達の様子にテンションの上がつたハベトロットが……

「にやあにやあにやにやあ、にやにやにやにや〜！」

糸巻きから糸を抜き、野良猫達の視線に入るように伸びた後、竿を引くように一気に糸が上へ伸びていく。視界に飛び込んだそれに思わず飛びついた野良猫達、掠りそうなところもあつたが、結果を見れば皆外れ。

「そうだね。それにしても、ああして猫に絡まれていると、兄妹みたいですね」

「分かる」

こんな光景になるのなら、ゲオルギウスからカメラを借りて来れば良かった。小っちゃくて可愛いハベトロットがこうして猫と戯れている所を捉えることが出来たのに

……！

それからしばらく、野良猫と遊んでいたハベトロットだったけどその時間も終わりに近づいてきた。ダ・ヴィンチちゃんの手筈でシミュレータの設定を元に戻す。名残惜しかったけれど、久し振りに懐かしい景色が見られて良かったと思う。

「いーじゃん、いーじゃん！僕気に入った！シミュレーションなのは残念だけど、いつか本当に遊びに行こう！その時は、親御さんにもご挨拶するからね」

「今日はありがとうございます。ダ・ヴィンチちゃん」

「いやいや、私も珍しいものが見られて満足だよ。やって見た甲斐があったというもので」

そうして、3人とフォウ君でシミュレーター室を後にしようとして……

「そうだ。藤丸君、少しいいかな？」

何となく、予想が出来ていた。

「はい、マシユとハベトロットは先に戻って貰っていいかな？」

「おっけー、何かあったらいつでも相談してくれよ、皆のハベにやんだからな！」

「そ、そうですね。それじゃあ、昼食を一緒に食べましょうね……それでは、失礼します」

二人とフォウ君を見送り、部屋には自分とモニター越しのダ・ヴィンチちゃんだけになった。

「ごめんね、呼びとめちゃって」

「いえ、大丈夫ですよ。それより、今回はマシユとハベトロットから頼まれたことだったんですね」

「そうだね。もしかして怒らせちゃったかな。そうだったらごめんね」

そこは別にいいんだ。ダ・ヴィンチちゃんも悪意があつた訳じゃないし、何より……「いえ、それはいいんです。正直、忘れかけていた記憶を思い出させてくれて、こちらこそ助かりました」

「……そうか、それなら何よりだ」

ふと懐かしい光景を見て、余計な一言が出てしまったか。

「大丈夫だよ、ダ・ヴィンチちゃん。まだ、戦える」

「……こちらが聞こうとしていたことを、君の口から答えてくれるとは思わなかったよ」
多分、そのことを聞こうとしていたんだろう、とは思っていた。やらなければいけないにしても、それを遂行できるだけの精神状況なのか。それを確認したいと思うのは当然だろう。以前なら確認してくれる人はいたが、その人は僕達の代わりに喪われた。

「あんな状態になった所長を助けなくちゃいけないし、マシユや皆がいる。だから、ここでもう出来ないと言うつもりはない」

「……………」

助けられなかった先輩がいた。愛した人と過ごしたい、という想いを踏み躪って先へ進んだ。敵対していると良いながら、最後まで助けてくれた先輩がいた。そして、全てをぶつけて……その上で、逃がしてくれた人がいた。

「そして何より、まだやり切っていない。あの人に胸を張って会えるくらい、出来ることをやりきっていない。だから、大丈夫」

「……そうか。正直に言えばマシユの頼みとは言え、君に見せていいか不安だったんだ。まあ、前提として本人がいないとあの光景を映し出すことなんて出来なかったんだけど」

「もしかして……家を映さなかったのはわざとでしたか？」

「……………ごめん」

正直、助かった。まだ、胸を張って帰れると言えない。だから、まだ見るべきではないとすら思っていた。

「いえ、ありがとうございます。まだ出来ることをやりきっていないから、いいんです」
「……………ありがとう。君がマシユのマスターで良かった。これからも、よろしくね」

元の場所に戻るかは分からない。だけど、出来ることは確実にこなしていきたいと思う。それが、自分の存在と引き換えに、先に進ませてくれた人への恩返しだと思っ
ら。

「はい。ダ・ヴィンチちゃんもよろしくね」

そして、モニターからの接続が切れたのでシミュレーター室を後にする。この先、どうなるかはまだ誰にも分からないし、何でこうなってしまったのか、それすらも分かっていない。だけど、それでも進んでいく、進まなければならぬ。

「……あれ、ダ・ヴィンチちゃん？」

「やあ、さつきぶりだね、藤丸君。折角だからお昼を一緒にしようと思ってね。それに……」

ダ・ヴィンチちゃんは何処を向いて……

「先輩、そろそろ昼食の時間ですよ！」

「フオウ！」

ああ、そういうことだったか。

「分かりました。一緒に食べた方が楽しいですからね！」

さて、今日の昼食は何だろうか。

日々を取り戻す戦いの、一時の団欒

第2特異点を修正した私達は第3特異点に向けた準備と休みを貰っていた。幸い、清姫とブーディカが来てくれたお陰で食事周りの状況が改善されたのはいいことだけど……そろそろ強力な攻撃が出来るサーヴァントが欲しい、と思う。

「うー……」

マスターとして出来ることをしたい、と思いつつも私には出来ることが少ない。だから、少しでも役に立てるようになるために、筋トレを始めた。世界史はあまり詳しくなかったけど、英霊を知る為にライブラリを見る時間が増えた。魔術については……ドクターからはあまり向いていないと言われた。付け焼刃で出来るものでもないから、効果が出ない可能性が高いとも。

「……………」

でも、それでいいのだろうか。他の職員達はいつも忙しそうにしている。最近はカルデアスの爆発後の処理も終わったから、多少は休めていると言うけれど……私がレイシフトしている間はドクターやダ・ヴィンチちゃんを中心に私の存在証明をしてくれているのだ。ただでさえ、こんな施設の運用をしながら私の存在証明を行う……その労力や

精神的な疲労はどうだろうか。

「……………」

気が付けば、深夜なのに食堂へ足を運んでいた。料理と言えば学校の授業や一人の時にしかやったことはないけれど、簡単な料理であれば私でも出来る。

「おや、マスターじゃない」

「あ、ブーディカさん」

あ、そうか。召喚された後、進んで台所事情をやってくれているんだった。

「どうしたのこんな夜に。もしかして眠れない？」

折角だし、話してみようかな。別の人からの意見も欲しい。

「似たようなものですね……………その、自分には何が出来るんだろうって、思っています」

「……………ふんふん、それで？」

「筋トレを始めたり、英霊について知ることを始めたんですが……………ドクターや他の皆も頑張っているのに、私は皆にいつも助けられてばかり。だから、他に何か出来ないかと思ひまして……………」

思えば、私はここに来てから時間が浅い。ここがどんな場所かもあまり分かっていない。そもそも誘拐されたんだけど、もうそんなことも言っていられない状態だ。

「偉いね、よしよし」

へ？

「だって、君も頑張っているのに、ちゃんと周囲の人も見ているんだもん。忙しかったり、自分に余裕が無かったりすると、大体は自分のことだけで精一杯になっちゃうんだから。だけど君は自分だけじゃなくて、他の人もこともちゃんと見ている」

「そう、でしようか？」

ブーディカさんの穏やかな声に釣られて、張り詰めていた気持ちが少しだけ緩んだよ
うな気がした。

「そうよ。じゃあ、何が出来るか一緒に考えてみよつか？」

「いいんですか？」

「ええ、いいわよ。私も、朝の仕込みが終わったからね」

とても有難い提案だ。

「……ありがとう」

「いいの、いいの。さ、何が出来るか一緒に考えよつか。それで、君はどうしたいの？」
そう言われると、結構迷うな……

「えっと……普段から皆にはお世話になっているから、お礼とかしたいなあって」
「なるほどね」

……そうだ、ブーディカさんなら分かるかな？

「そう言えば、他の皆って何時ごろ飯を食べているんですか？」

「そうねえ……私も来たばかりだけど、皆ばらばらかな。それぞれやることがあるから、皆でご飯を食べることは滅多にないんじゃないかな。全員は把握できないけど……今は1日3食が多いんだっけ。でも、1食抜いている人もいると思うな」

ダイエツトをしているなら兎も角、この状況でそれは……

「特にあの……ほら、ピンクの髪をした」

「……ドクターですか？」

「うんうん。彼、殆どこの食堂に来ないんだよね。部屋で食べているか、作業場で食べているんだと思うけど」

ドクター、ケーキとか和菓子とか食べている印象があつたけど、それ以外はもしかして殆ど休んでいないんじゃないか……決めた。

「お、決まった感じだね。折角だから、時間を見てお姉さんも手伝うよ」

「ありがとうございます。でも、今日はもう遅いんで、明日相談に来ても良いですか」

「うん。私もそう言おうと思つていた所。私はご飯時の時間を少し外してくれれば大丈夫よ」

「ありがとう。それじゃあ、お休みなさい」

「はい、しつかり寝るんだよ」

うん、ブーディカさんは第2特異点でもお世話になったけど、お母さんのように安心できる人だ。急な思い付きとは言え、相談できて良かった。

「……………」

さつきの話を思い返ししながら、廊下を歩く。うーん、とりあえず何を作ろうか、何ならドクターは食い付くだろうか。そもそも、ここには何の食材があるんだろう。

翌日、いつも通りの時間に起きた私は、早速ダ・ヴィンチちゃんの元へ行く。

「おや、どうしたんだい。マシユもないということとは……私に秘密の相談かい？」

「はい、ちよつとお聞きしたいことがあって。少し前にライブラリの閲覧方法を聞きましたけど……そのカテゴリの中に料理ってありますか？」

「勿論だとも、古今東西の様々なデータがあるからね。もしかして、レイシフト先で料理をする為かい？」

「やっぱりあるんだね。それは良かった。」

「いえ、実は……………」

自分のこの行動を、ダ・ヴィンチちゃんはどう思うのだろうか。

「いい。実にいいんじゃないかな。特にロマニが聞いたら、感動して涙を流すんじゃないだろうか」

「そ、そんなにですか？」

「ああ、そうだとも。それだったら、私も協力しよう。皆の予定もあるから、準備が整ったら教えて欲しい。その時はロマニの首を引っ張ってでも連れてこよう。まあ、本人から来たがると思うけどね」

おや、私以外に誰かが入ってくる音が。

「あ、先輩。ダ・ヴィンチちゃんの所にいたんですね。おはようございます」

「おはよう、マシユ。今日も元気がいいのは良いことだ。開口一番で申し訳ないんだけど……一つ、藤丸君に協力して欲しい」

「はい。先輩のファーストサーヴァントとして頑張ります！」

「うん、その意気だ。よろしく頼んだよ」

「了解しました！」

嬉しいけど、そこまで気合を入れなくても大丈夫だよ。

ダ・ヴィンチの部屋を離れて、マシユと二人で廊下を歩く。

「ところで、勢いで協力すると言ってしまったが……私はどんな手伝いをすれば良いのでしょうか」

「うん、ドクターが殆ど食堂でご飯を食べていないって聞いたのと、職員達がばらばらのタイミングで食事を摂っている、って聞いたから大人数で食べる料理を作りたいたいだけ

ど……材料があるかを知りたいんだよね」

臆気だけど、外は相当に吹雪いていた記憶がある。きつと、とても寒い場所にあるんだと思う。幾ら空調が効いているとはいえ、そういう場所だからこそ美味しいと感じる食事はだろうか。

「……………」

あれ、マシユ？

「素晴らしい……素晴らしい提案です、先輩！」

「改めて、私マシユ・キリエライトも全力でお手伝いいたします！」

あ、ありがとう。

「それで、食料って何処に在るのかな。勿論、つまみ食いとかがなくて、何かあるかを知りたいんだ」

「それでしたら地下倉庫ですね。食堂も近いですし、厨房を担当されている職員に聞いてみましょうか？」

「そこについては当てがあるんだ」

さて、ブーディカさんはいるかな。

「おや、マスターにマシユだね。おはよう。食事はどうする？」

「ブーディカさん、おはようございます」

「頂きます。だけど、その前に……」

「おや、昨日の続きかい？」

話が早くて助かります。

「はい、地下倉庫……にどんな食材があるか教えて頂けますか？」

「うん、そういうことなら構わないよ。マシユも話を聞いている感じかな、それだったら一緒に来る？」

「はい、ご一緒させて頂きます」

「分かった。それじゃあ二人共近くに座って待っていてね」

よし、まずは朝食を食べてから、と。

ブーディカさんの食事を食べて一息つき、本題の地下倉庫へ……何だけど、さつきから震えが止まらないんだ、何でだろう。

「おや、マスターには寒かったかな？」

「何か掛ける物をお持ちしましたようか？」

「い、いや、大丈夫……」

何と言うか、この寒気は……

「ま・す・た・あ♡」

「うわあ!」

何かそんな気はしていたよ、していたよ……それでも、心臓が悪い。

「……………ごめん、全く気付かなかった」

「私も、です」

清姫は気配遮断スキル……持っていないなかったよね?

「ところで、お三方はここで何を為さるのです?」

「ああ、それは……」

これまでの事情を掻い摘んで説明すると、何故か清姫が涙を流し始めた。

「私、ますたあの心遣いに感激致しました。この清姫、全力で協力させて頂きます!」

清姫 が 仲間 になった。

「ああ、それでそろそろ確認したいんだけど、マスターは何を作るつもり?」

そう言えば、言っていないかったね。

「おでんを作るつもりです」

「おでん?」

やっぱり、ブーディカさんは分からない、か。

「おでんですか。いい選択だと思います」

「清姫は知っているのかな?」

「はい。私が生きていた頃には無かったものですが……日本の冬の時期に食べられていたんです。ポトフのような煮込み料理ですわ」

「えーと、おでんおでん……あ、これですね」

「あ、マシユ。私にも見せて」

マシユとブーデイカさんがおでんについて調べている間に、調味料を見ておかないと。

それにしてもカルデア、思ったよりなんでもあるな。でも、流石に……スタッフに日本人が少ないから、醤油とか出汁は無いよ、ね。とりあえず全体をざっと見るとして……うん、とりあえず缶詰がある。まあ、保存食が多いのは分かっていたけど、それにしても数が多い。調味料は……塩、砂糖、香辛料、オリーブオイル、アンチョビがある。常温でイケて長期保存が出来る食材を置いているのかな。そうなると料理酒やお酢は冷蔵庫かな。……見れば見る程、見慣れない調味料や缶詰ばかりだけど本当に大丈夫かな、これ。

「うーん……じゃあ、何か代案も考えないと、不味いかなあ」

「先輩、何を探しているんですか？」

「調味料を探しているんだけど……醤油とか昆布、鰹節つて分かる？」

反応を見る限り、マシユもブーデイカさんも分からない感じか。聖杯の知識もそこま

では対応していないみたいだね。

「清姫に聞いてみよう。おーい、清姫」

「はい、何でしょう」

来るの、早！

「醤油とか昆布、鰹節がここにあるか、分かるかな？」

「ブーディカさん、此処が調味料の場所なんですよね」

あれ、清姫は分かるんだ。何でだろう、助かるけど。

「うん、そう聞いているよ。まあ、ここにあるのは未開封のものだけ」

「ここも随分と広いですから、手分けして探してみるしかないですね。私とブーディカさんで冷蔵庫にあるか見てきますので、マスターとマシユ様はここで探してください」

多分、冷蔵庫は広い上に冷えるから、気を遣ってくれたんだろう。

「ありがとう。助かるよ」

「いえいえ。まずはあが風邪を引いてしまつてはいけませんので……いえ、それはそれで介護イベン……」

「はい、決まつたならいくよー」

「あーれ……」

母は強し。バーサーカーしそうな清姫が、為されるままに連行されていく。

「先輩、それでは頑張つて探しましょう！」

それから探すこと数分、結局探している物は見つけれないかと思つただけ……
「あれ？」

下段の棚を気にしながら探していたからか、気が付けばあまり人が立ち入ら無さそうな場所に迷い込んでいた。あれ、どうやって来たんだ、ここ。何かとても暗いし……端末も灯りも無いから気を付けないと……

「せ……ばい……すか……」

今のはマシユの声？

「マシユ？」

早い所、マシユと合流しないと。それにしてもまさか、食糧庫で迷う日が来るとは。

「あたー！」

何かに足が引つ掛かった。やば、こんな何処に何かがある所で転ぶつてことは上から……

「あ、先輩こんな所に！」

……そんなことは無くて良かった。

「それにしてもこんな場所があったとは。よく見つけられましたね」

「気が付いたら、ここにいてね。本当、どうやって入つたんだろう」

「え……先輩が先に入っていたんですよね？」

「そうなんだけどね。おまけに、暗いから何も視えなくて」

「……何にせよ、見つかって良かったです。折角だからここも探してみま……先輩？」

マシユが持っていた端末から光が出て……あ、あ……

「あつたー……」

大声が出てしまったことを許して欲しい。まさか、無いと思っていた醤油、昆布、鰹節が揃いも揃ってこんな場所に沢山保管されていたとは。食料棚の間を埋め尽くすように置かれたこれらを見るに、準備こそしていたけど普段から使うレパートリーに無かったから、何かの機に仕舞われたのかな。

「これらがマスターの探していた調味料ですか？」

「うん、まさかこんなにあるとは……よし、早速二人にも連絡しよう！」

まあ、そうして早速、施策をしようと思ったんだけど……まだまだ壁はあつたんだ。

早速、食堂でおでんを試作しようと思ったんだけど、清姫に言われるまで忘れていた大きな問題があつた。

「ところでますたあ、練り物についてはどうするつもりですか？」

「……あ」

そうである。ちくわやさつま揚げ、と言った練り物の存在を完全に存在を忘れていたのだ。

「練り物？」

「ええ。魚の身を水に晒して余分なものを落とす後、水分を落とすことで練り物の元が出来るのですが……」

「成程、後は小麦粉みたいにパスタとか、ピザ生地のような形に成形して使うのね」

流石はブーディカさん、今ので理解してくれましたか。

「このカルデアにいる職員全員分をやるには、それなりに手間がかかります。しかし、それをする為の設備がここにあったかと言われると……」

「……そうだった」

失念していた。醤油や出汁の材料が見つかって満足していたけど、せっかく材料の元はあるんだから練り物も入れたい。冷凍された魚も結構あるんだし。

「うーん……とりあえず、一つ一つやっていく？」

「人数分を考えると出来なくもないけど……やるしかないか」

カルデアでは、スーパーのように既製品は売っていないのだ。無ければ、作るしかない。

「……おやおや。随分と話し込んでいるようだけど、何かお悩みかな？」

「この声は！」

「ダ・ヴィンチちゃん！」

「やあ、今朝ぶりだね、藤丸君。それで、私で良ければ話を聞くけど？」

ダ・ヴィンチちゃんなら、どうにか出来るかも！

「ありがとうございます。その……朝に話していた、職員の皆さんに料理を作る話なんですけど、何を作るのかを決めた後、それを作る元があることまで確認したんです」

「ほうほう、それは先行きが宜しい。しかし、どうして困っているんだい？」

「実は、材料の一つである魚を使ってちくわとかつくねとかを作りたいんですけど……作る道具が無くて困っていた所だったんです」

「……ちくわ、つくね、か。今までの話からすると、藤丸君の故郷の料理なのかな？」

しまった、ダ・ヴィンチちゃんだから分かると思つて、説明を飛ばしていた。

「そうです。すみません、気が急いちゃつて」

「いや、何か思いついたらやつて見たくなるのは私もよく分かる。気にしなくていい。それより、ちくわやつくねはどう作られるのかな」

「それは……」

先程の清姫の言葉を使って、たどたどしく説明したが理解してくれただろうか。

「私はあらゆる芸術を嗜んできた身だが、食品一つにかなりの工程を通すんだね。そう

言えば、ちくわやつくねは s u r i m i なんだろう。召喚された後に知ったが、そのまま国際語になっているんだとか。ロマニぐらいしか日本食を食べないから奥に保管されたのかな……私も実際に食べたことは無かったな。ふむ、その練り物を作る機械、簡単な物で良ければ作ってあげようか？」

とんとん拍子に話が進むとは……流石は、ダ・ヴィンチちゃん。
「いいんですか。忙しそうにしているのに」

「いいとも。それに、偶には違うこともやってみて、新たな発明の鍵にすることも大事なんだぜ。とは言え、だ。ちよつと味見くらい、させてくれよ？」

「はいー」

何と言うか、やはりダ・ヴィンチちゃんは万能の人であった。

ダ・ヴィンチちゃんに試作を渡してお墨付きを得た3日後、夕食に合わせておでんの仕込みを続けていた。

「……よし。それにしても、事前に準備していたとしても、ここまでの大作業になるとは」

家でやった時はもう少し手軽だったような。

「……ここは家庭、と呼ぶには人数が多いし、鍋の種類もあるからねえ」

「そうですね。私も疲れました」

数が増えたのは仕方ない。魚が食べられない人も考慮して、肉を使ったおでんの鍋も作ったからだ。

「後はじっくりと煮込むだけだから、そろそろ休もうか」

清姫とブーデイカさんには感謝しかない。マシユも途中まで手伝ってくれたけど、バィタルチェックは仕方ない。それに、話を聞いていて、手が空いていたスタッフも手伝ってくれたお陰で、かなり早く準備が終わったと思う。

「ほら、マスターにはもう一仕事あるでしょ？」

「へ？」

だって、料理の準備はもう終わったよ？

「さつき、ダ・ヴィンチが、折角作ってくれたんだから、挨拶は藤丸君にやってもらおうかなって、言っていたよ」

……………何、だと？

「今すぐ、考えて、きます」

「マシユも何か聞いているんじゃない、一緒に考えたらどう？」

「そう、します…………」

うぐ…………マシユは何か良いアイデアを持っているかなあ……

他の職員達が続々と集まってくる。あの爆発事故でかなりの人数が亡くなった。その事後処理にもかなりの負担があつたはずだ。

「大丈夫ですよ、先輩」

私の緊張を察したか、マシユが声を掛けてくる。

「そ、そうかな」

「はい、だって、別のミーティングやバイタルサインの時に職員達と話をしていました。この時を楽しみにしていたんですから」

「こちらまで明るくなるような笑顔だ。そう言われたら、こちらも気合を入れるしかない。何せ、日頃からお世話になつてるのは私の方なのだから。」

「全く、君が遅れそうになるとは何を考えているんだい、ロマニ」

「う……面目ない。機材の点検をしていて、気が付いたら」

「全く……折角二人がこういう催しを企画してくれたのに、失礼じゃないか」

何か、いつも通りだな、ドクターは。お陰でこっちも肩の力が抜けたというか。

「ドクターも仕方ない人ですね」

「そうだね」

おや、ダ・ヴィンチちゃんが食堂の中央に来たぞ。

「さて、諸君。改めてだけど、第2特異点までの修正お疲れ様だ。少ない人数で在りながらここまでやれてくれたのは、間違いなく君たちのサポートのお陰だ。これからも引き続き大変なことが起きるだろうけど、変わらない支援を頼みたい」

あ、これ。もうじき来るぞ。

「さて、朝に伝えたが、今日は我らのマスターが皆に料理を作ってくれた。これを機にお互いの交流を深めることが出来たら幸いだ。既にお腹を空かしている人も多いだろうが……ロマニー！」

「うわあーど、どんなのかなあ〜って気になったただだよ」

……………ドクター。

「全く、君というやつは。さて、藤丸君。今日の料理を企画してくれたのは君だろう。手短で構わないから、君からも一つ、挨拶を貰おうか」

「先輩、フアイトです！」

マシユが小声で声を掛けてくれる。

「……私はここにきて短いですが、色々なことがありました。何とか今日までやって来られたのは、間違いなく皆さんのお陰だと思っています。まだまだ特異点も残されているので、これからもご迷惑を掛けることがあるかと思いますが、よろしく願います。まだまだ未熟な身ではありますが、これからもよろしく願います」

うわ、皆から拍手が！

「さあ、折角マシユと藤丸君が作ってくれた料理なんだ。出来立てを頂こうじゃないか！」

ワツと声上がり、小さな晩餐会が始まった。

「お疲れさまでした、先輩」

「うん、マシユのおかげで助かった」

原稿、殆ど作ってくれていたんだよね。本当に助かった。

早速食べようかと思っただけど、職員達の様子も気になってしまった。それはマシユも同じだったらしい。私と共に、振り分けられた鍋を回ることにした。

「藤丸、これは何だい」

おや、早速声が。

「それはちくわと言って、魚の身をソーセイジみたいに形を整えたものです」

「そうなのか、この味は初めて食べたけど、美味しいな」

「それは良かったです。他にも色々あるんで食べて下さい」

「ありがとう」

お、隣も見ればマシユも質問されているね

「マシユ、この透明なのは何？」

「それは大根ですね」

「大根ってあの根菜だよな」

「はい、それをその鍋のつゆにつけてじつくりと煮込みました」

「それで、こんなに透明なのね……」

おでんの大根は正義、なのです。変わり種として、ハンバーグやシウマイの入った鍋もあるし、折角だから食べ比べしてくれと嬉しいな。さて、そろそろ私達も……おや、ドクターが。

「いやあ、まさか僕達の為に料理を作ってくれるなんて思わなかったよ」

「いつもお世話になっていきますので。それとドクター、偶には休んで下さい」

いつもみたいなのらしくらりと逃げられるかと思っただけ。

「そ、そうだね。正直、やることまだまだ沢山あるんだけど……ここまでしてくれた君に言われてはしょうがない。今日は大人しく休むとしよう……それでこの鍋料理、とても美味しいんだけど、料理名とかあるのかい？」

日本食を食べると聞いていたけど、あまり詳しくはないのかな。

「おでんと言います。カルデアは寒い場所にあるから温かい方がいいかな、と思って」

「……って、熱々のODENだって、南極条例違反じゃないか！」

何だろう、この反応。まるで、マジ☆マリについて話す時みたいにテンションが高い

んだけど。

「どうしたんだい、ロマニ？」

一緒にいることが多いダ・ヴィンチちゃんすら不思議に思っているようだ。うん、ドクターは何を言っているんだらう。

「……あれ、折角二人が作ってくれたというのに、僕は何を言っていたんだ？」

よく分からないけど、よく分からないことが分かった。とりあえず、おでんが嫌いという反応じゃないから食べてくれるだらう。あ、折角だから食べさせてみよう。変なことを言った罰だ。まずはこの熱々の大根を……

「ドクター、その歳になって好き嫌いはいけませんよ。はい、あーん……あ」

「あ」

「おや」

あ、口に入れるつもりだった熱々の大根がロマニの頬に。

「熱つついいい！」

この小さな晩餐会は、盛況の内に幕を下ろした。普段から話す職員達と機会を作れたのはとても良かったと思う。終わってからも色々な方からお礼を言われたし……うん、次回ももう少し、料理について詳しくなろう。

それと、特異点の攻略も！

お題22：語る名を持つ、ということ

「此度はライダーの霊基にて現界しました。真名を、太公望……あ、呂尚でも姜子牙でも姜太公でも、好きに呼んでくれて構いませんよ。しかし、惜しいなアー。キャスターで喚ばれてたら、僕は絶対、グランドキャスターだったろうになア」

こうして私はカルデアに召喚された。ううん、キャスターだったらグランドだったろうに……そこが残念だ。

さて、マスターに案内されたこのカルデアと呼ばれる拠点……大したものだ。まさか、これ程の大きさを誇る、移動する拠点だとは。更に、数多くの英霊を既に率いているというのだから素晴らしい。今後の戦いにおいても、あらゆる戦術が取れるというのは重要なことです。それに孔明殿、司馬懿殿、陳旧殿、オデュッセウス殿……のような様々な軍師がいらっしゃったとは。今度、ゆつくりと語り合いたいものです。

「それにしても、ここのサーヴァント達は食事を摂るのですね」

案内の際、基本的な場所についてマスターとマッシュ殿から聞いたから食堂へ足を運んでみましたが……かなり広いですね。当然ながら、私の時代では見たことの無い料理が沢山あるのだとか。

おや、何やら視線を感じますね。大方、新参者だから気になつてゐる、と言う所でしょうか。それはそうでしょう。私も同じ立場であれば気になりますとも。

まあ、それはそれとして……………一部サーヴァント達の視線と声になりまますね。あの角にいる海賊風の大男、別テーブルにいる眼鏡をかけたサーヴァントに水着霊基(?)なるサーヴァント。一体、何の共通点が？

しかも、周囲に人が少ないからか、その声が聞こえるんだよなあ……

デュフフフフ……まさか、師叔が来るとは。流星は我がマスターと言つたところですな。

師叔がこんな姿とはね……にしても、眩しいほどのイケメンですわー。

師叔ね……とところで、四不象はどんな姿をしているのかしら……新作のモチーフにしたいのだけど。

噂話になるのも分かります。それから、私がイケメンなもの。四不象が見たいなら後で見せても構いませんよ。しかし、師叔とは……一体。釣りは嗜みますが、弟子を持つた訳ではありませんし……聞いた所による李書文殿のように武術を極め、誰かに技を教えた訳でもないですし……何故なのでしょう。宮勤めの時でもあのような奇異の視線は無かつたですから、些か慣れないですね。

いえ、こういう時は切り替えましょう。そもそも、食事を貰う為にここへ足を運んだのですから。さて、どうやって頼むかもそうですが、どのような料理があるか席に座って観察でも……おや、料理を作っているのもサーヴァントなのですね。料理を作る専門のサーヴァントなのでしょうか。ということは……キャスターのサーヴァント、でしょうか。

「はい、本日のAセットよ」

「はあい、ブーディカ。今日も美味しそうですね」

「そりやあ当然よ、マタハリ」

なるほど、料理を担当している方の一人はブーディカさん、ですか。おや、あちらでは男性が料理を作っているのですね。

「こちら、お子様セットだ」

「エミヤおじさま、ありがとう」

「あ、今日はハンバーグがあるんだね！」

「嬉しいわ、嬉しいわ。今日はデザートも付いているのね！」

どうやら一気に三人分作っていたようですが、かなり手馴れているようですね。しかも、先程のAセットにしる、お子様セットにしる、トレーの上に乗っている料理は何れも食べられればいいというものではない。何れの料理も美味しそうに見える工夫が見

て取れる。これは期待できそうですね。

「あの、すみません」

「食事の注文かね……ああ、マスターが新しいサーヴァントを召喚したと言っていたが、貴方でしたか。初めてであれば、好みの食材程度のリクエストは構わない。その代わり、多少の時間は頂くが」

なるほど。他の方のメニューは事前に用意しておくことで早めに提供できるようにしているんですね。とは言え、初めてだからと此方を気遣っているのですから、そのご厚意に甘えましょうか。

「それでしたら、魚料理を頂けますか」

「承知した。出来上がりに少し時間を貰うから、席に座って待っていて欲しい」

そう言つて、赤い服を纏った男性が調理に戻つていく。出来れば、料理名について聞きたかったですが、出来上がった時に聞きましょう。……おや、中々端正な顔をした侠客がこちらを見ていますね。

「おう、あんたが新たに召喚された、つていうサーヴァントか」

「初めまして。私、真名を太公望と申します」

おや、驚かせてしまいましたか。

「マジか！ 同郷つて感じはしたが、まさかの超有名人だったとは……これは畏れ入つ

た。それにしても、流石は我がマスターと言ったところだ……こっちは有名でも、ちゃんとなんだな」

小声でしたけど聞こえましたよ、最後。

「何の話でしょう？」

「あー……それは、その内に分かる話って奴さ」

「ところで、貴方は？」

「おっと、すまねえ……まあ、俺はあんたと比べたら名も無い無頼漢だがね。燕青ってんだ」

……外見的に見て軍師でもなければ、名の知れた將軍でも無さそうですね。

「すみません。ご存じなくて」

「いやいや、いいのさ。そもそも、俺が英霊としてここにいること自体、イレギュラーな話だからな」

確かに人理の揺らぎが原因で、本来は存在出来ないものも介入することがあるとは聞きますが……このサーヴァントもその例なのですか

「ですが、ここに居る以上、マスターとの縁を持ち、強力なサーヴァントであることには違いないでしょう。ところで、燕青殿にはどのような逸話があるのでしょうか」

「おっと……聞かれたからには答えるが、あんたと違って話せることはそうないのさ。」

強いて挙げるのなら、水滸伝つてのが俺の出自ななでな。もし、どうしても知りたかったらそれでも読んでくれれば粗方分かるって奴さ。まあ、今の俺は他にも混じっているんだがな」

書物が出自……それから混じっている、というのはどういう事でしょうか。

「他に何かあるかね。そろそろ頼んだ酒と肴が出来そうなんだが」

……話をしたり、料理を頼んだりで忘れていましたが、相変わらずあの角から視線が気になりますね。かと言って、彼らに直接声を掛けたくは無いし……何より、あんな視線をずっと飛ばされるのも嫌だなあ……

「……私事なのですが、一つお聞きしたいことが」

「何だい？」

折角だから、今の内に聞いておこう。

「あの辺りにいる一部のサーヴァント達が……私のことを師叔と呼んでいたような気がするのですが、ちょっと心当たりがなくてですね。私、あの者達を弟子にした時なんて無いですよ、ね？」

サーヴァントだから、気が付いたらそんな話が付いている……ということもあるらしい。

「あつはつはつは……そうかそうか。そりやそうだよな」

はて、何か笑うようなことでしたか？

「あーいやいや。そういうことじゃないのさ。俺自身にも関わるんだが……所謂、近年の創作の成果って奴らしい。詳しいことはマスターかマシユ、それと図書室にいる別嬪さんに聞けばいいさ。確かあれは……封神演義、だったか。それで分かると思うぜ」

彼はそう言つて、それじゃまた、と離れていきました……成程、彼のお陰で段々分かつてきました。

「……私、それでも呼ばれた記憶が無いような。まあ、こういうことは聞いてみなければ分からないものですね」

「さて、そこの方。そろそろ出来るからこちらに来て欲しい」

ふむ、私の料理もそろそろ出来るようになりますし、取りに行きましょう。

「こちら、魚のポワレだ。蒸魚にしようと思つたんだが、器材を別の者が使つていてな。手早く出来るものを用意させて貰つた」

この方、もしかしてマスター達から真名を聞いているのでしょうか。

「いえいえ、こちらは大雑把な注文をしましたから、気にしなくていいですよ」

さて、釣つた魚を新鮮な内に食べるのは美味しいですが……こちらではどうでしょうか。

「さて、いただきますか」

それにしてもポワレ、ですか。西洋の魚料理と聞きましたが……ふむ、これは中々。魚は取れたてを塩焼きにして食べるものと信じてきました。……皮のカリカリとした食感にすっかりとした食感の魚の肉……このような調理方法もあるのですね。食堂を預かる者達の腕前も高いのでしょうかが調理に一工夫、二工夫入れることで、魚の味をより感じられるようになるとは。次の日は別の料理も試してみましよう。

さて、燕青殿が言うにはこの辺りに書庫があるとのことでしたが……うん、名前がかなり独特でしたけど、類を見ない程の書籍がありますね。そして、数だけではなく、種類も素晴らしい。軍略から歴史の本、はたまた魔術の本……それに、絵の付いた本も沢山あるとは。古今東西の書籍がここにある、と言っても過言ではないでしょう。

「こちらはご利用、初めてでしょうか」

なるほど、燕青殿の言う通り、美人さんが受付をされていますね。そうすると、この方もサーヴァントと言うことでしょうか。

「び、美人だなんてそんな……」

「おや、何も言っていない筈なんだけど。」

「申し遅れました。私、紫式部と申します。どのような本をお探でしょうか」

「これはご丁寧に。私は太公望と申します」

「まあ！」

おお、私の名前は知っていましたか。これは話が早そうだ。

「水滸伝があればお借りしたいです。それと……先程燕青殿から、私が師叔と呼ばれている理由について、マシユ殿やマスター、そして貴方などに伺えば分かる、と聞いたのですが」

ふむ、彼女にも思い当たる節があるようですね。

「それはですね……少々お待ちいただけますか？」

さて、探してくれているのでしようし、暫くここで待つていた方が良いでしょう。……と、思いましたが、割と直ぐ戻ってきましたね。

「ご希望の本はこちらですね」

水滸伝とこれは封神演義ですが……絵本、ですね？

「こちらは漫画と呼ばれるものです。その作品に登場する主人公、太公望は登場人物の殆どの方から師叔と呼ばれております。恐らく、師叔と呼んでいたのはそれが理由ではないでしょうか」

ああ、それで。

「ええ、どうされますか？」

「そうですね。こちらもお借り出来れば」

「分かりました。少々お待ちください」

なるほど。謂れの無い呼び名でしたが、そういうことでしたか。まあ、これも良い機会です。そう呼ばれているということは相当に有名な作品なのでしょう。

そう思い一気に借りたのは良いのですが……まさか20冊以上の本を抱えて廊下を歩くことになるとは思いませんでした。

お題23：【身内自慢】

日課の筋トレも終えてマイルームでのんびりした時、マシユがお菓子を持って部屋へ遊びに来た。それとトコトコと歩いてきたフオウ君も。どうやら、お菓子作りをしたサーヴァントからお裾分けをして貰ったらしい。

「これ、誰が作ったの?」

「意外なことに、渡辺綱さんです!」

「フオウ!」

「バレンタインの時に作って以来、色々なことにチャレンジしているらしいね。この前はパウンドケーキを作っていたって、金時から聞いたよ」

「何と言うか…意外ですね」

あの人、生前ではあまりやらなかった何かを作ることが楽しいのか、プランターにも足を運んだことがあったな。それから、邪魔しないように料理を作っている所を見ていたりとか。まあ、今まで出会ったサーヴァントの中で一番ギャップを感じたのは…あの海賊2人なんだけど。さて、折角マシユが遊びに来たんだし、本じゃなくて別のことをしようかな…えーと確かこの辺に。

「マシユ、折角遊びに来たんだし、トランプでもやらない？」

「はい、先輩。お付き合います。それじゃあ何で遊びますか？」

「そうだね、2人で遊べるゲームなら……」

「スピードにしよう！」

「フオウ！」

「そうして3戦行い……3戦全勝。うーん、1敗くらいすると思つていたんだけど。」

「うう……」

「そろそろ、違うゲームに変えようか。」

「マスター、すみません。少し教えて……それは何の遊びですか？」

「そこに、徴側と徴式がマイルームへ遊びに来た。後で話を聞いた所、端末を使って撮影する方法を知りたかったらしい。」

「カードを使ったゲーム……確かトランプ、だっけ。あまり知らないけど、色々な遊びがあるらしいね」

「急ぎの用事が無ければ、だけど……」

「折角だし、2人もやっついていく？」

「そうですね。急ぎの用事でもないですし。私もやってみます」

「お姉ちゃんがやるなら、私もやるよ」

何よりトランプは、2人より3人以上で遊ぶゲームが多い。どうせなら大人数でやった方が楽しいと思う。

そんな経緯から、トランプを4人で遊ぶ。トランプは古くからある遊具故に、様々な遊びがある。ババ抜き、ジジ抜きを始めとして、大富豪、七並べ、フォウ君のし……じゃなかった、ぶたのしつぽだ。それから神経衰弱……と自分とマシユの提案で様々なゲームで時間を過ごす。そうしてよく知られているゲームを一通り終えた所で時計を見ると、1時間以上も時計が進んでいたことに気が付いた。と、同時に。

「……そう言えば、喉が渴きましたね」

マシユに言われて、自身も喉が渴いていることに気が付く。マシユと自分だけならば、1人で取りにいけるはずだ。フォウ君は寝ているから無くて大丈夫かな。

「マシユは何を……」

飲みたいのか、と言い終える前に。

「じゃあ、次のゲームで負けた人がお茶を用意するのは如何でしょうか」

徴側からそんな提案を受ける。

「よし、やるからには負けないよ」

そう意気込むのは徴式。横を見れば、マシユも乗り気なようだ。さて、そうするとど

んなゲームで勝敗を付けるか……が大きなポイントだ。

「最初にやった大富豪……は順位がありましたけど、一発勝負だと違う気がしますね」

「それでは徴側さん、徴式さん。ババ抜きは如何でしょうか」

「でも、最初に枚数少ないと有利じゃない。どうせなら、最初は皆同じ条件がいいかな」

ババ抜きは勝負として面白みに欠ける、そんな徴式の意見も踏まえると。

「そうなる……マスターはどんなゲームがいいと思いますか」

短時間でできるゲームであること、逆転要素があること……確か、そんなゲームがあつたはずだ。

「じゃあ、ドボンはどうかかな？」

ドボンのルールをざっくりと言えば、トランプでやるUNOだ。最初のカードの枚数や役札こそ違うが、ある程度の人にはこれで通じるのではないだろうか。最も、聖杯から与えられる知識にUNOがあるかは知らないけど。

簡単に説明し、1度練習してさあ本番……で勝負を始めたものの。

「リーチ」

「では、こちらはどうですか？」

徴側が出したカードはジャック（11）……あれ、順番が逆さになるから次は自分では？

「あ……上がりです」

あつさりと上がってしまった。あまりにスムーズだったので、徴式がこちらをジト目で見る程に。しかし、勝負は勝負。徴式も直ぐに切り替えてゲームへ戻る。その後、一巡して次のターン。マシユの残り手札は2枚。

「リーチですー!」

次は徴側の出す番だけど、ハートのエースだから……

「ああ、飛ばされてしまいました……」

徴式のカードは残り2枚。こうなると、枚数的に次はマシユが上がるかな?

「よし、これで上がり!」

と、思いきや、徴式の手札からハートとダイヤのクイーンが。場に出されたカードがハートだったので上がれたようだ。

これで、マシユと徴側の一騎打ち。徴側が次に出したカードはダイヤの2。

「ううう……2枚引かないと、ですね」

マシユの手札は残り3枚、対して徴側の手札は2枚。このままだとマシユは負けそうだけど……どうなるだろうか。徴側がハートの8を捨てて。

「よし、これでリーチです」

リーチと宣言する。マシユがこのまま負けてしまうか……と思いきや。

「あ、それはドボンです、これで上がりです！」

場に出されたスペードの2、ダイヤの3、クラブの5。確かに合計が8だから、これで決着だ。

「フオフオフオフオ、フオー—ウ！」

何時の間にか起きてゲームを観察していたフオウ君が、ゴングを鳴らすように可愛らしく吼える。

「え?! ああ、負けちゃいました〜……」

「どんまい、お姉ちゃん」

「やりました、先輩！」

決着がついたのでトランプを集めていると、お茶を持ってくるために徴側が立ち上がる。

「それじゃあ、私がお茶を淹れてきますね」

すると、伸びをしながら、マシユも立ち上がる。

「私も手伝いますよ、徴側さん」

「でも、負けちゃったのは私ですし……」

「四人分のお茶とカップを1人で持つてくる方が大変ですよ。だから、お手伝いします」

「……ありがとうございます。じゃあ、式ちゃんはお留守番、お願いしますね」

「うん、分かった」

マシユと徴側がマイルームを出て食堂へ飲み物を取りに行く最中、それは起こった。徴式がおもむろに日記帳を取り出して今日のことでも書くのかと思いきや……突然、此方へ振り返った。

「……………」

「そういえば、日記を書いていた時に自分が来ちやつて驚かせてしまったことがあったんだっけ。」

「別に……気にしないよ?」

「フオウ」

「フオウ君も同意見のようだ。こっちに擦り寄ってきたので、耳の後ろを撫でておこう。ところで、フオウ君はネコ科なんだろうか、それともイヌ科なんだろうか。永遠の謎である。」

「あ、うん。それじゃあ遠慮なく……忘れない内に、と。ランプのゲームで負けた時のお姉ちゃんの表情が守りたくなるほど可愛い……よし」

その時もこうして徴側のことを書いていたんだっけ。

「そういえば、マスターと一番付き合い長いサーヴァントがマシユなんだっけ?」

「フオウー！」

「うん、そうだけど……何か聞きたい事が？」

「ああ、付き合いが長いなら、私みたいにマシユのことを日記に書いているのかなと思っただけ……」

そう言いながら徴式が部屋を見渡す、何か思うことがあるのだろうか。

「この部屋、長く使っている割に荷物が少ないね」

確かに。置いてあるのもバレンタインの時に貰った人形三銃士、ヴィイ、クーちゃん、アポロン……の他には、トランプや図書館で借りた書籍データ端末程度。

改めて言われてみれば、部屋の広さの割に物が少ない。まあ、フオウ君の遊ぶスペースが広いと考えれば、あまり気にならないんだけど。強いて言えば……

「あー……うん、色々あるんだよ。その、マイルームに戻ったらサーヴァントの誰かが寝ているとか、マイルームで待ち伏せされていて、戻った時にそのサーヴァントの用事に付き合うことになる、とか」

「フオウ、フオウウ……」

悲しいことに、これにはもう慣れてしまった。救いと言えば、マイルームに入った瞬間にそれが分かることだろうか。後、寝ている時に入ってくる者はあまりいいことか。あ、でも鬼系のサーヴァントや道満だったらちよつと怖い。

「ええ……それは、どうなの？」

「徴式も徴側のベッドでやっていそうな気もするけど……」

「だって、家族だよ。別に不思議じゃないでしょ。マスターで言えば、マイルームにマシユが遊びに来ていても、フオウがベッドで丸くなっても気にしないでしょ。それが、何時ものことなんだから」

「それもそうだね」

言われれば、自分にも覚えがある。朝か夕食の後、どちらかの時間帯では必ずマシユとは顔を合わせている筈だ。

「でも、幾ら付き合いが長いとはいえ、サーヴァントがベッドに潜り込んでいるのは……」

「だけど止める手段が無いんだ。霊体化してしまえば、誰でも簡単にマイルームに入れちゃうからね……」

「フオ、フオウ……」

「……そつか、ごめん」

徴式が遠い目をして黙ってしまった。心なしか、フオウ君も遠い目をしているような……うーん、まだ二人は帰って来ないだろうし、何か別の話題を出した方がいいかな。

「そう言えばその日記、毎日書いているの？」

「当然だね、お姉ちゃんが可愛くない日なんてある訳ないだろう……ふと思ったんだけど、マスターやマシユは日記が無くて、可愛いポイントを言えたりするのかな？」

そりゃあ、自慢の後輩だからね。

「それは勿論」

「フオウ！」

「折角だから可愛いポイントを教えてよ」

「そりゃあね。まず、マシユは言うまでもなく可愛い。今はご飯を美味しそうに食べるけど、始めの頃は人形みたいにあまり感情を出すことは無かったかな。だけど、色んな食事を食べていく内にどんどん表情も出てきたんだよね。その切っ掛けを作ったキッチンに居るメンバーには感謝しても足りない位だよ」

キヤット、ブーデイカ、エミヤ……大体食堂にいるメンバーはその辺りだけど、他の方も彼らに習うことがあるみたい。

「確かに、食堂のご飯美味しいよね。しかも、色々な地域に対応した食事を苦も無く作るんだからビックリしたよ」

「じゃあ、徴式から見て、徴側の可愛い所は？」

何故か分からないけど、カチツとギアが外れたような音が聞こえた気がした。

「フオウ？」

何故か、フオウ君もそう感じたらしい。はて、何が原因なんだろうか。

「えーと……沢山あり過ぎて一気に出てきそうだ。お姉ちゃんが美味しそうにご飯を食べる所や寝起きの緩み切った姿。他のサーヴァント達とすれ違った時の凛々しい顔から出る、頬が緩むような柔らかい声……あのギャップが堪らないよね……」

「フオウ……」

徴弑のお姉ちゃん自慢はまだまだ続く。ああ、そういうことか。

「それから……マスターのマイルームにある鏡で顔の状態を確認していたお姉ちゃんが、突然入ってきたマスターを見て慌てて取り繕っている姿。あの顔は小さい頃、お母さんにやった悪戯が失敗した時を思い出したよ。小さい頃と言えば、マイルームにマスターが居ない時、象とフオウがじゃれ合っているのを見て、勝手に一人二役で、ぱおくとフオウとフオーだけでアテレコしていた時があっただけ……あの姿は人形遊びを思い出したね。小さい頃を思い出す可愛い所は他に……シミュレータ室でコンと一緒に日向ぼっこしている時の寝顔とか、勿論、可愛い時だけじゃなくて凛々しい時もあるよ。例えば、宝具を使っている時……あ、そう言えばお姉ちゃん。うっかりぱおくと言っちゃう時があっただけ……それを私が指摘したら、周囲を見渡して恥ずかしがる姿とか、本当に可愛いんだよなあ……マスターは距離があるから見られないだろうけど、こればかりは僕の特権だからね。象と言えば、マスターの頭に象が上った時の

姿を写真に撮りたいと言って、ゲオルギウスさんを慌てて呼びに行く時の様子とか、串に刺した3色のお団子を食べて頬を緩めている姿とか……あれ、どうしたの、フオウ、マスター？」

「フオ、フオウウウ……」

情報が、情報が……多い！

「いやあ、一つずつ聞くのかな……」と思っていたから沢山出てきて驚いだけだよ」

「あ、その、ご、ごめん……」

さて、どうしようか。さつきより気まづくなつたぞ。それよりも、自分もマシユの良い所を話せ、と言われたら……同じようになるのでは？

「うん、大事な人の良い所は色んな人に知ってもらいたいよね。知ってもらいたいし」

さて、何時までこの空気が保てるのか……早く、早く戻ってきて、マシユ、徴側。そんな

祈りが通じたのか。廊下からカチャカチャと音が聞こえてくる。もしかして、カップの音かな？

「先輩、お待たせしました」

……おや。1人多い？

「ただいま戻りました……あ、弐っちゃん。もしかして私の話でもしていたのかな」

「はんなまー！ぼすぼすとマスターがいるって聞いたから、ワガハイも来た！」

おっと、途中で会ったのかな。まさか太歳星君がここに来るとは。

「はんなま。さつきまでトランプをしていたんだ」

「はんなまー」

いいタイミングで二人が戻ってきてくれた。容器を太歳星君が、飲み物を徴側が持っているみたいだけど……一つはティーポットだから紅茶かな。だけど、もう一つは何だろ。

「徴側、その緑色の飲み物はスムージー？」

緑色だから……ホウレン草かな。

「実は私が食堂の方をお願いをしまして。折角なので、現代のベトナムで飲まれているものを作れないか、と。すると、食堂にいる赤い男性……エミヤさん、でしたか。その方がアボカドでスムージーを作ってくれたんです。是非、マスターにも飲んで欲しいな」と思っています」

「私も此方へ戻る前に少し頂いたのですが甘くて舌触りも良かったですので、先輩も気に入るか」と

マシユがそう言うのなら、遠慮なく頂こう。ところで、エミヤのクラスってやっぱり料理長の間違いじゃない？

「それはその……今更かと」

「それもそうだね、マシユ」

本人の前で言うのと、苦手な食べ物か、健康の為と言って青汁辺りを追加されそうだけ
ど。

「それでマスター、それで次は何して遊ぶんだ。ワガハイもやりたいぞ」

「そうだね。次は……」

今はそれより、このスムーズジーと次に遊ぶゲームでも考えますか。

妹とその友達、時々弟

カルデア一行が新邪馬台国の特異点の事件を終わらせた数日後、卑弥呼は相も変わらず自らの妹のような壱与に振り回されていた。その理由は単純明快、以前の自身と同じようにカルデアのあらゆる場所を案内したことだ。

ただでさえ時代認識が違う上、自分より後に生まれた英霊の紹介など始めると切りがない。未来くに頼るといふ術もあつたが、彼らは彼らで忙しくしていることも多いし、休む暇さええないようにも見える。

そういう状況だったこともあり、このカルデアでも先輩なのだから案内すべきだろう、と自ら案内役を受けたのことが間違ひだったのだろうか。お陰で、卑弥呼としては珍しく疲弊していた。ただ、その案内もあつてカルデアになんやかんややってきた駒姫の案内を壱与自身がやることになったので、今はちよつとした休憩時間だった。

「あーもー……疲れた」

「いやあ、大変でしたねえ」

そうして、食堂のデスクに体を預けていた所に居合わせたのが、邪馬台国の用心棒、違う……新選組の沖田総司であつた。たまたま一緒になつた彼女から、同じように頼んだ

カフェオレを受け取る。そう言えば、山南という同僚が来たようだが、彼の案内は彼女がしたのだろうか。

「そう言えば、山南さんの案内は誰がしたの？」

「ああ、それなら斎藤さんが。新選組の時も仲が良かったんですよ、あの二人」

「へえ……それじゃ、積もる話もある訳だ」

「ま、そういうことです」

二人してカフェオレを飲む。少々疲れた体には、この甘さが心地よい。

「そう言えば、壺与さんはどうしたんですか？」

「今は駒姫ちゃんを案内をしているはず。あの子、友達とか殆どいなかったしから、いい関係になるといいけど」

「さつき騒がしい声がしていた気がしましたが、あの二人だったんですか」

きつと、目を輝かせて案内する内にテンションが上がった壺与と、とんちきにも順応してくる駒姫がカルデアの色々な部屋を見たら、大きな声の一つも出るだろう。実際の所……

「私も最初はああだったことを考えると、皆には苦労させたわね」

「始めは皆、そんなものでしたよ。それにしても……」

沖田が飲みかけのカフェオレを見る。

「駒姫さんで思い出しましたが、ラテの飲み物を見るとあれを思い出してしまいますね」
「あー……」

元はと言えば、超千利休が抹茶ラテを消し去らんが為に起きた〔北野大茶武道会（嘘）〕以降、やらかしの張本人でもある千利休は茶を点てる時以外で出てくることなく、駒姫の脚に専念しているらしい。尚、それを良しとした駒姫は抹茶ラテを毎日のように飲んでいる、とか。勿論、お代（QP）は千利休の持ちである。

「何であの人、あんなに抹茶ラテを嫌うんですかね」

「うーん。壺与ちゃんは甘くて美味しいからと言って、駒姫と同じように飲んでるけど……何でだろうね。私は

ハマグリやお米と合う普通のお茶の方がいいかなあ。暫くはいいけど」

「私もお団子と一緒に食べるならお茶ですけど……同じく暫くは」

一生分で飲むであろうお茶を短期間で飲んだ上、接してきたのだ。二人が暫くお茶から離れたがるのも道理である。それはそれで……お茶を点てることに興味を持った者もいた。

「やあ、ここにいたんだね。沖田くん、卑弥呼様」

「おっと、山南さんですか……今度はどんななお茶ですか？」

緑色の液体と見て、沖田と卑弥呼が真っ先に浮かべるは抹茶の類。しかし、香つてく

る匂いは鼻を抜けるような爽やかな香りだ。もしかして、抹茶の類ではないのだろうか。

「ああ、これは香草のお茶だよ」

「香草……ハーブとミントとかのことですか？」

1人、香草と言われてピンと来ていないのが卑弥呼である。

「あ……香草つて道端とかに生えている、良い匂いがする草のこと？」

「おおまかにいえば、そのような類ですね。食堂にいる方々に少し都合して貰ったんです」

「へえ、そういうことでしたか。気に入ったんですか？」

沖田の問いに、山南が頷く。

「ええ、本を読む時の供にも良さそうです。沖田くんも今度飲んでみると良いですよ」

「山南さんの勧めですし、もう少ししたら飲んでみようと思います……ただ、暫くは緑色の飲み物は控えたいですね」

「ははは……まあ、緑色の液体はこれでもかと言う程見てきたからねえ……それにしても」

周囲を見れば、古今東西の英霊たちが歩いている。果たして、斯様な場所が他にあるのだろうか。

「改めて、カルデアは凄い所だね。まあ……あの時から思い知った事ではあるけれど」

「山南さん、あの時みたいな怖い目をしなくていいですから。あんなことは早々……」

山南の言葉を否定しようとした沖田だったが該当する事件は……あまりにも心当たりが多過ぎた。

「おやあ、そこそこありますね」

「だろうね。それに沖田くん。斎藤くんから聞いたんだけど……」

「何でしょう?」

それとなく対応していた沖田だが、ある直感が働いていた。多分、自分に関わる何かに突っ込みが入る、と。ノツプについては答えられると思っていたが、山南が指摘したものは別のことだった。

「カルデアには、水着霊基というものがあるらしいね。それだけでも訳が分からないんだけど、斎藤くんから聞いた所、沖田くんの水着霊基には何故かジェットが付いているとか……いや、水着にジェットって何だい?」

「今、それを突っ込みますか!」

それから3人で会話をした後、山南は人と会う約束しているのか席を外す。恐らく、斎藤一の所へ向かうのだろう。沖田も沖田で、いつものボイラー室横に戻ると言う。そ

んな二人と分かれた卑弥呼は、もう一杯カフェオレを頼みながら、自分自身の後輩である壱与を食堂で待っていた。駒姫とは早々に仲良くなつた話を聞き、驚きこそ覚えた卑弥呼だが、自分の妹のような壱与がカルデアでも偏見を持たれずに上手くやれていることは素直に喜ばしい。

「すみません。お待たせしました、卑弥呼さん！」

「卑弥呼様、お待たせしてすみません」

そうこうしている内に、壱与が駒姫と共に食堂へやってきたようだ。待ち合わせの時間には多少遅れているが、そこは気にしない。

「いーのいーの。私もちよつと休憩したかったし。それで、駒姫ちゃんはどうだった。色々回つてみて」

「カルデアの生活がとても楽しみになりました。暇を見てはマスター様の今までの旅路を見たいと思っています」

「壱与も見たいです。それから、他の方たちからちらほらと聞いたんですけど、水着霊基って何ですか？」

女性のサーヴァント達にとっては、一夏の勝負衣装とも言える水着霊基。相手が違うとは言え、再び話題に出されるとは思っておらず、卑弥呼の返す声にも力が入る。

「あー！私もまだゲットしていないのに、その話をするー？」

「だって、夏は水着を着る物だって色々な方たちが」

日本出身のサーヴァントで水着霊基を持つ者も多い。源頼光、清少納言、紫式部と言った面子から、身近な人物で言えばノッブや沖田も該当する。気にならないと言えば嘘になるだろう。何故か沖田の方は、ジエツトパックが標準装備となつたが。

「それについては、私も気になっております。いつか、海での水遊びと言うものをやってみとうと思っております」

「あー……」

海での水遊び……それを聞いて多少の苦笑いが浮かんでしまう。それも仕方ない。まともに水遊びをしたのは何処だつただろうか。未来くんに聞いても答えられないのではと邪推してしまう程には、記録に無いのだ。強いて言えば、何時ぞやのキャンプと冒険譚だろうか。その辺りは真つ当だつた気もする。ただ、何れも水遊びが本題では無かつた気がする。

「うーん、まあ、後々分かるんじゃないかなあ。多分、夏に何かあると思うよ」

「まあ、卑弥呼様つたら。誤魔化すなんて」

「宣託でも分からないんですか？」

「……この前の【北野大茶武道会】（嘘）みたいなことが、度々起きると言つたらどう思う？」

とある夏はレースの途中から脱獄が始まったらしい。どうしてそうなった。

「え……………」

「まあ、それは。駒は一層楽しみになりました」

思わずポカんとする壺与と、一層イキイキとする駒姫。後者の今後が心配である。

「それで、ここで集合にしたのは何か理由が？」

「ああ、そうそう……………一緒に食事でもどうかかなーって」

「卑弥呼さん、それはいつも一緒のような……………それとも何か、特別なものが出てくるんですか？」

卑弥呼は生前の経緯から、誰かと食事を共にするようにしていた。例えばそれは新選組、あるいは日本で名を連ねた戦国武将……………時には、それ以外の時代の日本出身のサーヴァントなどが多い。ただ、壺与がカルデアへやってきてからは、ほぼ毎回のようには壺与と食事を共にしていた。

「そういう訳じゃないんだけどね。ただ、今日はカレーが出てくるって聞いたから、一緒に食べようと思って」

「カレー、ですか？」

ピンと来ていない駒姫に対して、前々から卑弥呼のいるカルデアに興味津々だった壺与の反応は一味違った。

「待つてください。白米に合つて、ニンジンやらハマグリとか色んな食べ物に合うとい
うあの……!?!」

「そうそう……つて、知つていたんだ。最初は見た目で驚く人がいるから、私もいた方が
いいかなつて」

「よし、それでは早速頂きましょう!」

風のように、壱与が列へ並ぶために動き出した。が、直後に赤い服を着た白髪の男性
に注意を受けたらしい。男性なのに、その姿はさながらオカン。ハマグリをより美味し
く調理してくれる、素晴らしい料理人である。

「あーあー、エミヤくん怒らせちゃったよ。ま、あの分だと大丈夫そうだけど。ところ
で、駒ちゃんは何か希望とかある……つて、あれ?」

壱与の方を見ていた際に、靈基が駒姫から利休に代わっていた。

「ほう、カレーですか。私の時代では知る由もなかったですが、聞く所によると香辛料を
ふんだんに使つた料理だとか。それでも尚、人にあつた味を選べるものなのか。利
休、驚嘆」

「その辺の味加減は、作つてる人達に聞くしかないかなあ……それでも、一つの料理で大
人から子供まで喜べるのつていいよね」

「それは……もつともにごいします。はて、そんな料理であれば機会があれば私も頂きと

うございます。それでは、駒姫様」

驚く間もなく、靈基が利休から駒姫へと戻る。

「もう、利休様は突然なんですから」

「私達は慣れたけど、初めて話した人を見ると驚くかもね。それで、さつき言おうとしたことだけど、味が甘口、中辛、辛口と選べるんだ」

裏メニューで激辛があるらしいが、頼む面子が固定されている上にとても、とても辛い食べ物をお好む人たちが頼まないらしい。

「まあ、味も選べるのですね。それでは甘口をお願いします」
「おっけー。それじゃあ、少し待っていてね」

場所取りを兼ねて駒姫を待機させて、駒姫の分のカレーも貰いに行く。今日の具材にハマグリこそなかったが、いつも通り美味しいに違いない。

「よし、それじゃあいただきますー！」

卑弥呼の声を皮切りに、各々が匙を持つて食べ始める。初めは見た目に驚いていた者と駒姫だったが、一口食べるとそれは一変。無言で匙を進めていき、あつという間に食べ終えた。

「よし、今日もお代わり貰おうかな。二人はどうする?」

「そうですね。私もいただきます。駒姫ちゃんは?」

「少量であれば、頂きたいと」

「分かったわ。辛さは甘口でいいの？」

「ええ、お願いします」

「あ、それじゃあ今度は私が運びますね」

卑弥呼と壱与が再度列へ並び……直ぐにその番がやってきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとう、ブーディカさん」

カレーをそれぞれ受け取り、駒姫のいる席へ戻る……その途中。

「あ、そうそう。この後少し、時間ある？」

「ええ、大丈夫です。もしかして、駒姫ちゃんはいない方がいい感じですか？」

「そうね。いてもいなくても変わりにないけど、出来ればね」

「分かりました」

「うん。じゃあ、お代わりも食べちゃおうか」

「はい！」

そんな会話と共に駒姫の待つ席へ戻り、三人で再びカレーを食べ進めていく。

その途中……

「カレーに合う漬物はらつきようだと思っんです！」

「私は……福神漬けの方が良いかと。何しろ、縁起も良さそうですし」「うーん、どちらとも美味しいからなあ……」

そんな会話があつたとか、無かつたとか。

そうして食堂での食事を終え、卑弥呼と壺与は廊下を歩いていった。駒姫はぐだぐだ以外の日本のサーヴァント達に会うと言つて食堂を出た所で分かれたが、その直後に利休の霊基となつている辺り、彼らにお茶を点てるのだろう。

「それで、今から何をするんですか？」

「紹介したい人がいるの」

「え、もしかして未来さん以外のいい人なんですか!？」

紹介して、と何度言つても相変わらずぼかすので、これには驚きだ……と思つた壺与だったが、どうも卑弥呼の表情が違う。

「違う違う。ちよつと未来くんから聞いたかな、と思つて」

「何を、でしょうか。聞かれたと言えば……私と卑弥呼さん周りの話でしたけど、弟さんはここに居ないですよね？」

「そうそう。だから、多分知らないだろうなって思っ」

何となく話の流れを掴んできたので、驚きを露にする。そんな人物はこのカルデアでは見ていなかったし、いたならば卑弥呼から紹介するだろう。

「え、もしかして卑弥呼さんの弟さん、いらっしやるんですか!？」

「本人はいるんだけど、その一部になっているというか」

「えーと……どういう状況でしょうか？」

始めは本人に会えると思っていたが、どうやらそうでもないらしい。

「駒姫ちゃんと利休さんが一心同体と言えば、今から会う人と弟くんの関係は……その人の中に弟くんがいる感じ、かな」

「えーと……霊基には刻まれているけれど出てくることはない、ということですか？」

「そうそう。そんな感じ」

そうして歩いていく内に目的の部屋の前に着いたからか、卑弥呼がノックもせずにある部屋の扉を開ける。

「やつほー、信勝くん」

「姉上、姉上です……って、あなたでしたか」

姉上と呼ばれる人物では無かったからか、露骨にテンションが下がった男性。黒い服装を基調とした細身の男性は壱与からすれば見知らぬ細身の人物だが、その男性がそう

なのか。

「卑弥呼さん、もう夜ですよ。そう言えば、今回の特異点でも色々あったとか。僕も一緒に居たら、姉上にお茶を点てられたかなあ」

「まあ、終わった後のあれは酷かったけどね。それはそれとして、信勝くんが従えるちびノブの新しいタイプがいたわよ。何で定期的に新しいタイプが出るのかしら……ちびノブ」

「言うまでもなく、姉上の可能性は無限大ですからね。それにしてもお茶ノブでしたか。聞いた所によると、一部は会話が出来たそうですね。試しに僕もやってみるか……ところで、隣に居るのは誰ですか？」

始めは様子見の為に二人の会話を聞いていた壺与だが、その男性の内側から何か懐かしい雰囲気を感じていたことに気が付いた。より正確に言えば、その男性に……というよりはその霊基にである。

「あ、初めまして。私は邪馬台国二代女王、壺与と申します」

「邪馬台国二代女王……ああ、そういうことでしたか」

何故、唐突に卑弥呼がやってきたのか、信勝には合点がいったらしい。徐に手のひらを胸元へ重ね、懐かしむように口を開く。

「ええ、既にお聞きしたかと思いますが……いますよ、確かに」

「……………」

「その人がどう生きて、どう死んでいったのか。それは僕にももう分かりません。ですが、とても立派な人だった、ということだけは分かります」

その言葉に卑弥呼は思うことがあったのか、「……そっか」と言葉を漏らす。

「今、靈基が少し温かく感じるんです。多分、懐かしい人に会えて嬉しいんだと思いますよ、壺与さん」

「……そっか、ありがとう」

「それで卑弥呼さん、用件はそれだけですか？」

先程とは打って変わって、つんけんとした態度を取る信勝。どうやら、この態度が素のようだ。その反応に慣れている卑弥呼は、あっさりと言を返す。

「そうそう、急に来てごめんね。それじゃ、戻ろっか」

「あ、はい」

「今度は急に来ないでくださいよ。僕だって驚くので」

「ごめんごめん。それじゃ行こっか」

「あ、はい。失礼します」

信勝の部屋を出て、卑弥呼の部屋まで戻るその間。

「やっぱり弟さんは……私達のようにはなれなかつたんですね。そもそも、私がここに

いるのも奇跡のようなものですけど」

「そうねー。だけど、いたことはあの時の皆が覚えている……それでいいじゃない」

「……………」

それが強がりだと感じた壺与は、卑弥呼の様子を伺う。

「だって、例え人の姿をしていなくても。あの時、あの場所にいたのは確かだもの。まあ、此処へ来る前のように話をしたいとも思うし、女王になる前のように遊びたいと感ずることもあるわよ。だけど、弟君がいたことを、私や壺与ちゃんが、あの時の皆が覚えていれば、きっと大丈夫。私の託宣もそう下りるわ、きっと」

「……………」

「それにね。信勝くんも弟くんのように似たような存在で、弟くんの霊基と合わせてやっと現界出来る存在なんだって」

確かに信勝と呼ばれる男性の纏っている雰囲気は、名の知れた人物より細い……というよりは弱いと壺与自身も感じていた。

「だから……それでいい、って思えるんだ」

「ええ、そうですね」

確かに、卑弥呼さんの弟は思慮深く穏やかな人だった。自分のような部外者も、同じ邪馬台国の人として受け入れてくれた……信勝さんの言う通り立派な人だった。卑弥

呼さんと同様に恩人と言える人だった。

「はい、しんみりとした話題はこれでおしまい！」

「そうですね。それじゃあ、明日もお願ひしますね！」

一通りの紹介こそしてもらったが、簡単な紹介だけだったので使い方がまだ分からないものも少なくない。例え、卑弥呼が分かかっていない施設の使い方があったとしても、自分自身が覚えればいい……そう壺与は感じていた。

「えー……明日も。まあ、いいけど」

ため息交じりの言葉だったが、卑弥呼の表情は明るかった。

主無くとも、人は在り

壺手は珍しく時間を持て余していた。普段なら駒姫と一緒に話をするか、卑弥呼さんと一緒に行動するかが多いものの、今はその二人が不在。

「することと言つてもね〜」

図書室によつて本を借りることも考えたが……ストームボーターの点検にリソースを割いている為、今は閉館しているらしい。聖杯のお陰で多少は読めるようになってくるものの、そこまで難しい本が読める訳でも理解できる訳でもない。

「いつものボイラー室横もなあ……」

誰かいないかと話せる人を探してボイラー室横へ行こうにも、駒姫ではなく、千利休としての他のサーヴァント達へお茶を振る舞っている。流石に、そのタイミングで入ろうとは思わなかった。誰がいるかは分からないものの、雰囲気を読まずに抹茶ラテを頼もうなら、作つてくれはするだろうが凄まじい顔を見せた時もあった。あ、抹茶ラテは美味しかったです。

「卑弥呼さんは卑弥呼さんで、医務室で何かしているらしいし……」

姉のような卑弥呼さんは言う、これまた別件で席を外していた。新たにやってきた

高杉さんとやらが病弱を克服していることに愕然として、沖田さんが病弱を根本的に治したいと言いつ出したらしい。以前の託宣で即座に無理だと出たにも関わらず、だが、それはそれとしてその試みに興味を持ったらしく、それに付き合っているとか。

あ、新選組の人達も興味半分で見に行つたみたいです。私個人としても気にはなるけど……医務室の臭いが苦手なのだ。なので、大きな怪我をしない限りは寄り付く予定はない。人伝で聞いた話だと、マッドサイエンティストとバーサーカーの看護師という組み合わせが何時もの面子であり、患者によつては悲鳴を上げるのもしばしばあるのだとか。怖くないですか、カルデアの医務室。

「ふうー……どうしよっかな」

こういった暇な時の行動は主に三つ。食堂で料理を作っている人達をのんびりと眺める。ああやって料理が出来上がるのを見るのは生前では出来なかつたので見ているだけでも面白い。そして、つつい食べ過ぎる。若しくは、月夜のシミュレータで体を動かす。それからもう一つ、とりあえず未来さんの部屋へ行ってみる。

「……そうだなあ」

今日はなんとなく未来さんの部屋へ行こう……そう決めた。

未来さんの部屋はいつも騒がしい印象だ。と言つても、本人が不在の時の方が騒がしい傾向にある。

「……今日はいるかなあ」

そんな未来さんだからか、その部屋の私物と言えるものは少しの遊び道具と人形が3体置いてあるだけ。昔の私のように、生活感が薄い。もう少し未来さんの趣向なんかも分かればと思うが、度々微小特異点が発生して現地へ行っていることから、寝る場所と多少ゆつくりする場所程度にしか認識していないのかもしれない。まあ、もつと大きな理由はきつと……夜の襲撃だろう。マスターと接点を多く取りたい気持ちはよく分かる……出来れば、私だつてそうしたい。けれど、流石にそんな状態では休まる時も無いだろう。それは私だつて何時かは嫌な気持ちになると思う。まあ、そんな状態なら私物を置きたいと思えないよね。

そんな噂をカルデアに来て早々に聞いてしまったので、夜だけはあまり近付かないようにしていた。

「おじやましませ……」

煩くならないように、けれども他人の部屋に入るので声を掛ける……ものの、未来さんから返事はない……ということは、不在なのだろう。そのことに少しだけがつくりしつつ、未来さんが何をしているかを予想してみる。マシユさんと一緒にいるのだろうか。それとも、暇な時にマスターだけが作れるという噂の青い林檎の関係だろうか。見たこと無いんだよね。あれ、大量にあるらしいけど、何処で保管しているんだろうか。

小さく音が鳴って扉が開く。その先にいたのは……

「……………」

そうして、いつもの先客達がそこにいた。

今日は朝から素晴らしいことがあった。何と、ぐつさまが項羽と食事をするシーンを拝めたのだ。偶には研磨しておこうと術に時間を割いていたら、ぐつさまと遭遇せず一日を終えてしまう……そんな日もあるから、朝からそのお姿を拝見出来るだけで徐福は今日一番の幸福なのです。

「あーうー……………」

が、そのぐつさまウオツチも時間が経てばやがて終わるもの。今日もいつも通り項羽……様と一緒に食堂を後にされる。ああ、何時見てもお美しい。項羽と一緒に……なのはもう割り切った。だからここではその魅力を語ろう。一緒に同じ飲み物を飲むときのお笑顔、安らぎを感じているその微笑み。その全てが美しい！

例え、誰かに育てられた花が如何に美しくとも、野に咲くぐつさまの美しさには遠く及ばない。ああ、このあふれ出るぐつさまの魅力を誰かと語り合いたい！

「……でもなあ」

なのに、蘭陵王からは何故か無視される。はあー、私の方が古参なんですけどー!? マスターはマスターで親しいけれど、なんか違う。なーんか、違うんよね。マシユちゃんが一番話合うと思っただけ……

マシユちゃんもちよつと違う。まあ、あの二人がいるから今のぐつさまが在るし、会えたからいいけど。

「あ……やつべ」

おつと、タイミングを間違えると始皇帝に遭遇する。ダメ、折角の気分が最悪になる、主に胃痛で。

「はーあー……どうしよっかな」

マシユちゃんはマスターさんと一緒に任務らしいし、前みたいなの妖精騎士杯とやらのようなトラップの依頼もない。かと言って、術で何かを作る気も湧かないので……暇だ。

「仕方ないから、寄ってやりますか」

何か、この前も夜間に忍び込まれた被害とかあったらしいし。ま、あの部屋。何にもないんですけどね。

「よう、いるかー」

と言つても、いない日も多いんだけど。

「あらう？」

この部屋で偶に見掛ける顔が複数、そこにいた。

カルデアには様々な施設がある。食堂、召喚室、ブリーディングルーム、管制室、青銅の林檎畑、医務室、シミュレータ室、個人の部屋……そして、今、ヨハンナがいる場所もその一つ。聖卓だけがある小さな部屋……そこは物置としては手狭な小さな部屋だが、神を信じる者としては欠かせない場所だった。

「……………」

今はその部屋で祈りを捧げているが、実はヨハンナ自身の部屋にもある。ただ、今日他のサーヴァントも利用するような礼拝堂で祈りを捧げたいと思つたのだ。

「……………」

祈りを終えて、小さな礼拝堂を後にする。祈りの場所が変わることはあれど、これは日課だった。あの悪夢のようなバレンタインを通した後でも変わらない……自身が、自身としてある為の大切な儀式なのだ。

「どうしようかな、この後」

あの悪夢の出来事を通して話すようになったラーマ様から、過去の特異点で何があつたかを聞いてみようか。それとも、ナーサリーさんやジャンヌ・リレイ様と一緒にお茶会に参加させてもらおうか。それとも、ジャンヌ・オルタ様と話をしてみようか。

「うーん……」

礼拝堂へ来る前に食事は済ませた。マスターの故郷の食事とざっくりした要望を出した所、随分と種類があつたので選ぶのに時間が掛かってしまった。その国特有の食事はどの地域にも勿論あるが、他国の食事文化をあれほどまでに取り込んだ文化もそう多くは無いだらう。

「あ、この辺って……」

そう言えば、マスターの部屋が近かつた筈だ。折角だし寄って行こう。何かあるかもしれないし。

「……」

扉が空く瞬間……少しドキドキすることがある。あれは夜だったか、クエストを共に巡った後にブリーディングが入っていたことから、終わった後にチョコレートとコーヒーでも差し入れしつつ、少し話をしてみたいと思つて部屋へ向かつた時だ。……あの時は怖かつた。誰も居ないマスターの部屋に三人のサーヴァントが潜入していた時の

事……そう言えば、その三人がある特異点で取った行動から恐れられているとか何とか

……

「……あ」

そうして、同じ時間帯に出くわすサーヴァント達に遭遇した。

「徐福様に壺与様でしたか。こんにちは」

「あー、ヨハンナ。マスターに用事、いないよ?」

かつて秦という国で道士をされていたという方で、マスターの国では多くの伝説を持っているとか。何か性別が違うらしいし、ベッドで寝転ぶ様は自堕落しているようにも見えるが……やはり、伝説に名を遺した人物。私の素を見抜かれてしまった。

「ええ、そのようですね。それから壺与様もこんにちは」

「はい、こんにちは」

そして、私の素がバレた時に一緒にいた壺与様。邪馬台国の二代目であり、その代で国が無くなった、らしい。力の属性的に対極の位置にいるが、どうもシンパシーを感じる。

「それにしても、まあたこの面子か」

「そうですね。まあ、未来さんが眠る前に遊びにくるよりははずっと健全かと」

「えーつと……聞いたことがありますね。夜に来ると襲撃される、とか」

「まー、私は興味ないけどね。案外、このぬいぐるみが何とかしてんじやないのー？」
三人寄れば何とやら。

「確かに、あまり物が無いマスターの部屋に置いてあるんですから、意味があるのかも」
「私はあまり分からないのですが……そういうものなんですかねえ」

ぬいぐるみが動いて侵入者を撃退する……ですって、そんな馬鹿な。

「えー、でもさー。このちっさい槍を持ったぬいぐるみなんて、所々修繕した跡があるよ。ハハ」とか

「あ、ほんとですね」

「えー……」

うーん、俄かには信じがたい。けど、確かにあるね、これ。

「一体、ここで何が起こっているんですか……」

「知らない。ま、私たちに被害がないから、いーんじやない？」

「それも……そうですね」

触らぬ神に祟りなしと言いますし、触れない方がいいかもしれませんね。それにしても、またこのお二方と会いましたね。

「良ければ、普段何をされているかお聞きしてもいいですか。カルデアへ来てから短いので、どのような人がいるのか分からないのです。身の回りというか、関連のある人は

把握していますが、他の地域の方となると……」

「あ、いいですよ。ほら、徐福さんも」

「えー、何でー。ま、することないからいいけどさ」

女三人寄れば市をなすとはこの事か。とは言え、誰かに敬われる訳でも無ければ、こちらにも氣遣う必要も無い……そんな会話もきつと楽しいものだろう。話題が続く中、手持無沙汰だったので簡単なゲームをすることになった。といつてもトランプでババ抜きや7並べといった簡単な遊びだ。聖杯によつて知識がある程度インストールされているが、知っているだけなのとこうして実際にやつて体験するのはやはり違う。結構、徐福様が意地悪く8を隠し持っていたりしたりなど、新しい発見が一杯だ。

「あー、負けちゃいました」

「ふふーん、これなら負けないもんね」

本来の部屋の持ち主のいない昼下がり。彼女らは何気ない会話に花を咲かせて時間を過ごしていた。